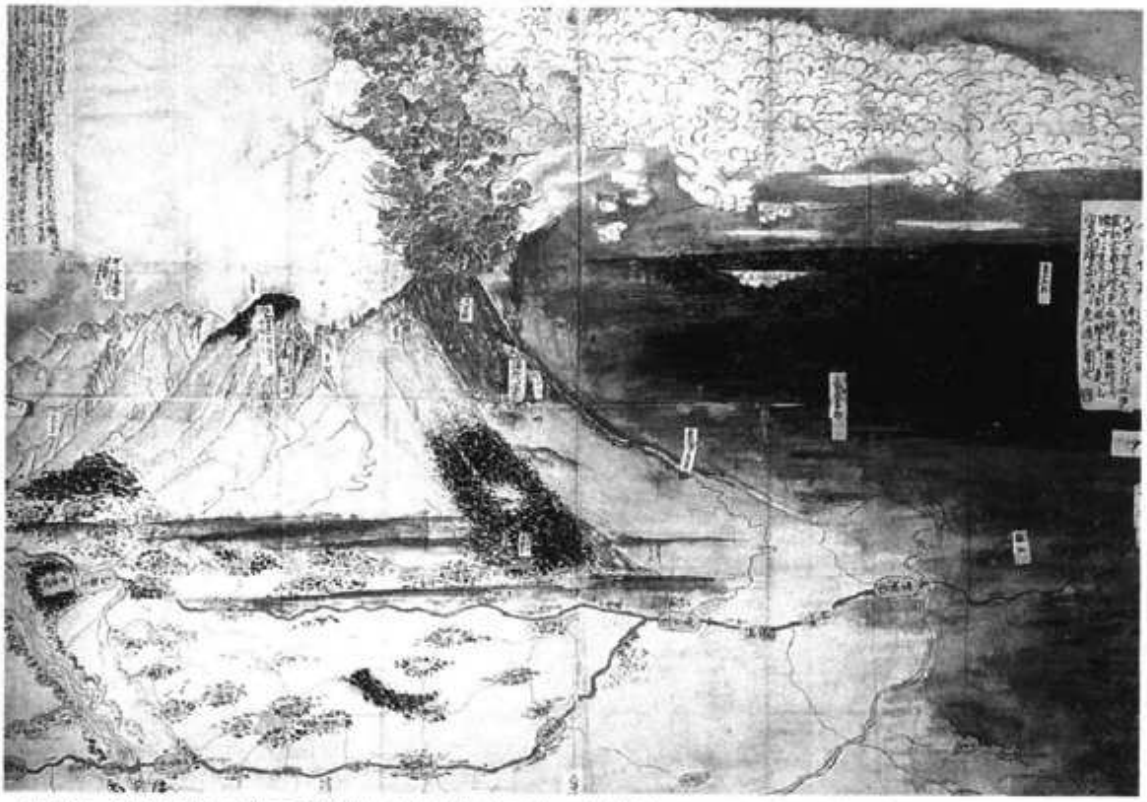


写124　浅間山噴火を伝える絵図　天明三年(1783)の参考例だが、火山灰が天空に達し、それが偏西風に乗って群馬側に降り、夜のような暗さとなっていることがうかがえる。(大澤酒造民俗資料館提供)

が弱い。

さて、こうした噴火の歴史のなかでとくに規模の大きかったものが平安時代の天仁元年と推定される噴火と、江戸時代の天明三年の噴火の二つである。

天仁元年の噴火のパターンとしては、「其煙天に属し」と『中右記』にあるように、成層圏に達するくらいの噴煙柱が吹き上げる爆発的な「プリニー式噴火」が最初に起きて軽石が火口から噴出し、続いて灼熱の火砕流が高速で流れ下り、やがて溶岩が流れ出すというものであった。この時の噴火については、噴出物の野外調査などにより、そのようすが明らかにされつつある。御代田町誌『自然編』でも、その噴火のようすがくわしく記載されている。

天仁元年の噴火では、今の御代田町から軽井沢町にかけての浅間山南麓と群馬県嬬恋村などの浅間山北麓が「追分火砕流」とよばれる火砕流に覆われた。また、その一部は御代田町と小諸市の境の蛇堀川を流れ下った。「追分火砕流」の面積はおよそ八〇平方㎞、体積は六億立方㍍、平均的な厚さは八㍍といわれている。この噴出総量は、平成三年の雲仙普賢岳の噴出総量の三倍にもあたるものである。

御代田町西軽井沢や向原地区の地表面は、私たちが「浅間の焼け砂」とよぶ黒っぽい土砂により覆われるが、これが「追分火砕流」の堆積物である。また、「浅間の焼け石」とよばれる石垣によく利用されるキャベツ状の丸く黒い石が「追分火砕流」の火山弾である。

また、この噴火で降った軽石は「浅間B軽石」とよばれ、偏西風によって浅間山から東方に降下し、軽井沢町峰の茶屋付近では三㍍

写125　浅間の焼け石（追分火砕流の噴出物）

も積もり、群馬県前橋市では二〇㍍以上の軽石の堆積が確認されている。御代田町域でも「追分火砕流」に覆われない湯川の対岸、豊昇地区のゴルフ場付近ではこの堆積が確認できた。

「追分火砕流」の発生後、火口から北麓にむかって「舞台溶岩流」が流下した。噴火はその後、小規模な水蒸気爆発に変化し赤褐色の火山灰を山麓に降らせたり、ふたたび噴火の勢いを取り戻して軽石などを降らせたりしている。ただ残念ながらこの噴火がどのくらいの期間続いたかは今のところはっきりとわかっていない。

「浅間焼け」による火山災害

『中右記』に「罹災積庭国内田畠之に依りて已に以て滅亡す」と国司の報告にあるように、上野国（群馬県）では軽石の降下による田畑の埋没が甚大な被害となった。現に群馬県では「浅間B軽石」に覆われた古代の水田が八〇か所以上も発掘されており、文献の記載を裏づけている。

しかし、天仁元年の噴火の信濃国側の被災状況やその復興のようすについては、残念ながら記録として残されていない。天仁元年、時の信濃国司は『中右記』にも記された大江朝臣広房という人物であった。この未曾有の大惨事について信濃国側から朝廷への報告がなかったとは考えられないが、ここでは噴出物等の観察から得られた所見をもとに、当時の災害のようすを少し想像しておきたい。そのための参考例として、災害状況の詳しい記録が残る天明三年の噴火のようすをまずのぞいておくことにしよう。

「天明の浅間焼け」といわれる天明三年の噴火も天仁元年の噴火パターンと同様、爆発的な「プリニー式噴火」により軽石が火口から噴出し、「吾妻火砕流」や「鎌原火砕流」とよばれる高温の火砕流が北麓を流れ下り、「鬼押出し溶岩流」が流れ出すというものであった。天明の噴火では、とくに浅間山北麓の群馬県側の被害がいちじるしかった。

浅間山北麓の今の嬬恋村の一部にあたる鎌原村では、九三軒あった民家は火砕流が取り込んだ土石なだれによって全滅し、五九七人の村民のうち四六六人が死亡、馬は一七〇頭が死亡した。またその土石なだれは吾妻川に流れ込んで流域は泥流により千数百人が死亡、一〇〇〇軒あまりの家屋が流出するという大惨事となっている。鎌原観音堂において土石なだれにのみ込まれ不幸にも息絶えた女性二体が生々しく発掘されたのを御存じの方も多いだろう。

いっぽう、北麓に比べ被害の少なかった浅間山南麓でも、軽井沢宿では全戸一六二戸のうち、降下した高熱の軽石により焼失した家五二戸、屋根に積もった軽石の重みで倒壊した家八三戸となった。高熱の軽石は青年を直撃して死亡させた。軽石が降るなか、人々はふとんや戸板で頭を保護し逃げ出した。また、御代田でも広戸・草越・梨沢・

図116　御代田町を覆った追分火砕流（1108年）の広がり

久能・面替・児玉などの住民が、身の毛もよだつ恐ろしさで夜逃げをするさまなどパニックに陥った状況が古文書に記されている。

さて、こうした生々しい災害記録も参考にし、ここで天仁元年の噴火による浅間山麓の被災状況を想定するとつぎのようになろうか。

① 「追分火砕流」は浅間山麓を通過する「東山道」を埋めつくし、その交通を遮断した。不通となった東山道は、湯川左岸などへ一時迂回を余儀なくされたことが考えられる。

② 東山道の駅家「長倉駅」が「追分説」にしたがって軽井沢町追分地域に存在した場合、火砕流により「長倉駅」はひとたまりもなく壊滅したであろうこと。

③ 御牧「塩野牧」で清万周辺に牧場施設の一部があった場合、その施設は「追分火砕流」をかぶり壊滅したであろうこと。

④ 御牧「長倉牧」で追分周辺に牧場施設の一部があった場合、その施設も火砕流をかぶったであろうこと。

⑤ 「追分火砕流」が流れた現在の御代田町東部から軽井沢町追分原に当時の集落や耕地があったとしたら、それは完全に埋めつくされてしまったこと。火砕流は、時として一〇〇〇度の高温をもち、秒速五〇～六〇㍍の速さで流下するので、付近にいたらひとたまりもなく焼死してしまう。

⑥ 「追分火砕流」は軽井沢大橋付近で湯川に到達し、また面替の突切峡（露切峡）を文字通り突っ切って湯川の対岸にまでおよんでいる。湯川に流れ込んだ追分火砕流は、泥流や洪水などの二次災害を流域のムラムラへ起こしたことも推定できる。

「天明の浅間焼け」の二倍の量の噴出物を出した天仁の噴火では、浅間山麓が当時無人の地でもない限り想像を絶する被害を避けられなかったに違いない。追分火砕流を直接的にこうむらない塩野や小田井区からはたくさんの平安時代の住居が発見されているので、追分火砕流の直撃を受けた場所では古代のムラが人知れず眠っている可能性がある。新幹線路線についての発掘調査によれば、児玉地区の池尻遺跡において、追分火砕流の下から、平安時代の竪穴住居跡が発掘された。この住居は追分火砕流の直接的な影響をうけて焼失したものではないらしいが、噴火前の集落の存在を物語るものとして貴重である。

さて、こうした災害に対しどのような復興策がとられたのだろう。群馬県での発掘の状況からは、上野国側の人々はその降下軽石に屈し耕地を放棄することなく水田の復旧に取り組んでいることがうかがえる。しかし、八ヶ岳の「追分火砕流」が覆い荒れ野となった浅間南麓ではいかがなものだったのだろう。東山道も以前の道を掘りおこすわけにはいかず、火砕流堆積物の上を通過したにちがいない。ときの朝廷は噴火から二か月後、祈禱の儀式を行なってこの大災害が鎮まることも祈願している。このほかの事例では、震災などによって租税が免除されたり、義援米の支給がある場合もあったらしい。ちなみに天仁元年の二〇年後の大治三（一一二八）年の浅間噴火では、租税の免除が上野国司より上申されているが、朝廷は被害状況を知りがたいとして否定的な意見を付し、その申し出を勅定にゆだねたとの記録が『長秋記』にある。真楽寺は伝承によれば浅間火山の鎮静のため建立されたともいわれているが、天仁や大治の噴火の時にはすでに存在していたものと考えられる。寺にいた人々はその驚異を目のあたりにして、ますます浅間山鎮静の祈りを深めたことであろう。

現在、平穏な活動を続けている浅間山であるが、数百年に一度といわれる大噴火による過去の災害史は、われわれに多くの教訓を語りかけている。

仁和の大洪水

仁和四（八八八）年五月八日、信濃国は山くずれに端を発した大洪水に見舞われた。これが「仁和の大洪水」である。十一世紀に成立した『類聚三代格』によれば、「八日、信濃国山頽れ河溢れ、六郡を唐突し、城廬地を払って流漂し、戸口波に随って没溺す」とある。

「仁和の大洪水」に関する記事は『日本紀略』や『扶桑略記』（ただし扶桑略記では仁和三年（八八七）七月三十日のできごととなっている）にもみられる。

この記載からは、具体的に信濃国のどの山や河川あるいは郡をさすのかはわからないが、信濃国で六郡といえば、高井・水内・埴科・更埴・小県・佐久をあてるのが妥当であり、その河川は千曲川とみるのが一般的なようである。また、山崩れとは八ヶ岳の崩壊をさすものという説もあるが、確証が得られていない。

更埴市の五輪堂遺跡では砂層に埋没した住居跡が発掘され、長野市の石川条里遺跡では砂層に埋没した水田の跡などが見つかっており、これが「仁和の大洪水」のによって埋没したものともみられている。「仁和の大洪水」が千曲川によるものとして、千曲川より若干の距離

をおいた御代田町城でどれだけの被害があったのかはわからない。御代田地籍の南端で佐久市との境にある前藤部遺跡では、二㍍にも達する洪水砂層が発掘されており、この洪水砂層の上に平安時代前期の住居や中世の建物がつくられていた。つまりこの洪水砂層は平安時代前期以前のものであることがわかるが、これが仁和の大水害による洪水砂層に対比できるものかどうかはむずかしいところである。しかし、いずれにしても古代に起きた水害による洪水砂層のひとつであることには間違いない。この洪水砂層の上からは畑の畝の跡も見つかっており、災害後もこの場所が放棄されることなく居住地や畑地として利用されたことを物語っている。

このほか古代の災害には現在と同様、冷害などによる飢饉や地震、疫病、蝗の害、台風などがあった。古代の人々にとってこうした災害は、今以上に大きな脅威であったものと思われる。

三　古代の寺社と信仰

長倉神社と式内社　十世紀の初めに作られた「延喜式」「神名帳」に載せられた神社は国家の統制による祭祀を行なった国家公認の神社で、「式内社」とよばれている。

「式内社」の数は全国で二八六一所（所＝神社を数える際の呼び方）あり、祀られている祭神は三一三二座（座＝神を数える際の呼び方）で、一か所に複数の祭神が祀られている場合もあった。また、祭神は大と小の二つの等級で格付けられた。式内社は国ごとに数の差があり、最多は大和の二一六所で、最少は薩摩の二所であり、全国平均でいえば四五所となる。

信濃国の式内社は、四六所で、祭神は四八座あり、二つの祭神が祀られている神社が二所あった。祭神の等級では大が七座あり、小が四一座であった。佐久郡にあったのは英多神社・大伴神社・長倉神社の三所で、いずれも小等級の神を祀っていた。

英多神社の英多については、エタあるいはアガタと読み、その所在については、現在佐久市安原に英多神社があり、これを古代までさかのぼらせて式内社

写126　「延喜式神名帳 下」　記述の左端に佐久郡三座、英多神社・長倉神社・大伴神社がみえる。
（天理大学図書館蔵）

とする見解が強い。

大伴神社と名のつく神社は、現在望月町望月と佐久市野沢の二か所にあるが、佐久市野沢の大伴神社を式内社とする見方が出されている（『佐久市志』歴史編1）。

長倉神社と名のつく神社は、現在御代田町上宿区の字長倉にある長倉・諏訪神社と、軽井沢町沓掛の湯川沿いにある長倉神社がある。御代田町上宿の長倉諏訪神社は、もとは豊昇の宮平にあった春日神社が上小田井に移り、天正十六（一五〇二）年に現在の上宿上の駅の地に

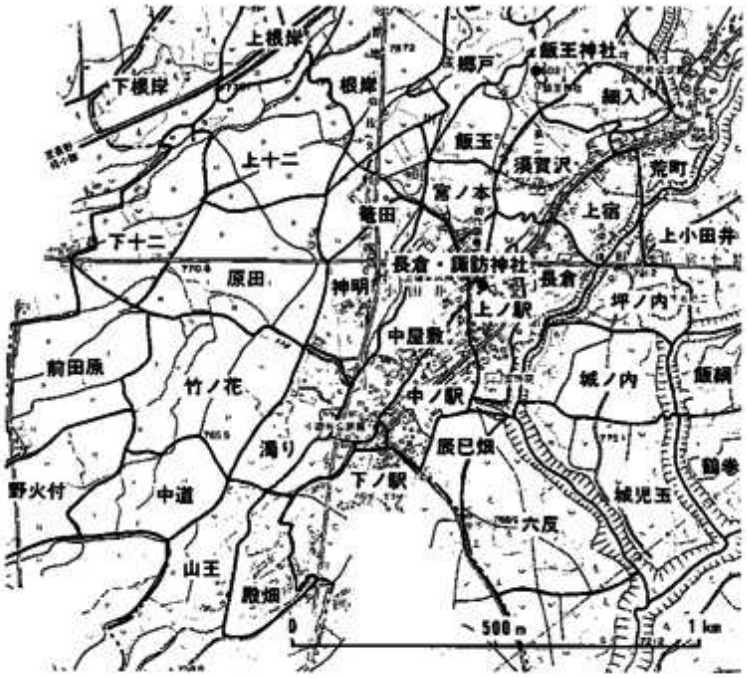


図117　小田井周辺の字図（1／20,000）
長倉や上ノ駅・中ノ駅・下ノ駅などの字名がみえる。ただし駅のつく字名は後代の中山道に関連する字名といわれる。

移されたものといわれている。そして長倉神社の社名は享保二（一八〇二）年に初めて称したとされる。したがって式内社の長倉神社には上宿の長倉諏訪神社をそのままあてるわけにはいかない。ちなみに、これに近接する飯玉神社は永正十四（一五一七）年の創建といわれている。

いっぽう、軽井沢町沓掛の長倉神社もどこまで起源がたどれるかがわからず、式内社の長倉神社と直接みることは難しいと考えられる。

ところで、後にも述べるように小田井の西にある鋳師屋遺跡群前田遺跡の「長倉寺」の墨書土器から、そうした名のつく寺が鋳師屋のムラのなかに存在したことが推定できる。とすると同じムラのなかに長倉神社があったと予測しても大きな矛盾はない。したがって、式内社である長倉神社もこのあたりにあったことも予測される。あるいは上宿の字長倉も式内社の存在を示す古い地名なのかもしれない。

なお、こうした国家公認の「式内社」ばかりでなく、古代のムラムラにはそれぞれの社があったらしい。人々は耕作の始まる春や収穫のなされる秋に集い祭りを行なっていたらしい。

妙楽寺

『日本三代実録』の貞観八（八六六）年の記事にはつぎのような記載がある。

「信濃国伊奈郡寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙楽寺をもって、ならびに定額寺に預からしむ」

定額寺とは、もともとは貴族や地方の豪族が建立した私寺が律令国家の管轄下に組み込まれた官寺のことで、税を納めなくともよい不輸

図118　軒丸瓦の出土地点

写127　長土呂出土の軒丸瓦

（「佐久考古通信」61より）

租田などが与えられるという特権があった。史料からは国内で五十数か所の定額寺が知られているが、この貞観八年に定額寺となったのは一八か寺で、そのうちの五寺が信濃の定額寺となったわけである。定額寺となった佐久郡妙楽寺はどこに存在していたのだろうか。現在、佐久市塚原に妙楽寺という同名の寺が存在しているが、この寺の起源がどこまでたどれるのかは定かではない。

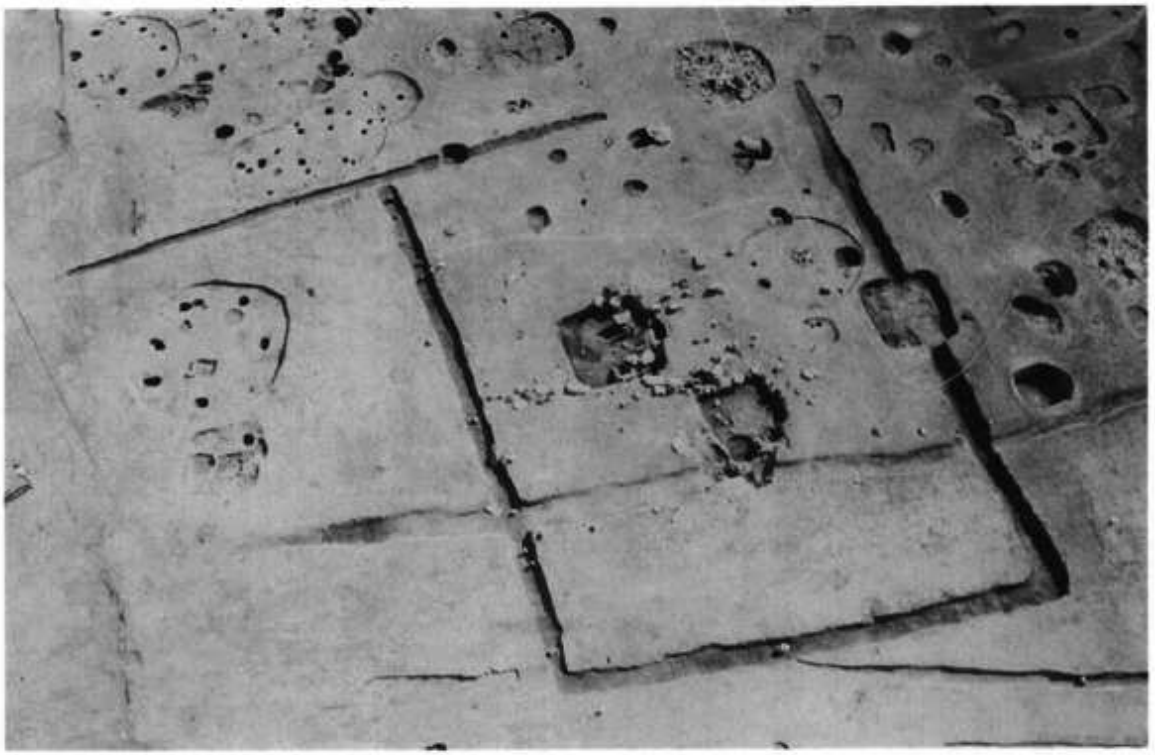
いっぽう、佐久市長土呂では布目瓦を出土した場所がある。また同長土呂の吉田工業敷地からは七世紀末の川原寺式の瓦が出土した。この瓦は軒丸瓦とよばれ、六六〇年に創建された大和川原寺の様式をもつもので、「複弁八弁蓮華文」という花びら状のモチーフで飾られている。こうした古い瓦は、それを使用した古い寺院の存在を物語っており、この周辺に佐久郡妙楽寺が置かれたとみることもできる。いずれにしても佐久市長土呂周辺は、佐久インターなどの設置にともなって開発のさかんな場所であるから、今後の発掘調査によって、あるいは妙楽寺跡が見つかるのかもしれない。

浅間山麓の古代寺院　佐久地方には、妙楽寺以外にもいくつかの古代寺院があったことが近年の発掘調査からわかってきた。ここではそうした寺院について取り上げてみたい。

小田井から西屋敷にかかる鋳師屋遺跡群前田遺跡の竪穴住居からは「長倉寺」「長倉□」と墨で文字の書かれた九世紀前半の土師器坏二点が出土した。このうちいっぽうの墨書□の部分の文字は不明である。この発見から平安時代の初めの九世紀前半に「長倉寺」という寺院が存在したことがわかった。残念ながら鋳師屋遺跡群の発掘部分からは、その長倉寺に相当する建物跡は見つかっていない。決定的なことはいえないが、鋳師屋のムラのどこかに「長倉寺」があり、それに関係する人の住居にこの土器が残されたと考えたい。住居の密集度や建物の配置状況から考えると、鋳師屋のムラの中心部は未発掘である西屋敷の集落部分とみられ、このあたりに「長倉寺」があったことを想定したい。

「大内寺」と墨書された土師器坏二点と、「大平寺」と墨書された土師器坏一点が、真楽寺の東隣の塩野川原田遺跡の住居跡から出土した（第三節一項参照）。土器は十世紀初めのものである。「大内寺」や「大平寺」という名の寺院に何らかの関係をもつ人々が、川原田のムラに住んでいたことが考えられる。

また、川原田遺跡からは二八×一八㍍の溝で囲まれた礎石のある建物が発掘されており、寺院の施設の一部であった可能性がある。



写128　川原田遺跡の溝で囲まれた礎石建物（寺院？）

ところで川原田遺跡の西隣にある名刹真楽寺は、伝承によると浅間山の噴火を鎮めるために用明天皇在位の七世紀後半に創建されたという。伝承はともかく、現在の史料から真楽寺の古さを考えると、真楽寺でもっとも古い年代の史料として室町時代の応永二（一三九五）年に作られた仁王像二体があるので、真楽寺はこのころすでに仁王門を建立できるような立派な寺であったことがわかる。だとすれば、川原田遺跡に平安時代のムラが作られたころの十世紀に、すでに真楽寺が存在していたとしてもおかしくない。「寺」の墨書や仏具らしい鉄鉢様の土器、灯明皿・火熨斗（ひのし）・硯（すずり）などの存在は、この地が寺院のある宗教的環境にあったことを示しており、僧侶や使用人などの寺人がこのムラに住んでいたことが考えられる。また、寺院の施設の一部とも考えられる発見された溝で囲まれた礎石のある建物の存在も注目される。

ではなぜ川原田のムラからは「真楽寺」という墨書が出土せずに、「大内寺」や「大平寺」という異なる墨書が見つかったのだろうか。ひとつの推測としては当時真楽寺の末寺として「大内寺」や「大平寺」という寺があり、そこから修業や奉仕に来た僧侶などが、本寺である真楽寺の運営などにかかわる川原田のムラに持ち込んだ土器がこの墨書土器ではなかったかとも考えられる。

なお、当時は、官寺や氏寺など整備された「寺」、僧侶の修業の場所である「山寺」、村落内に村人により村名などをつけてこじんまりと建てられ専従の僧侶がいない「堂」の三者があったといわれている。さしづめ妙楽寺はその「寺」に相当し、真楽寺はその規模は大きいかもしれないが修業の場である「山寺」的な機能をあわせもち、長倉寺は

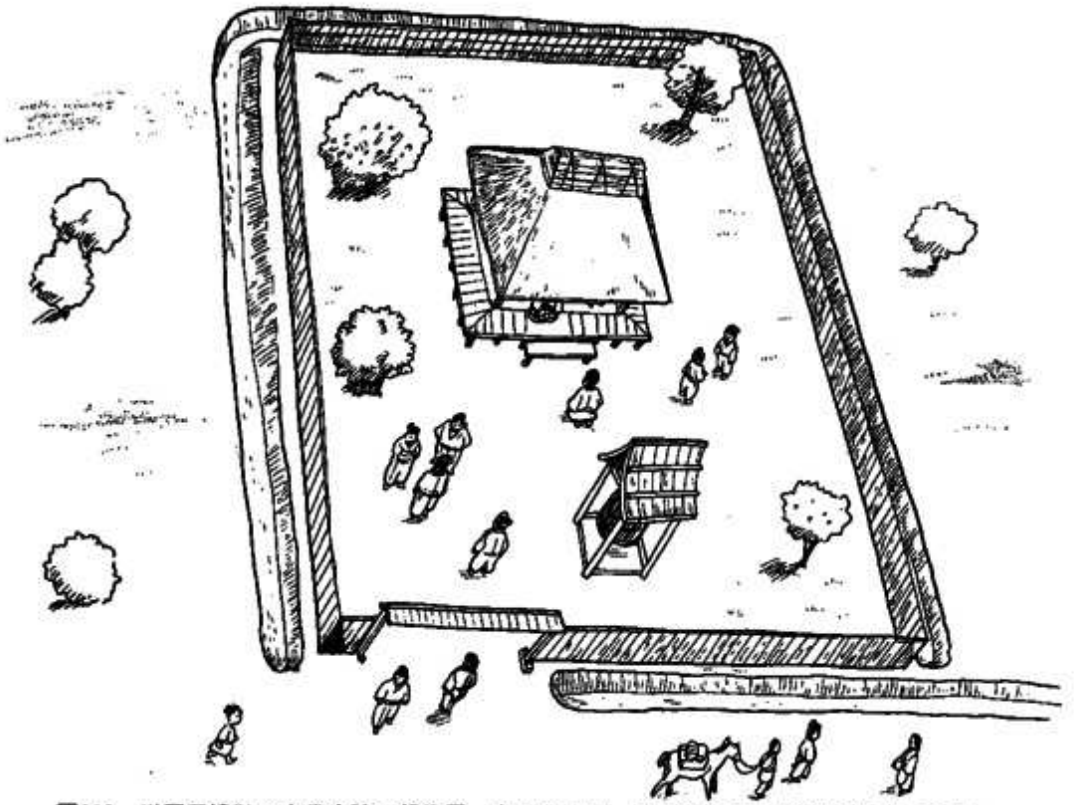


図119　川原田遺跡の古代寺院の想像図　左下が入口、入口の右には鐘楼を復元してみた。（さかいひろこ画）

まさに村名をつけた村落内寺院である「堂」であったものと推定できる。

竈神信仰

古代のムラの家々でひろく行なわれていた信仰のひとつに、住居のカマドにまつわる竈神信仰がある。古代の竪穴住居に作られる炊事施設であるカマドは、古墳時代の五世紀に朝鮮半島から日本に伝えられたものとみられているが、おそらくその際に竈神信仰もあわせて伝えられたものと考えられる。

『中右記』では住居を移すとき吉日を選んで竈神を移すと記されており、『兵範記』にはその家の主人が亡くなると、それまで祀っていた竈神を深山に捨てたという記載がある。家の移動や廃絶にともなって竈神の送り出しの行為があったことがわかる。また、更埴市の屋代遺跡群からは「竈神」と書かれた古代の木簡（文書の書かれた木の札）が見つかっており、千葉県の庄作遺跡でも「竈神」と書かれた土器が発掘され、遺跡の出土品からも竈神信仰をうかがい知ることができる。

御代田地区の鋳師屋遺跡群や塩野地区の川原田遺跡で発掘された古代の住居のカマドの部分を見ると、どのムラのどの住居でもほぼ例外なく壊されていることがわかる。それは後の時代の攪乱を受けて壊れたものでなく、住居を廃絶する時に当時の人々がわざわざカマドを壊していたものとみられる。このカマドの取り壊し作業が、さきの文献資料などにみられる竈神の送り出しにあたる祭祀行為でなかったかと考えられる。

川原田遺跡の十世紀初頭の竪穴住居では興味深いカマド祭祀が観察

写129　前田遺跡の解体されたカマド
解体された後カマドの構築材である軽石が一ケ所にまとめて置かれていることがわかる

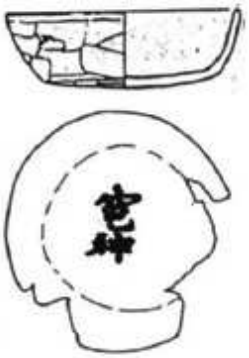


図120　「竈神」の墨書
千葉県庄作遺跡（奈良時代）

できたので紹介する。まず、①住居の廃絶によりカマドが取り壊された。②カマドの構築材として使われていた軽石がカマドの脇に一か所にまとめて置かれた。③かつてのカマド跡に灯明皿がいくつか置かれ火が灯されて、まじないがなされる。このような順で祭祀行為が行なわれた。川原田の以外の遺跡では、カマドの取り壊しや、カマドの構築材のまとめ置きなどはしばしば観察される行為であるが、そこで灯明がなされたような状況はあまりみかけられない。さきに述べたように川原田のムラは僧侶などが住んでいた可能性もあるので、灯明なども行なってよりていねいな祭祀行為がなされたとも考えられる。

また、竈神を送り出すような行為があったということは、当然反対にカマドを新しくした際に竈神を迎え入れるような行為があったと考えられる。しかし、その行為は具体的にはよくわからない。

東北地方の農家ではカマドで炊事をしていたごく最近まで、木や紙でできた竈神が祀られていた。また、竈神は荒神（こうじん）などともいわれ、御代田町の家々でも囲炉裏（いろり）に祀られ家族を守ってくれる神とされていた。このように竈神信仰は庶民の生活に根ざした普遍的な信仰として、今日まで脈々と息づいてきたことがわかる。

さまざまな古代の信仰　古代の人々の暮らしには、さまざまな信仰があった。佐久平からは、浅間・蓼科・荒船などの山々が雄々しくみえるが、こうした山々は神体として古代の人々の信仰の対象となっていた。三輪山など奈良県の大和三山に対する古代の信仰はよく知られている。

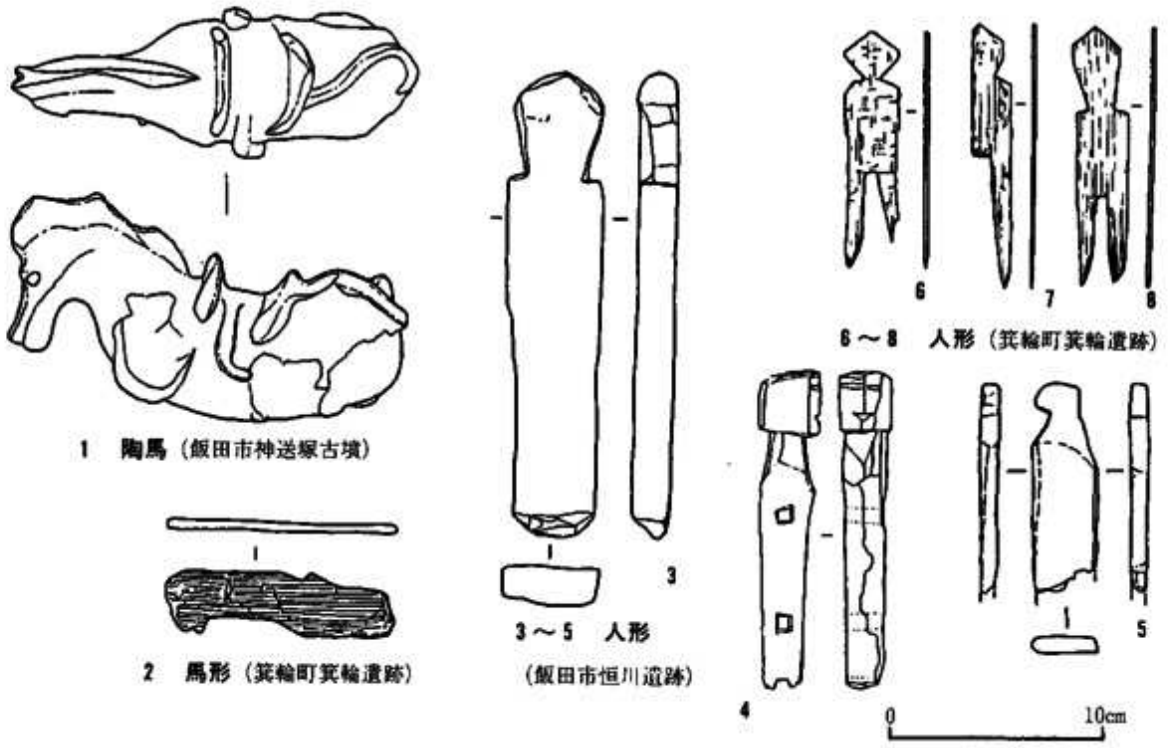


図121　信濃の祭祀遺物

塩野の真楽寺は伝承によると、浅間山の噴火を鎮めるために創建されたといい「浅間山」の号をもつ。昨今の雲仙普賢岳の三倍の規模といわれる天仁元（一一〇八）年の噴火のように、ときとして大規模な噴火を起こし、人々の生活に壊滅的な被害をあたえる浅間火山は、古代の人々にとって畏怖の対象であり神体山であったと考えられる。

『日本三代実録』の元慶二（八七八）年には、「信濃国正六位蓼科神授従五位下」とあり、正六位の蓼科神が従五位下という位を授けられたという記事であるが、蓼科が信仰の対象であったことがよくわかる。こうした神体山の頂上には神社が祀られたり、ふもとに神社や寺などが作られて信仰がなされた。

こうした山岳信仰は平安時代の中ごろから「修験道（しゅげんどう）」にも結びついていった。行者が神体のある山岳で修業を積み、心身をきたえ宗教的な力を身につけるというものであった。

このほか、信仰・祭祀として、人の形に切り抜いた板を用いた人形（ひとがた）祭祀がある。人形には墨で目や口などが書き入れられ、もろもろの罪や汚れを払い清めるために川や井戸に流した。いっぽう、人形にはときおり目や胸の部分に木のクギなどが打ち込まれたものが見うけられるが、これは今でいう「呪いのワラ人形」と同じで、恨みをもつ相手に呪いをかけるようなものであった。人形に限らず、木札である木簡にもまじないの言葉が書かれたものがある。なお、天平元（七二九）年にはこうした呪詛（じゅそ）の首謀者は首切りの刑に処すという令がでている。

遺跡の溝や井戸からは、しばしばウシ・ウマ・シカなどの獣骨が出土する。これは「殺牛馬祭祀（さつぎゅうばさいし）」といって、雨ごいのために牛馬を殺し

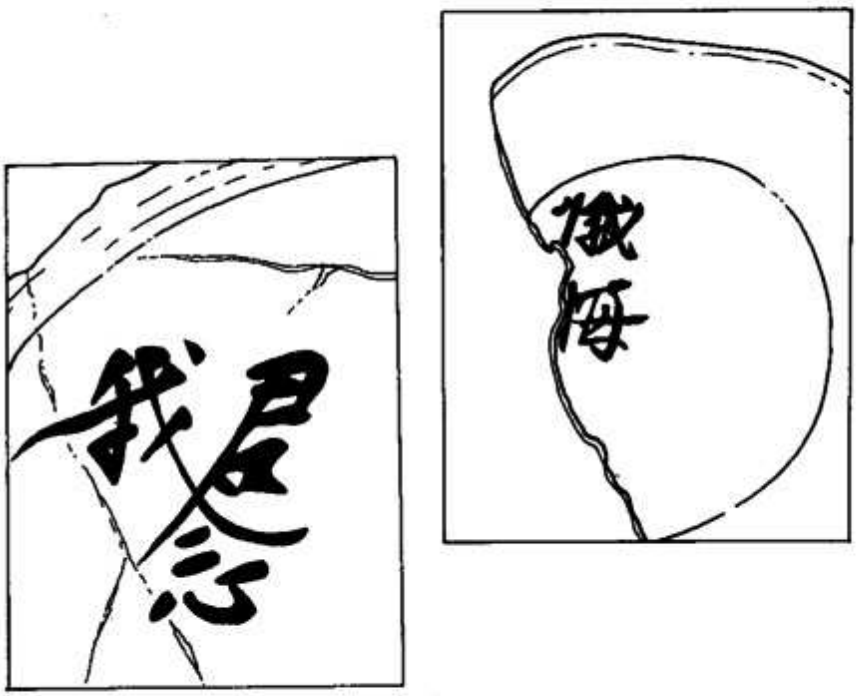


図122　まじない文字の墨書　右は「懺悔」（秋田県払田柵）の墨書、左は「君・我・念」（平城京）の墨書

て水の神に捧げられたものともいわれているが、実際のところよくわからない。ちなみに御代田地区の野火付遺跡の井戸の跡からは、シカなどの骨が見つかっているが、これが祭祀のために捧げられたものかどうかはわからない。このほか陶馬といわれる焼き物のミニチュアの馬が井戸から発見されることがあるが、これもそうした雨ごいの祭祀に関係あるものといわれている。平城京の長屋王の邸宅跡からは絵馬が見つかっている。

信仰とまでいえないかもしれないが、さきに述べたように土器に書かれた墨書にも吉祥語句が見うけられる。川原田遺跡では「福」や「万」の文字が土器に書かれており、縁起をかつぐ言葉とみられる。平城京では「君・我・念」という文字を書いた土器が出土している（図122）。一読するとこれは「君は我を想う」といったような愛の言葉を記したものかと思ってしまう。しかしこれは実は逆の意味を持つまじないの言葉で「君の心が我より離れることを念ずる」という離別を願う呪いを意味している。墨書には吉祥語句ばかりでなく、こうした呪いの言葉もみられるようである。

また、秋田県払田柵からは「懺悔」と書かれた墨書土器が出土した。懺悔の意味は今日と同じで、自らの罪・咎を悔い改め、神や仏にゆるしを乞うものであったと考えられる。罪を犯したのはあるいは払田柵に勤める役人だったのだろうか、自らが死後成仏し地獄に落ちないために懺悔をしたことがうかがえる。

第四節　古代社会の変貌と佐久

一　律令社会の変貌

律令政治から摂関政治、院政へ　天皇を中心とする律令国家も、奈良時代後半にはその土地制度や農民支配に矛盾をきたしてきた。また、奈良の地では仏教界と政権との古いつながりも問題となっていた。そこで桓武天皇は延暦十三（七九四）年に都を京都に移し、平安京として政教分離をはかり、新たな国政の中心を平安京において律令体制の立て直しをはかった。

その政治改革は、班田の支給を六年から十二年に改めたり、国司の不正をただし地方行政を立て直す意味で勘解由使とよばれる令外官（律令の規定にない役人）がおかれたり、「健児の制」によって質の低下した農民兵士から弓馬にたけた郡司などの子弟（健児）を採用するなど徴兵制度を改めたりした。つぎの嵯峨天皇の時代になると、令外官としてさらに機密文書を取り扱う蔵人や、京都の治安を維持するための検非違使もおかれた。また、律令を現実の政治と則したかたちにするため、法令の整備に着手した。その法令の整備作業とは、律令の部分的修正法令および新法令からなる格と、役所の業務などの実施細目を定めた式である。格式は、嵯峨天皇のときには弘仁格式が、清和天皇のときには貞観格式が、醍醐天皇のときには延喜格式が編纂され、三代格式とよばれている。このうち延喜式はもっとも完備したものとして知られ、本町誌の記載でも当時の社会をかいま見るためしばしば参考としている法令である。

しかし、そうした律令体制の再建の動きもむなしく、十世紀後半から十一世紀にかけては藤原家による摂関政治が行なわれ、政治腐敗も進んだ。摂関政治では、天皇が幼少のときには摂政が、成人すると関白がおかれ、その政務を代行するもので、実質的には摂政・関白をだした天皇の外戚である藤原氏が天皇の高い権威を自分のものとして、権力をふるった政治であった。とくに摂政・関白は天皇の代理として官吏の任免権をもっていたため、これに取り入るものが多く出てワイロなどもさかんになされた。

やがて摂関政治も院政の開始により終焉のときをむかえることになった。応徳三（一〇八六）年白河天皇は皇位を幼少の堀河天皇に譲ると、自らは上皇となり院庁で政務を行なう院政を始めた。そして白河・鳥羽・後白河の三上皇による院政が約一世紀間続いた。これら三上皇は法や慣例にしばられることなく専制的な政治を行ない、摂関家を圧倒したので、今度は貴族たちは上皇に取り入るようになり、荘園の寄進などが集中し、政治の乱れはますます激しくなった。

土地制度のほつれと荘園　奈良時代、律令体制に基づいた国家の繁栄には目覚ましいものがあったが、しだいにさまざまな社会的矛盾が露呈してきた。

農民には、租（口分田から三割程度の稲を納める税）や調・庸（布・絹・糸などを納める税）・雑徭（国内の労役や雑用の役務）、防人や衛士（京内の警備）という兵役などが重い負担となってのしかかっていた。農民の中には口分田を捨て逃亡したり、浮浪するものもでてきたり、調・庸の滞納もおきてきた。

政府は農民の逃亡などで荒れた口分田や人口増加などに対応するため養老六（七二二）年に「百万町歩の開墾計画」をたて、翌年（七二三）には「三世一身法」を施行し、開墾を奨励した。「三世一身法」は、新たに灌漑水路を作り開墾したものには三世代の間、旧来の施設を利用したものには一生の間、墾田の私有を認めるものであった。さらにその二十年後（七四三）には、一定限度内で開墾地の永久所有を認める「墾田永年私財法」が発布された。

「墾田永年私財法」は、律令体制の基幹ともいえる土地公有制度の原則を崩すものであり、私有地拡大への動きへとつながった。これにより中央の貴族や大寺社、未開地の開墾を進め、私有地の拡大をはかるいっぽう、農民の開墾した土地を買い入れて大規模な土地経営を行なった。これが荘園のおこりである。

九世紀には「初期荘園」とよばれる私有地が形成されるようになった。信濃では、「初期荘園」として、「大野荘」と「草茂荘」の二つが筑摩郡にあたる松本平にあったことが知られている。

「大野荘」は右大臣藤原良相が所有し、貞観九（八六七）年に貞観寺に寄進施入されたもので、南安曇郡安曇村から東筑摩郡波田町にかけての松本平の西部に存在したとみられている。いっぽう「草茂荘」は、大納言藤原冬緒が所有し後に妙楽寺に寄進施入されたものである。松本市神林・笹賀の下神遺跡からは、「草茂」と書かれた墨書土器が発見されており「草茂荘」の位置をうかがい知ることができる。また下神遺跡から発掘された溝で囲まれた九世紀後半の大型住居は、「草茂荘」の管理・経営にかかわる荘家跡ではなかったかとみられている（『長野県史』通史編1）。

荘園の発達のいっぽうで、班田収授の実施は困難となり、延喜二（九〇二）年を最後にその実施の記録は途絶えている。また、班田支給のもととなる戸籍も、形式的に作成されるにすぎず、人民の実態から掛け離れていった。

その後、墾田の所有者であった開発領主は、自らの土地を国司やほかの豪族から守るため、中央の有力貴族や寺社にその土地を寄進し、本家や領家と仰いで一定の年貢をおさめ、自身はその荘官となって実質的な支配権を確保した。領家とは荘園の寄進を受けた貴族・寺社をいい、それがさらに上級の有力者に寄進された場合それを本家とよんだ。摂関政治のもとでは、摂関家である藤原氏に寄進が集中した。

十世紀以降、こうした「寄進地系荘園」がしだいに全国にひろまり、律令制による土地制度は完全に崩壊することになった。また、国司の支配する公地は国司の私有地のようになり国衙領とよばれた。この時

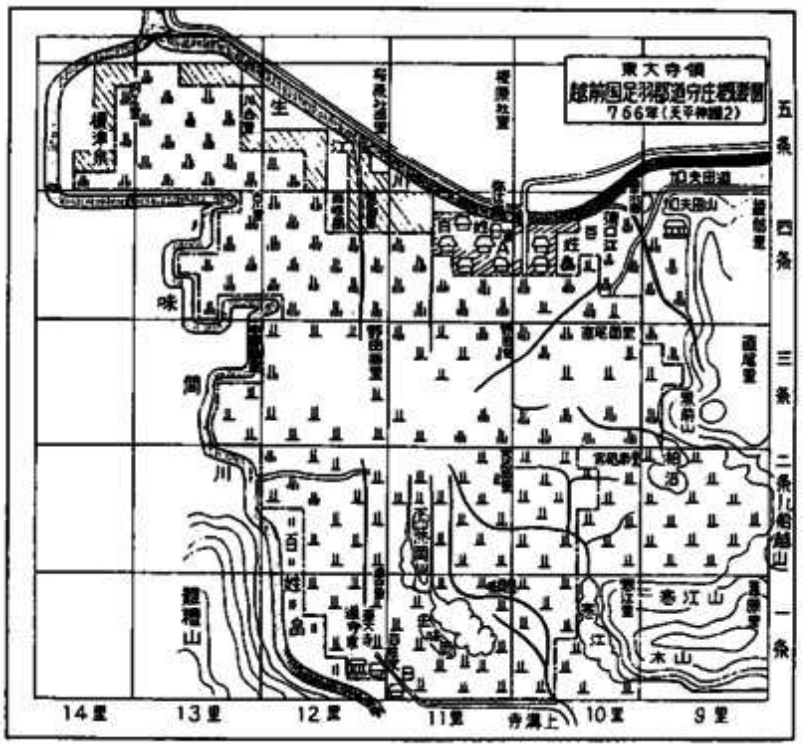


図123　荘園の構造（越前国道守荘）

代、荘園領主や国司はそれまでの租・調・庸にかわって、年貢（田地の税で米で納めるもの）・公事（特産物や手工業品を納めるもの）・夫役を課すようになった。いっぽうでは有力農民である田堵もあらわれ、使用人を使って耕作を行ない領主との間に請作契約をむすぶものもでてきた。また院政期ころから、自分の占有地であることを主張するため自分の名をつけた名田をもつ名主が、有力農民として成長していった。

佐久郡には、平安時代末期において佐久市岩村田付近に「大井荘」や佐久市野沢付近に「伴野荘」が存在したことが知られている。『吾妻鏡』の文治三（一一八七）年には「大井荘」や「伴野荘」に対する年貢の督促の記事がみえる。この両荘園は院政のころに成立した荘園と考えられ、「大井荘」は鳥羽上皇の皇女暲子内親王の荘園である八条院領、「伴野荘」後白河上皇の荘園である後白河院領であった。

地方政治の みだれ　律令体制のゆるみは地方政治にも影響をおよぼし、国司の体質も乱れるようになってきた。国司は民政・税務・軍事・警察・裁判などの国務を担当するのが国司であったが、その国務の怠慢がみられるいっぽう私腹をこやす行為などが目につくようになってきた。

律令官制で国ごとに置かれた国司には守・介・掾・目の四等官があったが、十世紀ころには国司の長官にあたる守が権力を一手に握るようになってきた。国司の管理する公有地は、なかば国司の私有地化し、国衙領とよばれるようになった。国司などの利権に目をつけた貴族たちは、私財で朝廷の財政を補充したり、摂関家などが行なう寺社の造営を助けたりして、官職を得ようとした。これは成功とよばれる行為で、また、その官職が終わってもふたたびその職を得るという重任をはたすため、さらにへつらいやおもねりがなされたりした。

国司のなかには、任命されても現地へ赴任せず、目代という部下を派遣して収入を得るという遙任もみられた。国司の不在の留守所では目代により任命された現地の役人が存庁官人として政務をとった。遙

任に対し、現地に赴任した国司は受領とよばれたが、受領はあらゆる手段を使い、私腹をこやした。『今昔物語集』には、信濃の受領藤原陳忠の話が受領の貪欲さを象徴する話としておさめられている。

藤原陳忠は信濃国司としての任期を終え、東山道を京に帰る途中、美濃との国境にある難所神坂峠で馬もろとも谷底へ落ちてしまった。部下たちは命を落としたと思ったところ、谷底から「カゴをおろせ」という声が聞こえてくる。命じられるままにおろしたカゴの中には平茸がいっぱい入っているではないか。二度目は陳忠自身が手にもてるだけの平茸をもってカゴで引き上げられた。陳忠いわく「馬は谷底へ落ちたが自分は木にひっかかって助かった。その折り近くに平茸がみえたので取ってきたのだ。宝の山に入ってみすみす帰ることがあるものか。受領は倒れた場所の土をもつかめというではないか。下にはまだ平茸がある。おしいことをした」といった。

藤原陳忠は、天元五（九八二）年に国司として信濃守となった実在人物で、この物語は、受領の私腹をこやすような税の取り立てなどを平茸に象徴させながら描いている。

牧経営の行きづまり　昌泰二（八九九）年、足柄関と碓氷関が設置されるころになったが、さきに述べたようにこれは坂東の地において駄馬で荷を運んでいる「富豪の輩」とよばれる集団が「傲馬の党」とよばれる徒党を組んで馬の略奪を働いたため、この二か所に関をおいてこれを厳しく取り締まるためのものであった。

天暦六（九五二）年に御牧のある武蔵・上野・信濃・甲斐の四国の国司に出された太政官符では、御馬の貢進の遅延や数の不足が目立つのは国司や牧監の怠慢であり、今後そのような場合には降格や免職、公廨田を減ずるなどの措置をとるなどの厳しい処罰が課せられることになった。しかしこれ以降も、貢馬数の不足は依然として改善されなかった。

このように十世紀後半からは貢馬の貢進も乱れてきた。また、かつては華やかな王朝行事であった貢馬の儀式である駒牽も、しだいに形式的なものになっていった。また、摂関政治のころには、国司の私的な貢馬などもみられた。藤原道長には信濃守の藤原公則から一度に二〇頭の貢馬がなされたことがあった。

こうした風潮のなかで、御牧に対し私牧もしだいに隆盛するようになった。また、官牧である御牧も私牧化・荘園化し、新たに登場した武士の経営基盤ともなっていった。

二　武士団のおこりと佐久

武士団のおこり　律令政治がゆきづまりをみせ、摂関政治が行なわれるようになる九から十世紀になると、中央の政治の乱れが影響して地方でも盗賊の横行がみられるなど治安が悪くなった。馬などを略奪する「傲馬の党」もその一例である。

このような治安悪化のなか、地方の豪族たちは自分の所有地や支配農民などを侵略から守るために武装するいっぽうで、きびしい収奪を行なう国衙に抵抗するようになった。また、郡司などの在庁官人や荘

官・有力名主たちも同様に武装化して、支配下の土地・農民を確保し、所領内の治安維持につとめた。国司側も税の徴収を強行する立場からかれらに対抗して武装化した。こうしてそれぞれの武力による対立が激しくなった。

このように武装化を進め武士化した地方豪族たちは、同族のものを家子、支配下の名主たちを郎党や家人として組織し、武士団を結成した。こののち中世の社会を力強くリードしていった武士団は、このようにしておこった。中小の武士団はやがて有力な武士団に統合されるようになり、いくつかの中小武士団の連合体として大武士団が結成され、さらに大武士団の間でも指導権をめぐる争いがおこり、いっそう強大な武士団へと統合されていった。

このころ地方に国司として赴任してきた貴族のなかには、任期が終わってもそのまま土着して、子孫とともに地方武士の尊敬を集め、大武士団の統率者である武家の棟梁となった。この武家の棟梁としてもっとも有力だったのが、桓武平氏と清和源氏である。

地方では勢力をつけていた武士も、中央ではその軍事力をもって貴族の身辺警護などをする「侍」として扱われていた。だが、やがて武士は公的権威をもつ地位につくことで所領の支配を有利にしようとした。また、政府側も武士を登用して、治安の維持をはかるようになった。武士を登用した官職には、押領使・追捕使・滝口の武士などがあった。九から十世紀ころからおかれた押領使や追捕使は、反乱の鎮圧など地方の治安維持にあたったもので、滝口の武士は宮中の警護にあたった武士である。

平将門と千曲川の合戦　関東に勢力を持っていた桓武平氏の一族で、桓武天皇から五代にあたる平将門は、一族の対立・抗争が続くなかで、承平五（九三五）年に常陸国でおきた紛争の調停に入った際、常陸の豪族源護と自らの叔父にあたる国香を殺害した。これにより平将門は国香の弟の良兼や国香の子である貞盛と激しく対立し、常陸や下総の地で激しい争いがくり返された。

承平八（九三八）年二月中ごろ、貞盛は将門との争いに見切りをつけ、都での仕官のため東山道を京に向け上った。これを知った平将門は貞盛が政府にその所業を告げることをおそれ、一〇〇余騎の兵をひきいてこれを追った。

将門の軍勢が貞盛の一行に追いついたのは、碓氷峠を越え浅間山麓をすぎた信濃国分寺付近で、二月二十九日のことであった。やがて両軍勢は信濃国分寺の南の千曲川の河原で激しい合戦を行なった。この時、貞盛がたの上兵で小県の人ともいわれる他田真樹が矢をうけて戦死したが、将門がたの上兵の文室好立は矢をうけたものの一命をとりとめた。戦いは将門がたが優勢であったが、けっきょく貞盛は山中に逃れ、将門もあきらめて引き上げた。

現在の信濃国分寺の伝承によれば、この合戦のおり寺の堂や塔が焼失してしまったという。この戦と同じ時期の集落が塩野の川原田遺跡から発掘されているが、当時浅間山麓に暮らした人々はどのような目で、東山道を西へ向かう勇ましい武士の軍勢をみていたのであろうか。武士が台頭する新しい世の中がそこまで近づいていたのである。

写130　平将門の人物像

「平将門の乱」を描いた絵図であるが、将門の羽織る鎧は、ずっと後代の型式のもので、時代考証的にはずれている。（『将門一代記』より）

さて、山中へと逃げ込んだ貞盛はどうにか京へとたどり着き、太政官に訴えて、将門の召喚状をもらってふたたび関東に戻り、常陸国府に三〇〇〇人あまりの兵を起こした。天慶二（九三九）年十一月、これに対し将門は一〇〇〇人の兵をひきいて国府に向かい、貞盛がたを破り国府を焼き国司を捕らえた。さらに将門は下野・上野の国府を襲い、国印などを奪い、国司を追放、自らは坂東（関東）八か国の「新皇」と称した。これが「平将門の乱」である。この時上野の国司藤原尚範は信濃に逃れたとされるが、碓氷峠を越えて最初に上野国司が泣きついたさきは、おそらく佐久郡衙であったと想像できる。しかしついに将門は、翌天慶三（九四〇）年に平貞盛と下野国の押領使である藤原秀郷に殺され、この乱は鎮圧された。

東国で「平将門の乱」がおこっていたころ、西国では「藤原純友の乱」が勃発した。かつての伊予国司であった藤原純友が瀬戸内海の海賊を傘下におさめ、天慶三（九四〇）年瀬戸内海沿岸諸国の官物を略奪し、伊予などの国府を襲い、さらには太宰府まで襲撃したのである。この乱は政府が追捕使として派遣した小野好古・源経基の手によって、天慶四（九四一）年にようやく鎮圧された。

平安時代の中ごろにおこった「平将門の乱」と「藤原純友の乱」は、その年号から「承平・天慶の乱」とよばれているが、こうした東西両国の地方武士の反乱は、むしろ武士どうしの武力抗争にとどまらず、反国家的ともいえる謀反であった。この二大争乱はようやくおさまったものの、これによって貴族政治の無力さはいっそう明らかになり、いっぽうで武士社会への胎動が感じられるようになってきた。

保元の乱と佐久の武士　「承平・天慶の乱」以降も、地方での反乱がいくつかおこった。長元元（一〇二八）年、桓武平氏の一族平忠常は、安房国司を焼き殺して反乱をおこし、安房国を占有した。この「平忠常の乱」は源頼信によって鎮定されたが、これは源氏の東国進出の足がかりとなった。また、蝦夷の首長（俘囚）である陸奥の安倍氏が朝廷に反抗したとき、源頼信の子の頼義と義家は東国の兵をひきいてこれを滅ぼした（「前九年の役」一〇五一～一〇六二年）。この後、奥羽の俘囚である清原氏の内紛がおきると、義家は清原（藤原）

写131　踊念仏に興じる佐久武士や僧侶
一遍上人が弘安二（1279）年に信濃小田切里（今の臼田町か）を訪れたときの風景（『一遍上人絵伝』より）

清衡を助けてこれを平定した（「後三年の役」一〇八三～一〇八七年）。こうした反乱の平定をつうじて源氏はその名声を上げ、東国の強力な武士団の棟梁としてその地位をかためていった。

十二世紀、院政の時代になると一時勢力の衰えていた平氏一族のうち伊賀や伊勢を地盤とする一派が台頭してきた。また、源氏も義家以降わずかに勢力は衰えていたもののやはり勢力を保っており、中央で源平の二大勢力が拮抗することになった。

こうしたなか保元元（一一五六）年院政を行なっていた鳥羽法皇が亡くなると、それまで法皇に嫌われていた崇徳上皇と左大臣藤原頼長が乱をおこした。これが保元の乱で、このとき朝廷がたは源氏では義朝を平氏では清盛をむかえ、上皇がたは源為義をむかえて争ったが、朝廷がたが勝利をおさめて、上皇は隠岐に流され、藤原頼長と源為義は処刑された。

保元の乱では、源義朝に東国一六か国の武士が従った。とくに信濃の武士は武蔵についで大勢みられた。その中には小県を本拠とする禰津神平や海野太郎らにまじって、佐久の武士の姿もみられた。根々井（佐久市）が本拠地とみられる根井大弥太や、望月の望月三郎などである。『保元物語』によれば、根井大弥太の武勇伝として「戦いのときに人が討たれたといって攻撃の手をゆるめていれば、敵に一息入れさせることになり、勝負をつけることなどできるはずがない。攻撃している我々は餌を求めている鷹のようなものだ。敵は鷹を恐れる雉子のようなものではないか。いざ攻め入ろう」といって先陣をきったというエピソードが残る。

この乱のあと今度は源氏の棟梁の義朝と平氏の棟梁の清盛の対立が激化した。また、藤原家内部でも後白河上皇の信任が厚い藤原信西（通憲）と藤原信頼の対立がおこっていた。平治元（一一五九）年源義朝は藤原信頼と組んで兵をおこし、清盛が熊野参拝に出かけたすきをみて後白河上皇を幽閉、さらには藤原信西を殺害し、内裏を占拠した。これが平治の乱である。しかし、知らせを聞いて都にもどった清盛はこれを鎮圧、義朝は逃れたさきの尾張で殺され、信頼も首切りの刑に

処された。この乱に勝利をおさめた平家一族は、朝廷で実権を握るようになった。

やがて平安時代の末期、初の武家政権である平氏政権が誕生する。

〈引用・参考文献〉

宇賀神誠司　一九九四　「佐久市長土呂の軒丸瓦」　『佐久考古通信』六一

小原子遺跡群調査会　一九九〇　『小原子遺跡群』

北御牧村誌刊行会　一九九七　『北御牧村誌歴史編Ⅰ』

群馬県史刊行会　一九九一　『群馬県史　通史編2　原始古代』

佐久市教育委員会　一九八九　『前田遺跡』

佐久市志刊行会　一九九五　『佐久市志歴史編一―原始・古代』

龍野市教育委員会　一九九四　『布勢駅家』Ⅱ

長野県史刊行会　一九八九　『長野県史通史編一―原始・古代』

長野県埋蔵文化財センター　一九九三　「宮ノ反A遺跡群」　『長野県埋蔵文化財センター年報』10

奈良国立文化財研究所　一九九一　『長屋王邸宅と木簡』

望月町誌刊行会　一九九四　『望月町誌　原始・古代・中世編』

吉田孝　一九九一　『古代国家のあゆみ』

第三編 中世

真楽寺の仁王尊開眼

真楽寺は、活火山浅間山を信仰の対象として祀り、古来より幅広い信仰を集めた。室町時代応永２（1395）年には、多くの人々の念願が叶い、真楽寺の仁王像が造立された。製作者は、群馬県の仏師刑部公鏡継、製作日数はおよそ３か月であった。造立費用は、武士から農民まで佐久地方の人々で組織された「一結講」によって賄われた。ここでは人々の喜びに沸く開眼法要の情景を再現した。

中世の概要

本編「中世」は、鎌倉・室町・戦国・安土桃山時代の四時代を中心に記述している。年代は鎌倉幕府成立から、徳川家康関東移封までの約四〇〇年間で、この時代は武士によって政治の中心が担われた。

鎌倉時代は、源頼朝が征夷大将軍になり、執権北条高時が殺害されるまでをいう。御代田には、真楽寺周辺に頼朝の巻狩伝説が残り、その伝説にまつわる地、城之腰から鎌倉時代の小集落が発見された。

室町時代前半の長野県は、地元の領主たちの力が強く、将軍から任命された守護を追い返したこともあった。一四〇〇年前後になると佐久市岩村田に拠点を置いた大井氏は、全盛期をむかえた。御代田町域もこの傘下にあったと考えられ、小田井の野火付遺跡や前藤部遺跡では、この当時の庶民のムラが見つかっている。

応仁の乱以降、戦禍は各地に飛び火した。佐久地方では、大井氏と伴野氏の抗争の末、大井氏は零落、盟主不在の佐久は多くの小領主が割拠することになった。小田井城の小田井又六郎もその一人である。

その後、佐久は武田信玄の侵略をうけ、武田氏滅亡までの約三〇年余り武田氏の領国となった。武田氏滅亡後の天正十（一五八二）年は、まず織田信長配下の滝川一益、六月には北条氏直が佐久を支配した。しかし、最終的には十月の北条・徳川の講和会議で、佐久は徳川の支配下になった。これに最後まで反対した市河某は御代田に接する金井砦に籠ったが、依田信蕃の攻撃に屈し、群馬県に逃走したと伝えられる。天正十年は佐久地方にとってまさに激動の年であった。

年代	時代	日本の主なできごと	御代田・佐久地方のできごと
一一九二年	鎌倉時代	◆源頼朝、征夷大将軍となる	◆頼朝、三原で巻狩を行なう（一一九三・一二）
一二一九年		◆承久の乱	◆塩野城之腰遺跡に集落が営まれる
一二二七年		◆加藤景正、瀬戸焼を始める	
一二八一年		◆元寇 文永の役	◆海野幸氏ら武田信光が上野国三原荘と小県郡長倉保の境争を争う
一二七四年			
一二七六年		◆一遍、時宗を開く	◆一遍、佐久郡伴野荘で踊り念仏を始める
一二七九年		◆元寇 弘安の役	◆浅間山火噴火
一三〇一年			◆信州安国寺により「安国寺」が編まれる
一三三三年		◆鎌倉幕府滅亡	
一三三五年	南北朝の争乱	◆建武の中興	◆望月氏、建武政府に反旗、信月城で戦う
一三三八年	武将登場	◆中先代の乱	◆大井城の合戦
一三五〇年			
一三九二年	室町時代	◆足利尊氏征夷大将軍となる	◆信州四人と守護新補地の代官二宮氏の対立
一三九五年		◆南北朝の合一	◆浅間山噴出し、豊繁け木流出（一三九四・二・二九）
一三九九年		◆応永の乱	◆真光寺の仁王像完成（七・二五）
一四〇〇年		◆永享の乱 室町幕府公方足利持氏自殺	◆岩尾城の仁王像小諸城主笠原氏と大井光矩が佐久郡の領にて但馬文配の境合をする（七月）
一四三八年		◆結城合戦（一一四一まで）	◆人形合戦
一四四〇年		◆嘉吉の乱（将軍義教殺害）	◆浅間山大噴火（一四二一四・三・八）、噴火し熊木あり
一四四一年			◆野火付遺跡にムラが営まれる
一四四六年		◆将氏の子、成氏鎌倉公方となる	◆千曲川大水 田畑荒廃大飢饉
一四五四年			◆御堂部遺跡にムラが営まれる
一四六七年		◆応仁の乱	◆佐久郡の大井政光関東へ出陣 のち鎌田甲斐に追撃
一四七九年			◆大井氏と伴野氏が合戦（八・二四） 大井氏勝利
一四八四年		◆加賀一向一揆	◆岩城の村上の在撃で、大井城と城下焼上 大井宗家小諸へ逃れるが敗落
一四八八年			
一五四〇年	安土桃山時代	◆鉄砲伝来 種子島にポルトガル人漂着	◆諏訪頼重、佐久侵入開始 晴信次いで佐久攻略開始（一五四二）
一五四二年	戦国時代		◆武田信虎 佐久侵入開始
一五四三年		◆キリスト教伝来 フランシスコ・ザビエルと来日	◆小田井原合戦 この頃後に小田井城・高峯城落城
一五四九年			◆上田原合戦で武田軍敗北（一五四八） 豊臣佐久
一五五三年		◆川中島合戦（一五六五まで）	豊臣 のち、三十年余、佐久は武田の領国となる
一五八二年	安土桃山時代	◆武田氏滅亡	◆佐久は織田、北条、徳川に順次支配される
一五九〇年		◆豊臣秀吉 小田原城の北条氏を攻略し全国統一	◆佐久武士 阿江木、伴野氏は北条方につく
		◆徳川家康 関東移封	◆浅間山噴火 悪霊方へ 後十年噴火があいつぐ

第一章　中　　世

第一節　木曽義仲のころの御代田

一　牧と荘、郷と保

行政区画は変化する　行政区画とその名称は、古代からそれぞれの時代の要請によって変化してきた。その中で古代以来、とりあえず変化せず残ってきたのは「佐久郡（さくぐん）」という名称である。しかし、こまかくいうと「佐久郡」も、明治の初めに「北佐久郡」と「南佐久郡」に分けられ、平成の現在、「佐久郡」は、行政区画としての意味をほとんどもたなくなった。

そして、現在の地方行政区画単位として使われている名称が、「市」「町」「村」であることは、誰もが知っている。

では、中世はどうだったのだろうか。「牧」「荘」「郷」「保」「条」「村」とさまざまな名称があげられる。そして厄介なことに、時代によって変化する。

行政区画が必要な理由のひとつとして、税の徴収が挙げられる。だから、行政区画は徴税権を持つ支配者の交代や事情により変動することが度々ある。

中世という時代は、およそ五〇〇年から六〇〇年間あり、平安時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代にわたる。その間、中央も地方も支配者は何度も交代している。そして、それに合わせて行政区画も、少しずつ変化しているが、変化をはっきりさせることは、史料の制約などから困難である。

中世初期の佐久郡の行政区画と御代田　中世の佐久郡の行政区画のうち、平安時代の後半から鎌倉時代の終わりまでの間にできたと思われるもの、そしてそれが現在のどの行政区画にあたるのかは、次のとおりである。

〔荘園〕　伴野荘（佐久市ほか）
　　大井荘（佐久市・御代田町ほか）
〔牧〕　望月牧（望月町・北御牧村）
　　長倉牧（軽井沢町一帯）
　　塩野牧（御代田町・小諸市）
〔郷・保〕　平賀郷（佐久市）
　　志賀郷（佐久市）
　　長倉保（軽井沢町一帯―毛長倉牧の後身か）
〔その他〕　小諸（小諸市）
　　菱野（小諸市か）
　　草田（立科町）
　　山田（佐久市）
　　長針（佐久市）
　　甕（大井荘内）

塩野牧・大井荘と御代田　そしてこのうち、御代田の地域は、塩野牧・大井荘という二つの行政区画に分かれていたと考えられる。

十世紀の初めに編纂された『延喜式』には、左右馬寮の管轄する信濃国内の牧が、一六みえてくる。このうち、佐久郡にあったと考えられているのは、「塩野牧」・「長倉牧」・「望月牧」である。その後、鎌倉時代の初めの文治年間（十二世紀末）には、これら三つの牧は、「塩野」「長倉」「望月牧」の名で、「左馬寮領」つまり左馬寮の所領としてみえてくる。ここから十世紀初めから十二世紀末の三〇〇年の間に、これら三か所が左右馬寮の管轄から左馬寮の所領と性格が変化していることがうかがえる。

また、「塩野牧」が「塩野」に、「長倉牧」が「長倉」と記されるようになったことから、この二か所が、鎌倉時代の初めには牧としての機能が希薄になっていたことを推測させる。そして「長倉」の場合は、仁治二（一二四一）年は「長倉保」と「保」がつくことになる（『吾妻

写1　橋口神社（御代田町馬瀬口）

鏡』仁治二年三月二十五日条■信史④八六)。

なお、十二世紀末の佐久郡の左馬寮領には、三つの牧のほかに「菱野」がみえている。

さて、塩野牧は御代田町内に塩野の地名として残っている。そして塩野の周辺にある馬瀬口(御代田町)、牧留・乗瀬(小諸市)などの地名が牧の名残の地名と考えられている。また、塩野牧は西は蛇堀川で「菱野」と、東は濁川で長倉牧と接していたと考えられている。

いっぽう、御代田町の南部の小田井は大井荘に含まれていた。大井荘がはじめて史料上にみえてくるのは、安元二(一一七六)年である。ついで鎌倉時代のはじめの文治二(一一八六)年、および文治四年にいずれも八条院を本家とする荘園としてみえてくる(『吾妻鏡』文治四年六月四日条■信史②三八三)。八条院とは、鳥羽天皇の皇女の暲子のことで、八条院領は鳥羽上皇(天皇)が暲子に譲った所領をさす。

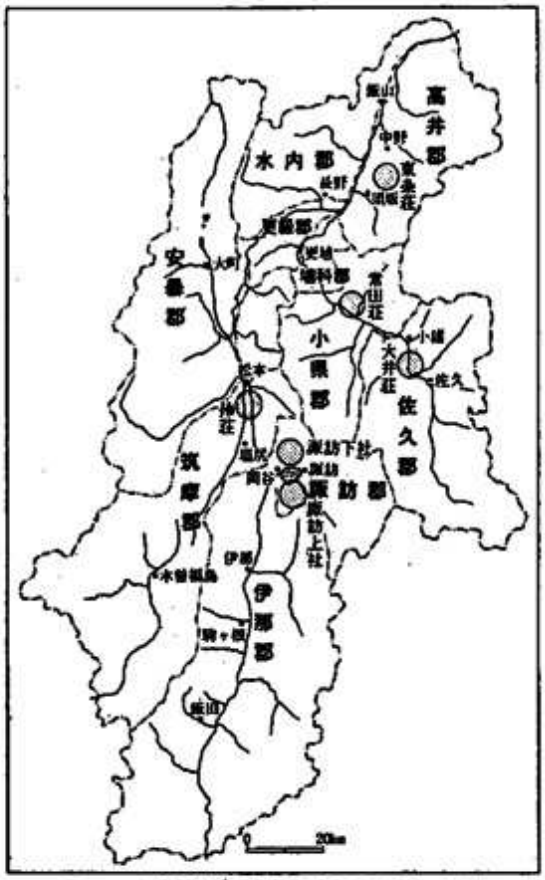


図1　八条院領の分布(『県通史②』より)

保元・平治の乱と滋野一族　保元元(一一五六)年七月におこった保元の乱は、後白河天皇と崇徳上皇の対立に武士が結びつき、京の都の中での合戦にまで発展した。

この保元の乱に際して、佐久地方の武士たちは、その多くが後白河天皇方についた源義朝に従ったと思われる。ただし具体的には、滋野一族の動向がわかるだけである。滋野氏は祢津、海野、望月、根井氏と有力な分流すべてが源義朝方に名を連ねている。

合戦は、保元元年七月十一日の明け方、後白河天皇方の平清盛・源義朝軍の兵六百余騎が崇徳上皇方の白河殿を急襲し始まった。戦いは寅の刻(午前四時)にはじまり、辰の刻(午前八時)までの四時間にわたったという。

滋野一族の根井行親はこの戦いで「戦のときに、味方が討たれたといって攻撃の手をゆるめていれば、敵に一息入れさせることになって、勝負を決することなどできようはずがない。攻撃しているわれわれは、餌を求めている鷹のようなものだ。敵は鷹を恐れているキジのようなものではないか。いざ、攻め入ろう殿原たち」といって真っ先に攻め入っていったという。

また、別の説では「戦いの陣というものは思い切りのよい者こそが破るのである。のけの け殿原」といって駆け入ろうとして、敵方の首藤九郎の矢に胸板を射られて馬から落ちたともい

写2　平治の乱
源義朝・藤原信頼軍の三条殿夜討ちの情景
（『平治物語絵詞』12より）

う。

一進一退の戦闘は、天皇方が白河殿に火を放ち、崇徳上皇・左大臣頼長が白河殿を脱出したことで、天皇方の勝利が確定した。

保元の乱に勝利した後白河天皇は、保元三（一一五八）年には、子の二条天皇に位を譲り、みずからは後白河上皇として政治の実権を握り、院政を復活させた。

しかし、保元の乱から三年後の平治元（一一五九）年十二月九日、都にふたたび争乱がおこった。藤原信頼が源義朝と結び、反藤原信西・反平清盛の兵を挙げた。この戦いは源氏一族の源頼政が味方せず、信頼・義朝方の敗戦に終わった。

源氏は義平が戦死、義朝は東国に落ち延びようとする途中美濃で殺された。また信頼は捕らえられ六条河原で斬られた。平治の乱はこのようにして十二月二十七日に決着した。

この平治の乱に佐久地方の武士がどの程度参加し、どのような動きをしたのかということは、史料上はまったくわからない。史料上には現れないが、佐久武士は保元の乱に引き続いて義朝に従ったと考えてよいであろう。

木曽義仲の挙兵　平治の乱の結果、平氏は源氏なきあとの唯一の武家の棟梁となった。そして佐久武士の多くも清盛に従うことになったのであろう。

治承四（一一八〇）年四月、以仁王は諸国の武士たちに対して、平氏一族を打倒するため挙兵せよとの檄を発した。そして、各地で平氏打倒の兵が挙げられた。八月十七日、伊豆にあった源頼朝が挙兵した。信濃で蜂起した武士の代表は、木曽義仲、岡田親義、平賀義信などであった。この三者の名字の地は、木曽義仲は木曽、岡田親義は筑摩郡の岡田（松本市岡田）、平賀義信は佐久郡の平賀郷である。なお、平

賀氏については、名字の地は平賀郷であるが、挙兵当時の一族の本拠地は、筑摩郡にあったようである。

義仲と佐久党　この三者は当初、別々に挙兵したのであろうが、最終的には木曽義仲が信濃をまとめることになる。そして岡田氏は義仲と行動を共にする。いっぽう平賀氏は、頼朝と行動を共にしたらしい。

史料上にみえる義仲の最初の戦いは、国府から善光寺平へ向かう道

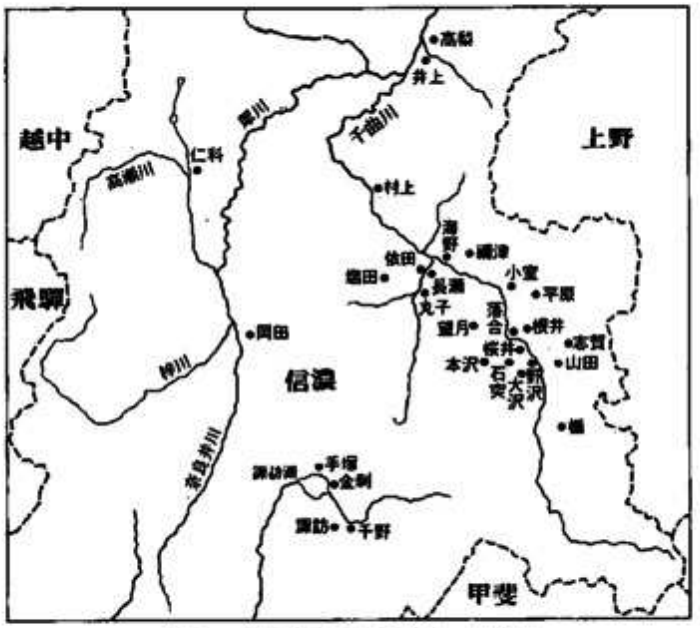


図2　木曽義仲の配下に入った武士
（『図説長野県の歴史』より）

筋の会田（東筑摩郡四賀村）・麻績（東筑摩郡麻績村）で行なわれた。会田・麻績は当時平家領であったと考えられ、義仲はこの地の平家勢力と衝突したのであろう。この戦いの結果はよくわからないが、この後義仲は善光寺平に進出せず、東信地方に進出した。

東信地方に進出した義仲が根拠としたのが、丸子の依田城であった。義仲の勢力挽回は、この依田城ではじまる。まず、東信地方の武士たちが参加してくる。東信地方では佐久党とよばれる武士団が義仲に従ったようである。

佐久党とよばれるからには、佐久地方に根拠をもつ武士ということになろう。義仲軍に参加した武士のうち、佐久地方に根拠をもつと考えられる武士に根井・楯・小室・志賀・野沢・本沢・矢島・平原・望月・石突・落合氏などがいる。おそらくこれらの武士が佐久党とよばれる武士団を形成していたのであろう。そしてかれらの多くは、保元・平治の乱で源義朝に従った武士であったのであろう。

『源平盛衰記』『平家物語』などによれば、佐久党に含まれていたと考えられる武士の中でもっとも義仲に近い人物としてみえるのは、保元の乱で活躍した根井行親である。義仲軍に四天王とよばれる四人の義仲側近の武将たちがいたといわれている。根井行親はその一人に数えられている。行親は佐久市根井を名字の地としていたと考えられるが、正式には根井小弥太滋野行親といい、滋野一族であった。

根井氏のほか、義仲に従った滋野一族には海野（名字の地は、東部町内）・祢津（東部町内）・望月（望月町）・桜井氏（東部町内）などの名がみえる。このうち、望月氏は望月牧にかかわる滋野一族と考えら

写3　根井行親の館跡とされる道本城に立つ石碑（佐久市根々井）

れている。このほか佐久党の武士の中では、館（佐久町館）を名字の地とした楯六郎親忠は根井行親の子息であり、滋野一族になる。

このようにみてくると佐久党の中心には、滋野一族がいたのではないかと考えられる。

義仲の進撃

治承四（一一八〇）年十月、義仲は父義賢にかかわりのあった武士たちを集めるため、義賢の根拠地であった西上野に入った（信史③六九）。この西そして瀬下・那和・桃井・木角・佐井・多胡氏など高山党とよばれる武士団が義仲に従った。

さて、義仲の挙兵鎮圧の役割を担ったのが、越後の豪族の城助職であった。養和元（一一八一）年六月、助職は信濃に攻め入った。そして十三・十四日、横田河原（現長野市篠ノ井横田）で義仲軍と衝突した。越後からの長旅に疲れはてていた城氏軍は一矢も射ることができずに敗れた。これを横田河原の戦いというが、この戦いの結果、信濃での平氏勢力の抵抗はほぼやんだ。

横田河原の戦いでは、佐久党のうち楯六郎親忠が斥候として活躍したことが知られている。このほかの佐久党では望月太郎・次郎・三郎、矢島四郎行忠（名字の地は浅科村か）、根井小弥太行親、落合五郎兼行（佐久市内）、志賀七郎・八郎（佐久市内）、石突次郎（佐久市内）、平原次郎景能（小諸市内）、小室太郎忠兼（小諸市内）、野沢太郎（佐久市内）、本沢次郎（小海町）などの名がみえる。

これまで述べてきた佐久党の人々の名字は、その出身地を表していると考えられるが、残念ながら御代田町内にある地名と関係する名字はない。しかし、周囲の状況から判断して、当時佐久党に属していた武士が、御代田町に所領を持っていたと考えて差し支えないであろう。その候補となる佐久党の武士としては、御代田町に隣接する地を名字の地としていた武士の可能性がもっとも高いであろう。根井、志賀、平原、小室氏などがその候補となろう。なお、この四氏のうち志賀、小室氏は、のちに鎌倉幕府の御家人となっている。

横田河原の戦い後、しばらく小康状態が続いたあとの寿永二（一一八三）年頼朝と義仲との間の対立がおこった。三月、頼朝は義仲との全面対決のため、信濃に兵を派遣した（信史③一〇〇）。この時期、軍事的には頼朝に劣っていた義仲は、息子で一一歳になる義高を人質として頼朝の許に差し出すことで和解した。そして義高の供として海野・望月・諏訪・藤沢氏などを鎌倉に遣わした。

義高はこののち、頼朝の娘の大姫を許嫁とした。しかし、義仲の死後三月ほどたった元暦元（一一八四）年四月、頼朝は義高殺害を命じた。義高は事前にそれを察知し、鎌倉を脱出したが、追っ手を差し向けられ、武蔵の入間河原で殺害された。

なお、義高に付き従った海野・望月・諏訪・藤沢氏は、いずれも鎌倉幕府成立後、弓術の名手として御家人に名を連ねている。

頼朝との対立を回避した義仲は、北陸道から京上を開始する。寿永二（一一八三）年四月、平維盛・通盛の平氏軍一〇万騎が北陸道に下った。そして加賀と越中の境にある礪波山において義仲軍と衝突した。倶利伽羅峠の戦いである。五月十一日に始まったこの戦いは、夜半に角に松明をつけた四、五百頭の牛を平氏軍に突入させるという奇襲を義仲が用い、一気に平氏軍を打ち破ったと伝える。

横田河原の戦いの時には三〇〇〇であった義仲軍は、五万にふくれあがっていた。急激に数を増した義仲軍は、七月には京に迫った。平氏は七月二十五日に安徳天皇および建礼門院を奉じ、一門の没落ともども西国へ逃れた。

義仲は平氏が西国へ逃れた三日後の七月二十八日に京へ入った。そして後白河法皇から京中を守護する院宣を受けた。ところが、義仲の支配に基づいて京の守護についた武士たちの多くは、義仲が直接掌握できない武士団の棟梁たちであった。

たとえば、義仲軍に加わっていた源行家は、恩賞の分与をめぐって「義仲に従った源氏は、義仲の郎従ではなく、ただ戦場で従っただけなので、義仲が恩賞の分与まではできないはずである。」と述べた。入京した義仲軍がまとまりのない軍勢であったことを物語っている。

さらに、義仲が京へ入った時期は、京はまだ養和の飢饉から立ち直っていなかった。統制のとれない軍勢は、食料や馬草調達のために狼藉を働かねばならなかった。義仲の評判は一気に下降する。

義仲の評判が下降するとともに、都では頼朝の上洛を希望する声が大きくなっていった。

九月二十日、義仲は平家追討の院宣を受けて西国に向かい、閏十月一日備中の水島（岡山県倉敷市）で、四国の屋島に根拠を置き、再京上を図る平氏と衝突した。水島の戦いである。海戦に不慣れな義仲軍はこの戦いで大敗を喫する。水島合戦のときの義仲軍には、京上したときの勢いはすでになかった。

再入京後の京における義仲の立場はいよいよ苦しくなる。後白河法皇との関係は頼朝問題がからみ悪化する。十一月十九日、義仲は後白河法皇の御所である法住寺を攻め、法皇を五条東洞院にあった藤原基通の邸宅に、後鳥羽天皇を閑院内裏に遷した。義仲のクーデターである。

このとき義仲に従った武士は、入京した当初の五万から七〇〇〇にまで減っていた。義仲はクーデターにより一時的に政権を握りはしたが、それが滅亡への道であることが軍勢の減少にも現れている。

このような情勢の中、頼朝は義仲追討のため源範頼・義経に兵六万を添え、京都に向かわせた。翌元暦元（寿永三＝一一八四）年一月二十日、範頼・義経軍と義仲軍は近江の勢多（瀬田）および京の宇治で衝突した。多勢に無勢、義仲軍は敗れ、範頼・義経軍は入京した。義

仲は三条河原・六条河原でも敗れ、北陸道に逃れようとしたが、追っ手のため近江の粟津で討ち死にした。

この最後の戦いでは、根井行親・楯親忠の親子も奮戦したが、六条河原の戦いで戦死した。このほか今井兼平、長瀬重綱、高梨忠直、諏訪一族の手塚・茅野、上野の多胡家包など、信濃の横田河原の戦いから義仲に付き従った武士たちの多くが討ち死にした。

範頼・義経軍は、この後福原付近まで勢力を盛り返してきた平家軍を追い、およそ一年後の文治元（寿永四＝一一八五）年三月、平氏を壇ノ浦で滅亡させた。

第二節　鎌倉幕府と御代田

一　鎌倉幕府と佐久武士

佐久武士の御家人化

寿永三（元暦元＝一一八四）年一月、義仲は近江の粟津で戦死した。義仲の死により、これまで義仲につき従ってきた信濃の武士の多くはいち早く頼朝、つまり鎌倉幕府に従った。

義仲を倒した源範頼、義経軍が、引き続いて平氏と戦いを開始したとき、義仲に従っていた武士で、この戦いに参加した人物に木曽中次などがいた。木曽中次は、義仲軍のうち木曽党とよばれた中枢軍に所属していたと思われるが、文治元（一一八五）年二月、屋島の戦いにおいて義経の軍に従っていた。

写4　源頼朝像
（神護寺蔵『朝日百科　日本の歴史4』より）

佐久地方の武士が、義仲軍の中枢をなしていたことは前に述べたとおりであるが、やはりその多くも頼朝に従うことになった。頼朝に従った武士たちを「御家人」というが、佐久武士の多くも御家人となった。

御家人となった佐久武士のうち、その活動状況が比較的わかるのは小諸光兼と望月太郎である。この二人についてはあとで述べるが、この二人以外にはつぎのような佐久武士が御家人になったと考えられる。

建久元（一一九〇）年、奥州藤原氏を滅ぼして東国をほぼ平定した頼朝は、十一月にはじめて上洛した。このとき、志賀郷（佐久市）を名字の地とする志賀七郎が、随兵としてつき従っている。

また後の史料から、春日氏（望月町）・小田切氏（臼田町）・志津田氏（臼田・望月町）・布施氏（望月町）なども御家人であったことが知れるが、御家人になったのは義仲の死の直後と考えるのが自然であろう。

御家人小諸光兼　小諸太郎光兼の根拠地（名字の地）は、小諸郷（小諸市）である。義仲に従った佐久武士のうち、史料上もっとも早く御家人としてみえるのが光兼である。

義仲に従った小諸氏には太郎忠兼と小太郎真光がいるが、忠兼と光兼は同一人物と考えられている（以下、光兼）。義仲に従っていた当時の光兼は、横田河原の戦いや倶利伽羅峠の戦いで義仲軍の大将として活躍している。また、義仲の息子の志水義高を鎌倉へ人質として差し出すときにも、光兼の意見が通ったという経過もあったから、義仲軍で重要な位置を占めていたと考えられる。

そして光兼が、義仲に従った後に御家人となった信濃武士の代表格であったことが、つぎのような事実からうかがえる。

文治二（一一八六）年正月、頼朝が二位に叙せられ直衣初めを鶴岡八幡宮で行なった際、光兼は随兵を勤めた。また文治五年十二月、源義経、木曽義仲子息、藤原秀衡の息子らが同盟を結んで鎌倉を攻めるとの噂があった。このとき、頼朝は信濃・越後の御家人に戦の準備をするよう命じたが、信濃へは「小諸光兼以下の御家人」に通知を出した。建久元（一一九〇）年正月、頼朝の第二回奥州攻めに際して、信濃・上野の御家人に出陣の命が下った。このとき光兼は老齢のうえ病気であったが、信濃の「勇士」なので特別に参加するよう命ぜられた。その際、去年七月の第一回奥州攻めで光兼に従った者（おそらく信濃国御家人）は再度光兼につき従うよう命ぜられた。

浅間山麓の巻狩と滋野一族　建久四（一一九三）年三月、頼朝は下野の那須野および信濃の三原で狩りを行なった。このとき前もって狩猟に慣れた御家人を二二人選んだが、選考の基準は「弓馬に達し」「隔心なき」ことであった。この御家人二二人中に、望月牧（望月町）を名字の地とする望月太郎がみえる。

望月太郎は、義仲に従ったうち佐久党の中心をなしていた滋野一族であるが、義仲の敗死から一〇年後には頼朝の信頼に足る御家人となっていた。望月氏はさきに義仲の子義高が頼朝の人質となった際、それに従って鎌倉に赴いており、義仲の生前から頼朝と近い関係にあったことが想像される。

この狩りが行なわれた信濃の三原は、実際は上野の三原荘をさすものと思われる。三原荘は浅間山の北麓に広がっていた荘園で、現在の群馬県の長野原町・嬬恋村付近にあった。仁治二（一二四一）年当時、三原荘の地頭は海野幸氏であった。そして海野氏も滋野一族であった。

甲斐源氏の佐久入り　いっぽう、義仲と運命を共にした佐久武士の所領には、信濃国外の御家人が入ったと考えられるが、その代表格は甲斐源氏であった。

文治四（一一八八）年当時、伴野荘の地頭は小笠原長清であった（『吾妻鏡』―信史③四〇一）。長清は、甲斐国の小笠原牧（山梨県北巨摩郡明野村）ないしは小笠原村（山梨県中巨摩郡櫛形町）を名字の地とする甲斐源氏であった。長清の父は加々美遠光で、文治元年、信濃が頼朝の知行国になった時、信濃守に任ぜられた人物である（『吾妻鏡』―

信史③三七二)。長清はこの父遠光とのかかわりで伴野荘の地頭に任命されたのかもしれない。

また、御代田町も領域に含まれる大井荘は、小笠原長清の七男朝光が地頭として入り、大井氏を名乗ったという。

義仲に従った佐久武士のうち、根井・落合・石突氏などは御家人としてみえてこない。かれらの名字の地は伴野荘または大井荘の領域に含まれる地域と考えられる。小笠原氏は根井・落合・石突氏が義仲とともに没落した佐久武士の所領に入ったと考えられる。

また、武田氏も佐久に入ってきたと考えられる。

仁治二(一二四一)年、海野幸氏と武田信光が上野国三原荘と信濃国長倉保の境界争いをした(『吾妻鏡』―信史④八六)。『吾妻鏡』にははっきりと記してないが、文の流れから武田信光が長倉保の地頭であった可能性が高い。この武田信光も義仲に従い没落した佐久武士の後に入ったとは考えられないであろうか。

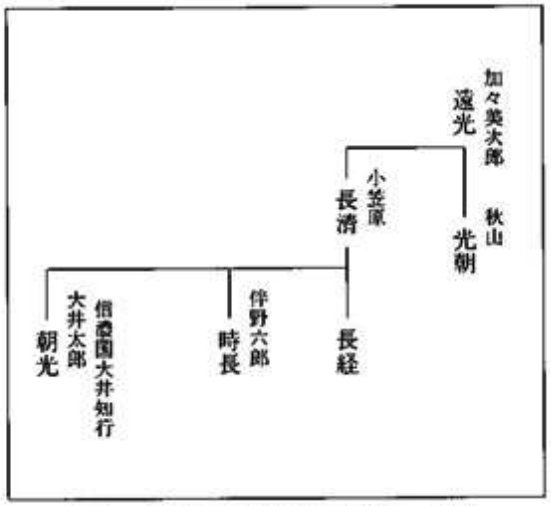


図3　小笠原氏系図(『尊卑分脈』より)

二　承久の乱と御代田

源将軍家の断絶　正治元(一一九九)年正月、鎌倉幕府の象徴であるとともに、最大の実力者であった頼朝が急逝した。頼朝の跡は嫡男の頼家が継いだ。それにともない、比企能員が勢力を伸ばした。

比企能員は頼家の乳母の兄で、かつ頼家の妻は能員の娘で、信濃国内の御家人にも大きな影響力を持っていた。これに恐れをもったのが、頼朝の外戚として勢力をふるってきた北条氏であった。比企一族の手に政権を奪われまいとする北条時政は、建仁三(一二〇三)年九月、仏像の供養にかこつけて、能員を自邸に招待し殺害してしまった。頼家は事件をきいて激怒したが、逆に将軍の地位を追われ、かぞえ年一二歳の弟の実朝が三代将軍となった。将軍就任と同時に実朝は北条時政の屋敷に移った。そして幕府の実権は北条時政、さらにはその子供の義時の手に握られた。

承久元(一二一九)年正月、右大臣に就任した実朝はその報告のため、源家の氏神である鶴岡八幡宮に参拝した。その帰途、頼家の二男公暁により暗殺されてしまう。公暁はついで北条義時を殺そうとしたが、別人を襲い義時は難をのがれた。

公暁は、頼朝以来の有力御家人である三浦義村をたよって将軍になろうとしたが、はたせず殺された。そしてここで源頼朝の血筋は絶えてしまうこととなった。

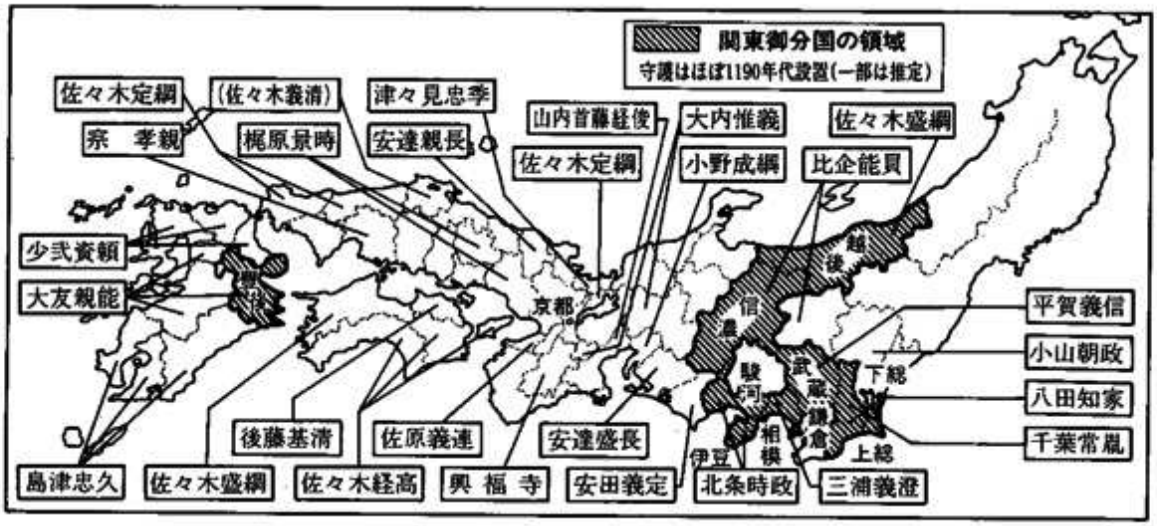


図4　1190年代の関東御分国と守護の分布
当時の長野県は第2代将軍頼家のもとで勢力をのばした比企能員の領域であった。

承久の乱の勃発　鎌倉幕府の成立以後、政治は公家・武家の勢力が、対立したり融和したりしながら動いてきた。朝廷を頂点とする公家勢力にとっては、鎌倉幕府といえども朝廷の命令には従うべきものであった。しかし実際は力関係からいって、その逆の場合が多いのが実情であった。

朝廷は後鳥羽上皇の時代であったが、建仁年間以降、上皇の独裁といってよい状態が続いていた。上皇は朝廷の権威を回復しようとつとめていた。上皇の意志は少しずつ討幕の方向に向かった。平安時代の末、白河法皇が北面の武士という院直轄の武力を組織したが、上皇はそれにならって新たに西面の武士を置き、武力の強化を図った。

そのような時、源家の血筋が絶え北条氏が幕府の実権を握った。後鳥羽上皇はこの事件が幕府内部の混乱につながると予想した。上皇は、朝廷内部の親幕府派の公家を排除するとともに、各国の武士を集めはじめた。

承久三（一二二一）年五月十四日、後鳥羽上皇は鳥羽（京都市）の離宮にある城南寺で流鏑馬を行なうと称して、畿内とその周辺の国々から一七〇〇人ほどの武士を集めた。そして翌五月十五日、上皇はこれらの武士たちに京都守護の伊賀光季の館を襲撃させて、北条義時追討の兵を挙げた。この情報をきいた幕府は、早速各国の御家人に京攻めの命を下した。幕府軍は東海道、東山道、そして北陸道の三手に分かれ、五月二十二日に鎌倉を出発した。信濃の御家人の多くは、三手のうち東山道に属した。東山道軍は、五万騎で武田信光、小笠原長清、

小山朝長、結城朝光を将軍として京上した。

なお、東山道軍以外の軍に参加した信濃武士も、一部にはいたらしい。佐久郡の望月の御家人と考えられる春日貞幸は、東山道軍に従うよう指示を受けたにもかかわらず、その指示に従わず東海道軍に属した。貞幸は北条泰時の被官となっていたことから、泰時が将軍をしていた東海道軍に従ったらしい。

佐久武士の動き　三手に分かれて京攻めを開始した幕府軍一九万にたいして、西国武士を中心とした京方軍はわずか二万数千であった。六月十四日、京方軍は京都の防衛線である宇治川と瀬田川で幕府軍を迎え撃った。しかし圧倒的な幕府軍のまえになすすべもなく、翌十五日には幕府軍のうち東海道軍と東山道軍が京に入り、乱は終わった。さてこの乱に幕府軍として参加した御家人のうち、佐久武士と考えられる御家人が七氏ほどいる。

○小笠原長清・四郎（佐久市・伴野荘＝甲斐の可能性も有）
○小田切奥太（白田町：小田切郷＝伊那郡の可能性も有）
○猪中三（望月町・立科町：毛田井郷＝水内郡の可能性も有）
○布施左衛門三郎・右衛門次郎（望月町：布施郷＝水内郡の可能性も有）
○春日刑部三郎貞幸・刑部三郎太郎・小三郎（望月町：春日）
○河上左近（川上村：川上）
○望月小四郎・三郎（望月町：望月牧）

これら佐久郡出身の鎌倉武士たちの戦いぶりは次のとおりであった。

春日貞幸は前に述べたとおり、北条泰時とのかかわりから東海道軍に所属した。かれは六月十四日の宇治川の合戦で芝田橘六・佐々木信綱らと先陣を争って、子息の太郎・小三郎とともに宇治川を渡ろうとした。これを見た京方軍の発した矢が貞幸の馬にあたり、貞幸は水中に投げ出されたが危うい所で救出された。いっぽう子息の太郎・小三郎は川に流され戦死したらしい。春日氏はこの戦いで、子息・郎従あわせて一七人を失った。

布施左衛門三郎・右衛門次郎も六月十四日の宇治川合戦で前者は渡河の際負傷し、後者は戦死した。

京方佐久武士の動向　京方についた佐久武士に、佐久市志賀を本領とした志賀五郎がいた。志賀氏は御家人として幕府に仕えていた。『承久記』によれば、志賀五郎は「平九郎判官（三浦胤義）の手の者」であったという。三浦胤義が京方についたので、それに従ったらしい。嘉暦四（一三二九）年当時、志賀氏の本領である志賀郷の地頭は諏訪氏になっており、志賀氏は承久の乱で没落したと考えられる。

佐久武士へ　承久の乱に勝利した幕府は、後鳥羽上皇を隠岐に流し、土御門・順徳両上皇をそれぞれ土佐・佐渡に流した。また仲恭天皇を廃し、新たに後堀河天皇を立てた。さらに後鳥羽上皇の近臣のほとんどが捕らえられ、鎌倉へ護送の途中で切り殺されたり、自殺させられたりした。そして京方に加わった公家や武士の所領三千余か所は幕府に没収され、あらたに御家人がその地の地頭に任命され

た。

信濃の数多くの御家人も乱の恩賞として、西国に所領を得ることになった。佐久地方に関係する御家人でそのことがわかるのは、小笠原長経、平賀有信および大井朝光の三人である。

小笠原長経は阿波麻殖国保（徳島県麻殖郡鴨島町）を与えられた。麻殖保は文治二（一一八六）年当時、平康頼が保司職にあり、建久二（一一九一）年当時、後白河上皇の荘園群である長講堂領であった。

平賀郷内滑瀬村内の山田遣道の田・屋敷などを領有していた平賀九郎有信は、安芸国安芸町村（広島県）の地頭職を与えられた。

大井朝光は承久の乱の勲功の地として、伊賀（三重県）の虎武保の地頭職を与えられたとされている。

三　人々の動きと生活

「宴曲抄」と鎌倉街道

「宴曲抄」は、早歌とよばれる中世歌謡の一つで、僧明空が正安三（一三〇一）年に編んだ。その「宴曲抄」のなかに「善光寺修行」という作品がある。「善光寺修行」は鎌倉から善光寺への道行きの名所を読み込んだ歌謡で、鎌倉時代の信濃の交通路をよく語っている史料である。

その道筋は鎌倉を出発し、埼玉県入間川―群馬県前橋付近―碓氷峠を越えて、信濃に入り善光寺に至るものであった。

「宴曲抄」は信濃に入ってからの道筋を、つぎのように謡う。

一急雨のやすらひに、まだ染めやらぬ紅葉ばの、薄紅の臼井山。おもふどちは道行ぶりもうれしくて、いかでわかれむ雛山の、其名もつらし過ぎなばや。雲間にしるき明方の、浅間の煙にまがふは、高根にのこる横雲の、跡よりしらむ篠の目。日かげのどけく水葱の松原、遥々とへだつる方や葛原の、里より遠の程ならむ。深きはしらず桜井に、花の白浪散りかゝり、霞める空そおぼつかなき。望月の駒引かくる布引の、山の楚交にみゆるは海野・白鳥飛鳥の川にあらねども、岩下かはる落合や、淵は瀬に成たぐいならん。富士の根の姿に似たるか、塩尻・赤池・坂木・柏崎。同雲居の月なれど、何の里もかくばかり、よも佐良科とみゆるは、姨捨山の秋の夜。筑摩・篠の井・西河、さまゞゝの渡を越過て、既に彼所に詣でつつ、偖思つづくれば、かすかに伝聞、西天月氏の古。

これにより行程中にある地名、または地名と思われるものを拾ってみると、

臼井山〈碓氷峠〉・雛山・浅間の煙〈浅間山〉・高根・篠の目〈東雲か〉・松原・葛原・桜井・望月の駒・布引・海野・白鳥・岩下・落合・塩尻・赤池・坂木・柏崎・佐良科〈更級〉・姨捨山・筑摩〈千曲川〉・篠の井・西河〈犀川〉という順序になる。

これらの地名のすべてを、実際に通過した地点とすることはできないことは、浅間・姨捨山などが読み込まれていることからも推定できる。つまり、実際に通過した地点からみえる信濃の名所を記している場合もある。

しかし、おおよそ

軽井沢町〈碓氷峠・離山〉―東部町〈桜井・海野〉―上田市〈岩下・塩尻〉―坂城町〈坂木〉―更埴市〈柏崎＝柏王か・千曲川〉―長野市〈篠の井・犀川〉

といった道筋が考えられる。この道筋は、近世の北国街道と大筋ではあまり変わらないとみられる。

『宴曲抄』と御代田　さて、『宴曲抄』にみられる道筋が、御代田を通過していたことは容易に推測できる。御代田付近の状況は、軽井沢の離山から東部町の桜井の間で、『宴曲抄』が述べている内容になる。それは、「浅間の煙〈浅間山〉・高根・篠の目〈東雲か〉・松原・葛原」となる。

「浅間の煙」は、道筋から浅間山を眺めたものであるから除くとして、高根・篠の目・松原・葛原あたりが御代田・小諸の地域の当時の地名としてあったのであろうか。

『長野県町村誌』によれば、豊昇に高根社がある。これが「高根」の名残であるかもしれない。かりに名残であるとすると、『宴曲抄』の道筋は、御代田付近では江戸時代の北国街道とは、ずれることになる。

天災と御代田の人々　平安時代十一世紀以降人跡が途絶えていた塩城之腰遺跡のムラ　野の城之腰遺跡の地に、鎌倉時代になって久しぶりにムラを営んだ人々がいた。ここは浅間山の天仁（十二世紀初頭）の大噴火の災害を間近にみた地域でもある。噴火への脅威を感じてかいったんはどこかへ逃れていた人々の後裔が、約一〇〇年の空白をおいてふたたびこの地での生活を開始したのであろうか。

城之腰遺跡の地に開かれたのは実に小さなムラだった。平成二（一九九〇）年の発掘によれば、発見された建物等は主屋と推定されるF2号掘立柱建物跡が一軒、倉庫跡と考えられるD1号土坑が一軒、性格不明の石組遺構が一つある。ほかは何に利用されたかわからない痕

写5　豊昇高根社跡

跡が少数地面に残されている程度である。せいぜい一～二世帯が暮らす程度のムラだったのであろう。そして、建物の耐久期限が過ぎると二度とこの場所にムラが営まれることはなかった。

ムラの跡からの出土品は少なく、十三世紀に中国で焼かれた白磁という焼き物の破片が見つかった程度である。ムラの性格は定かでないが、『佐久口碑伝』には「城の腰は頼朝の布陣の跡」と伝えられる。また、西に接する西城は「梶原源太の陣の跡」とも伝えられるなど真楽寺周辺には頼朝に纏わる伝説が散見される。実際に源頼朝やその家臣が長野県を訪れた記録は残っていないので、伝承の信憑性は疑わしい。ただし、建久四（一一九三）年三月に浅間山北麓に広がる荘園（現群馬県長野原町・鎌原村付近）で頼朝は巻狩を行なっているので、この評判が、真楽寺周辺にまで伝わり、後代に残された可能性はあると

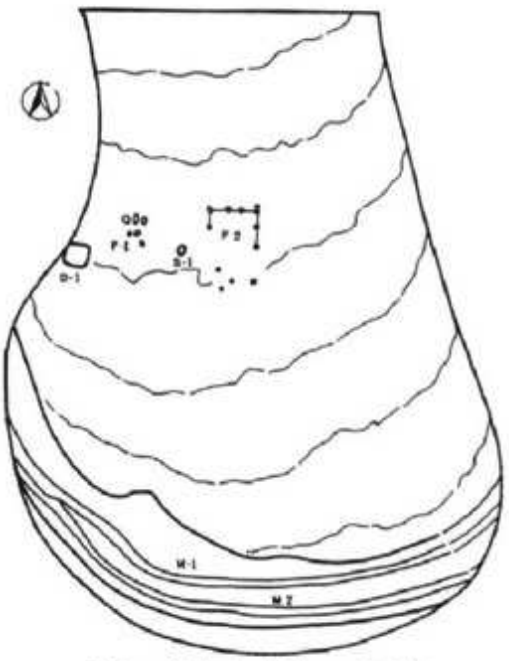


図5　城之腰　中世のムラの跡

写6　城之腰遺跡と背後の山

写7　絵図にみる掘立柱建物
（佐久郡伴野市）（『一遍上人絵伝』より）

思う。また、城之腰の東には古城という地名もあり、真楽寺周辺に城の字が付される地名が三か所も並んでいる点は注目される。

西城　塩野真楽寺の西南にあり、西城という字名が残る。堀・土塁などの遺構はなく、とくに平場を造成した痕跡もみられない。真楽寺東の城之腰遺跡も同様な状態であった。しかし、発掘の結果、城之腰遺跡からは鎌倉時代の小さなムラが見つかっており、真楽寺の左翼にあたる西城からも、鎌倉時代の何らかの施設が見つかる可能性が高い。

なお、土地所有者内堀元清氏によると、以前に畑を掘削していたところ、ドラム缶位の穴が開いたそうである。この穴は中世遺跡から特徴的に発見される地下貯蔵庫「地下式坑」であった可能性が高い。

梶原城　真楽寺の西南にあると伝えられ、西城と同じ場所の可能性もある。『佐久口碑伝』には「梶原城は梶原源太の陣の跡」と伝えられる。梶原源太とは梶原景季のことで、源頼朝に属した武将である。木曽義仲追討の際、宇治川にて佐々木高綱と先陣争いをしたことで名が残っている。景季が長野県にやって来た証拠はなく、実際ここに陣を張ったとは思えないが、周辺に残る頼朝伝説の一つとして注意しておきたい。

第三節　南北朝の内乱から室町幕府へ

一　南北朝の内乱と滋野一族

鎌倉幕府の滅亡　元弘三（一三三三）年五月、鎌倉東勝寺で得宗の北条高時と、それに連なる人々が自害して、鎌倉幕府は滅びた。信濃出身の御家人で得宗の被官でもあった諏訪盛高は、このとき高時の次男亀寿丸（時行）を奉じて信濃に逃れた。

六月には後醍醐天皇が京にもどり、新政府（建武政権）が樹立された。そして、小笠原貞宗が信濃守護に任命された。

建武二（一三三五）年七月、諏訪頼重らの諏訪一族が、北条時行を擁して兵を挙げた。中先代の乱である。これに呼応した東信の滋野一族や保科・四宮氏は埴科郡船山にあった守護所を攻撃した。そして、埴科郡と更級郡の境界を流れる千曲川の河原で合戦を行なった。信濃全体が戦乱に巻きこまれることになった。

望月城の戦いと中先代の乱　鎌倉時代以降、御代田に勢力を持ったのが誰なのかよくわからないので、この戦乱で、御代田を支配していた武士がどのような動きをしたのかもまったくわからない。北佐久郡全体でみると、建武政権に反旗をひるがえした滋野一族の中心勢力は望月氏であったらしい。

七月に信濃守護所を奪うため、北条時行の挙兵に呼応して千曲河原で合戦を行なった滋野一族らはしだいに守護軍に追われたようである。八月一日、守護軍は望月氏をその居城である望月城まで追いつめて、戦い、望月城を落城させた。

いっぽう、この信濃国内の戦いとは別に、北条時行軍は鎌倉を攻め、これを奪い返した。しかし、八月二日に京を発った足利尊氏により、十九日には鎌倉を奪い返され、時行軍の多くは戦死し、時行は逃亡した。鎌倉を鎮圧した尊氏は、後醍醐天皇の帰京の命令に従わず反旗をひるがえした。

大井荘の合戦と御代田　これに対し後醍醐天皇は、足利尊氏討伐の軍を鎌倉に派遣した。建武二（一三三五）年十一月十九日に新田義貞を大将とする東海道軍が、尊氏討伐のため京都を出発した。そして二十三日おいて、大智院宮ら皇族・公家を大将とする東山道軍も、鎌倉を目指し京都を発った。

新田義貞の東海道軍は、十二月五日に箱根・竹下の戦いで、足利尊氏・直義軍に敗れ、京都に戻った。いっぽう東山道軍は信濃に入り、十二月末まで、小笠原貞宗・村上信貞らを中心とした信濃の尊氏方と

戦いを繰り返したらしい。

そして、その戦場の一つになったのが大井荘であった。『太平記』では、東山道軍は大井城（佐久市岩村田）を攻め落としたと記す。しかし東山道軍に属していた伊予国の武士忽那重清は、十二月二十三日に「大井荘」で小笠原貞宗・村上信貞らと合戦をしたと述べているので、大井荘内のあちこちで戦闘が行なわれたのかもしれない（信史⑤三一一）。

写8　望月城遺景（『望月城跡』より）
建武政権に反旗をひるがえした望月氏の居城望月城。過去に発掘調査が行なわれたこともある。

ちなみに当時の大井荘には小田井が含まれており、小田井が戦場になった可能性もある。

南北朝の内乱と御代田　中先代の乱をきっかけとした足利尊氏と後醍醐天皇の抗争は簡単に決着がつかず、後醍醐天皇の吉野の朝廷と足利尊氏が擁立した光明天皇の京都の朝廷が並立することになった。いわゆる南北朝の対立である。そして、武士も公家も南朝・北朝のどちらかにつき、いわゆる南北朝の内乱がはじまった。

後醍醐天皇は全国に皇子たちを配置して、足利尊氏方（北朝方）と戦った。第八皇子の宗良親王もその一人で、各地を転戦した。しかし、南朝勢力は徐々に後退し、庚永三（興国五年＝一三四四）年のころには、宗良親王も、伊那郡大河原の地（下伊那郡大鹿村）にこもり、信濃国内の尊氏方の勢力に散発的に抵抗するにすぎなくなっていた。

宗良親王が大河原の地にこもったのは、その地が信濃の南朝方勢力であった香坂高宗の根拠地であったことによる。

香坂氏は佐久の香坂を名字の地とする武士で、滋野氏一族と考えられている。香坂氏は、鎌倉時代のある時期に水内郡の牧城（信州新町）の付近に移住し、勢力を張ったらしい。中先代の乱の際には、香坂心覚が水内郡の牧城に籠城し、守護方に抵抗したが、高宗もこの一族なのであろう。

宗良親王は、庚永三年以後およそ三〇年間の大部分を大河原で過ごすことになる。その間、浅間山の近辺、および更級の里（佐良科里）にも滞在したらしい。

○信濃国、浅間の山ちかきわたりに住み侍りし比(ころ)

あさましや　浅間の嶽も　近ければ　恋の煙も　立ちやそうらん

（『李花集』）

○千首の歌奉りし時、山眺望を

信濃路や　みつつ我がこし　浅間山　雲は煙の　よそめなりけり

（『新葉集』）

右の歌二首は、宗良親王の作であるが、これから宗良親王が浅間山の近く、つまり佐久の地に居住したことが知れる。居住候補地については、「御所平(ごしょだいら)」の地名があることから、小諸市の古宿や佐久市の内山(うちやま)などが考えられているが、確定していない。

また、宗良親王が佐久の地に居住したのが、初期の南北朝の内乱のころなのか、それとも、つぎに述べる観応(かんのう)の擾乱(じょうらん)のころなのかは、よくわからない。

観応の擾乱と御代田　南北朝の内乱が鎮まりかけた観応元（正平五＝一三五〇）年、足利尊氏とその弟の直義(ただよし)の対立から観応の擾乱がおこった。尊氏と直義は互いに南朝と結びついて相手を圧倒しようとしたため、南北朝の対立はふたたび混迷を深めた。

観応二（正平六＝一三五一）年十月、足利尊氏は南朝へ降り、弟直義との戦いを有利に進めた。そして観応三（正平七）年正月、尊氏と直義は和睦したが、その一か月後、直義は尊氏に鎌倉で殺害されてしまう。

直義が殺害された直後の閏(うるう)二月、南朝方は東西呼応して兵をあげた。上野では、新田一族が挙兵し、宗良親王は、信濃の武士を率いて鎌倉をめざした。宗良親王・新田の軍は尊氏軍を追い、一時鎌倉を奪う。しかし、すぐに反撃をうけ、武蔵国小手指原(こてさしはら)などの戦いで尊氏軍に敗れ、宗良親王は信濃に退いた。

『太平記』などによれば、この戦いで宗良親王に従った信濃武士は、次のとおりである。

○　伴野十郎（時泰？）　○　滋野八郎（善幸？）
○　祢津小二郎　○　同修理亮（祢津小二郎舎弟）
○　諏訪祝（神家一族三十数人）　○　滋野一族（二〇～三〇人）

このうち、滋野八郎については、碓氷峠の熊野権現の神官で、長倉を根拠とした武士であったという説や、海野氏であるという説がある（旧『北佐久郡志』『佐久市志』）。

いずれにせよ、この後信濃の南朝勢力は少しずつ衰退してゆき、応安七（文中三年＝一三七四）年、宗良親王が吉野に帰ったことにより信濃の南朝方勢力は消滅したと考えられる。

二　大塔合戦と御代田

室町幕府と信濃　さて、足利尊氏の政権は室町幕府とよばれているが、南北朝の内乱のなかで少しずつ整備されていった。そして永和四（天授四年＝一三七八）年、尊氏の孫の義満は京都北小路室町に室町第（花の御所）を造営し移転した。室町幕府の呼称のもとは、この室町第に幕府が置かれたことによる。南北朝の対立が残って

いるとはいうものの、室町幕府はこのころから安定期に入る。そして明徳三（元中九年＝一三九二）年南北朝の合一がなった。

信濃国内にあっては、至徳年間（一三八四～八七）のころ村上・高梨・小笠原氏など、国人とよばれる在地の有力武士と守護斯波義種の代官（守護代）二宮種氏が厳しく対立していた。しかしそれも守護を斯波義将に交替することにより落ち着きをみせた。

守護小笠原長秀の信濃入と大井氏　応永六（一三九九）年、信濃守護は斯波義将にかわり、小笠原長秀が任命された。この年十月、長秀は代官を信濃に派遣し、長秀自身も伊那郡伊賀良荘に滞在したらしい。しかし国人島津国忠の反対にあうなど、任命当初から波乱含みな情勢となった。

この年、長秀は大内義弘討伐（応永の乱）に参加するため、いったん信濃を離れた。

翌年七月、長秀は京から信濃に入った。長秀は、まず一族の大井光矩の助力を得るため佐久郡の光矩の館（佐久市岩村田にあったという）に入り、光矩と信濃支配の談合をした。大井氏は、信濃における有力な小笠原一門であることは前に述べた。そして南北朝時代の初め、長秀の祖父にあたる政長が信濃守護を勤めていた時、光矩の父と考えられる光長は、その守護代であった。

小笠原長秀と信濃国人の対立　さて、長秀は吉日を選び善光寺に入り、守護としての任務を開始した。これにたいして信濃の国人たちは、新守護長秀への期待を含めて各種の要求をするため、長秀と対面した。

当時の信濃の国人たちは、一族ごとないしは地域ごとに団結していたが、これを一揆といった。このうち犀川流域の国人たちの団結を大文字一揆といった。大文字一揆の人々は、守護長秀にたいして代々の遺恨を持っていたらしい。しかし大文字一揆の人々も取り敢えず守護の長秀と対面し、衝突は避けられたかにみえた。

ところが小笠原長秀は、信濃の最有力国人であった村上氏（満信）が知行している川中島の所々に強引に守護使を入れ、年貢の取り立てなどを始めた。小笠原長秀のこのような行動は、大文字一揆の人々、村上氏、そして佐久の伴野・平賀・望月氏などの反発を招いた。

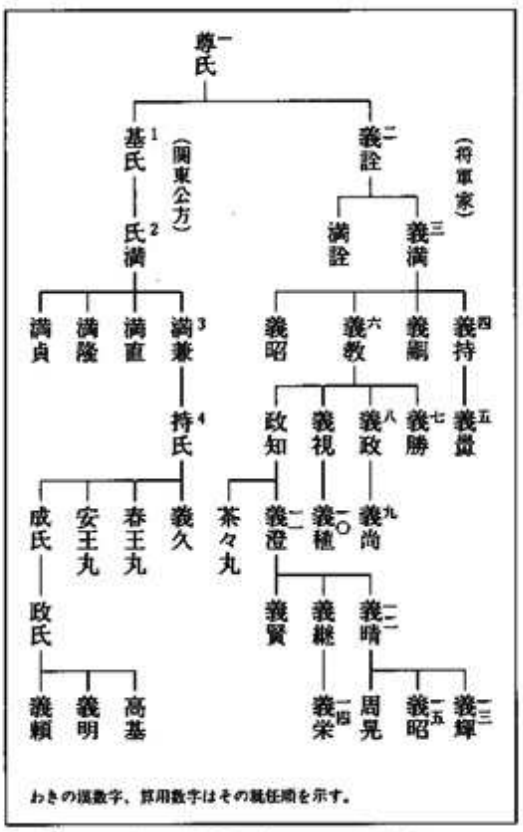


図6　足利氏略系図（『県史通史編』中世二より）

大塔合戦　かれら信濃の国人たちは、反小笠原長秀連合を組み、現在の長野市篠ノ井付近で長秀に戦いを挑むことになった。国人側の兵力は村上満信を中心とした軍勢五〇〇騎、伴野・平賀・望月氏ら佐久勢七〇〇騎、海野・会田・岩下氏ら筑北の国人三〇〇騎、高梨・江部・草間氏ら高梨一族五〇〇騎、井上・万年・須田氏ら高井源氏一族五〇〇騎、大文字一揆の人々八〇〇騎など、総勢三三〇〇騎。

これにたいする小笠原長秀軍は八〇〇騎で、九月十日に善光寺を発ち、犀川を渡り川中島の横田に陣をはった。

長秀が信濃入りの際、協力を要請した大井光矩も軍勢五〇〇騎を動かしたが、信濃国人の立場と、小笠原一族の立場との板ばさみのためか、丸子にとどまったままであった。

九月二十四日になって、形成不利とみた小笠原長秀軍は深夜に横田から塩崎城に移ろうとした。しかし移動中に夜が明け、村上軍に発見され総攻撃を受けた。軍は二分され、大将の長秀らは塩崎城に、一族の坂西長国らは大塔城に逃げ込んだ。大塔城は古要害とよばれており、使われていなかったらしい。そのためしっかりした防御の施設も、兵糧もなかったと思われる。大塔の古要害の籠城軍はたちまち飢えに苦しんだ。十月十七日夜、籠城軍は城から打って出て全滅した。

翌日、反小笠原軍は小笠原長秀のこもる塩崎城に向かい、塩崎城の長秀軍の全滅も時間の問題であった。しかし、この合戦の形成をみていた大井光矩は村上満信と談合し、小笠原長秀の命を救うことになった。結局、長秀は東海道を経由して京に戻り、信濃守護職を解任された。

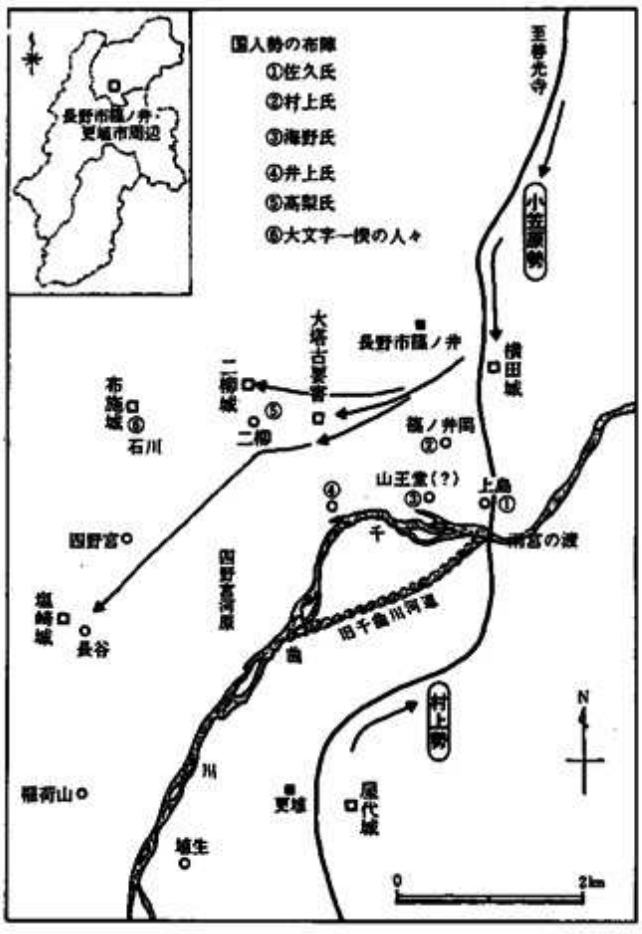


図7　「大塔物語」による小笠原勢の進路と国人勢の布陣図
（『県史通史編』中世二より）

大塔合戦と佐久武士　大塔合戦は、好むと好まざるとにかかわらず、信濃の武士のほとんどがかかわった。そして、佐久武士も同様で、前に述べた伴野、平賀、望月氏のほか、桜井、高沼、州吉、小野沢、田口氏などが国人方として参加したが、その勢力は前に述べたとおり七〇〇騎であった。これに大井光矩が率いたのが五〇〇騎で、両者合わせて一二〇〇騎となる。当時の佐久郡内の軍事動員力を知る

上で興味深い。

残念ながら、当時の御代田を根拠とした武士については知るところがない。あえて推測すれば、大井光矩の軍に従った武士がいたと考えるのが、妥当かもしれない。

三　関東の争乱と御代田

永享の乱と御代田　室町幕府の創設者の足利尊氏は、鎌倉幕府の根拠地であった鎌倉に、東国支配のため、鎌倉府を置いた。そして、首長の鎌倉公方には、尊氏の次男の基氏をおき、基氏の子孫がこれを世襲した。またそれを補佐する管領には上杉氏がついた。鎌倉府は代が進むにつれ、室町幕府と対立するようになった。また、鎌倉公方と管領上杉氏が対立する場面もみられるようになった。

正長元（一四二八）年、将軍義持が没し、室町将軍家の正嫡の血筋が絶えたとき、その後継者となることを望んだのが鎌倉公方の足利持氏であった。しかし、義持の後継者は、その弟の義教に決定した。そして持氏は京都の将軍への反逆の意志をあらわにし、挙兵を企てるが、管領の上杉憲政に諫言され事なきを得る。

しかし、永享元（一四二七）年、持氏は鎌倉府の管轄内（関東および陸奥）の反持氏勢力の討伐を開始した。その最初が、陸奥白河の結城氏朝である。

これに対して、将軍義教は、鎌倉府の管轄国に隣接している駿河・信濃・越後の守護に結城氏朝の救援をさせた。このような鎌倉府と幕府の対立が間接的に一〇年近く続くことになるが、信濃は幕府の鎌倉府に対する前線基地の役割をはたした。

鎌倉公方の持氏が永享の年号を用いたのは、改元から二年後の永享三（一四三一）年の八月であった。持氏の京都幕府に対する反発の度合いが強かったことを示す話である。

大井氏と芦田氏の対立　このような情勢のなか、幕府にとっては、信濃国内が守護のもとで一体となっていることが必要であった。

永享七（一四三五）年、当時の信濃の守護は大塔合戦で失脚した小笠原長秀の弟の小笠原政康であった。この年の正月、小笠原政康は、将軍義教に召され、鎌倉公方持氏の野心について、「条々仰せ含められる子細」があった（信史⑧五〇）。正康は信濃守護として、持氏の動きの監視と挙兵した際の軍事行動について、将軍義教から命を受けたのであろう。

これ以前、佐久郡内では大井氏（越前守持光）と芦田氏（下野守）が対立していた。対立の原因はわからないが、いったんは落ち着きをみせたが再燃して、互いに城郭を築くまでに悪化していたようである。小笠原政康が、将軍義教から関東公方持氏にたいする対処を命ぜられたのは、大井氏・芦田氏の対立が再燃した時であった。

政康は義教の命令にたいして、

「佐久郡は碓氷峠や上野へ通ずる道筋になります。大井氏を助けて芦田を討ち、小笠原と大井が一体となれば、信濃の治安は問題

がなくなります。そうすれば、関東（鎌倉公方）のことについても、お役に立てると思います。」

と述べている。

小笠原政康の発言に誇張はあったとしても、当時の佐久郡においては、大井氏が大きな勢力を持っていたことがうかがえる。

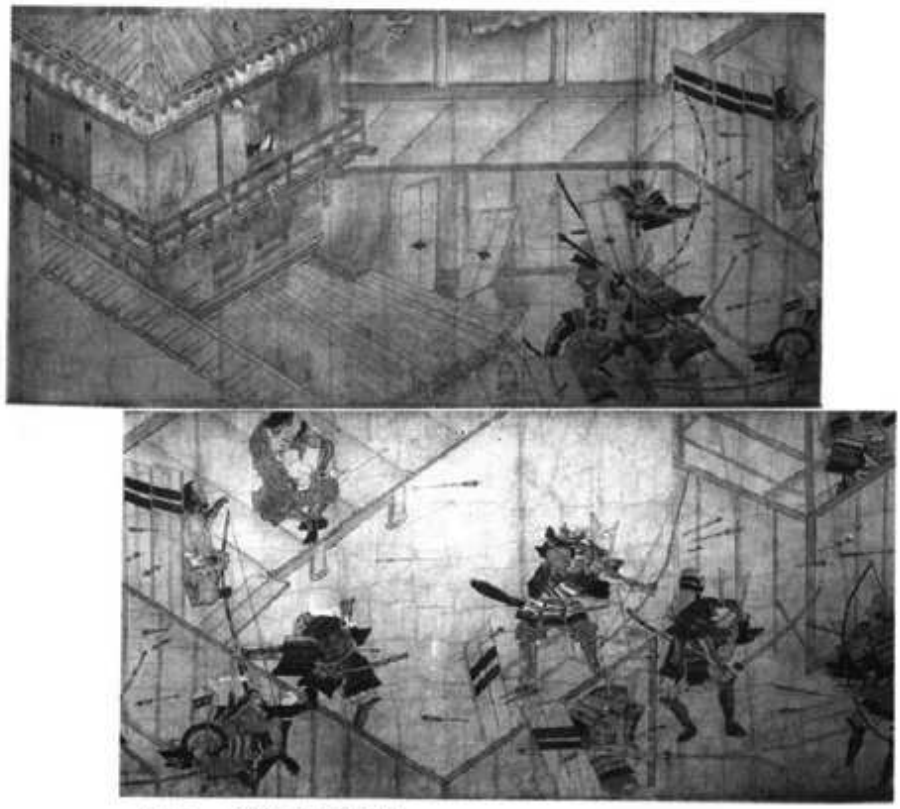
小笠原政康の、さきの発言はあったが、簡単には芦田氏を討つことができなかったようである。小笠原政康のこの発言があってから十数日の二月十七日、将軍義教は大井氏と芦田氏の和睦を笠原政康に命じた。関東公方の持氏を監視するには佐久郡内の安定が重要課題であったのであろう。

しかし、この和睦は簡単に進まなかったらしい。そして幕府はふたたび芦田氏の討伐を、小笠原政康に命じたらしい。しかし、それは鎌倉公方の意向により、永享七年の九月には延期の命が下るなど、容易には進まなかった。結局、芦田下野守が小笠原政康に降伏したのは、永享八（一四三六）年の八月三日であった（県史年表）。そしてこの降伏により、佐久平の大部分が大井氏の勢力下に入ることになったらしい。

永享の乱と結城合戦　大井氏と芦田氏の対立がこのように長引いた原因は、鎌倉公方と将軍義教の対立にあった。そして、永享十年八月、鎌倉公方足利持氏は、これ以前から関係が悪化していた関東管領上杉憲実（のりざね）を討つため出陣した。

これに対し憲実は、将軍足利義教に救援を求めた。義教は持氏を討つため追討を関東に向けた。永享の乱である。この戦いは永享十一年に、持氏が自害したことにより終わり、鎌倉府も廃絶した。

しかし、永享十二年三月、下総の結城氏朝が持氏の遺児春王丸・安王丸を結城城に迎え、鎌倉府再興のため挙兵した。結城合戦である。結城氏は約一年にわたり結城城にこもり抵抗したが、嘉吉元（一四四



写9　「結城合戦絵詞」

一）年四月に落城した。興味深いことは、この結城合戦において、大井持光が結城氏方に加わったことである。その加わり方については、永享十一（一四三九）年の七月か八月ごろ結城氏の挙兵に呼応して挙兵し、碓氷峠まで押し出したというのである（信史⑧一四四）。

これまで述べてきた経過からすれば、大井持光が結城氏方につくことは考えられない。持氏が結城氏方についた理由として考えられていることはつぎの二つである。

（一）　持氏が自害したとき、末子（第四子）の永寿王丸は五歳であった。永寿王丸は転々としたのち大井持光を頼り庇護されていたが、兄二人が結城城で挙兵したとき、持光は家臣二人をつけて結城城におくりつけたというかかわりがあった。

（二）　大井氏の中には、「持」の通字はなく、持光の「持」は持氏とかかわりがあったことによるのではないか。そのかかわりとしては、応永三十（一四二三）年、足利持氏が常陸国の小栗氏を討ったとき、大井持光は足利持氏にもっともおぼえのめでたい武士であったことが考えられる（『佐久市志』）。

しかし、いっぽうでは、三河守、河内守、対馬守を称する三人の大井氏が、信濃守護の小笠原政康に率いられて結城城攻めに従っている。いずれにせよ、当時の御代田町を支配していたと考えられる大井氏の動向は、よくわからない点が多い。

四　人々の往来と信仰

関東への出入り口としての佐久　古代以来、信濃は京と関東との間に対立がおこったときには、両者にとって、攻撃や防衛の最前線の国として重要な位置を占めていた。とくに関東の入り口にあたる碓氷峠を控えている佐久郡は、ことに重要になったと考えられる。古代にあっては、平将門の乱であり、鎌倉時代にあっては承久の乱であった。

しかし南北朝の内乱の時代から室町幕府の時代ほど、その重要性が高まった時代はなかったと考えられる。

佐久郡から関東の上野に抜ける道筋は、碓氷峠、香坂峠、内山峠越えなどがあったと考えられている。そしてこの中でもっとも交通が頻繁であったのは、碓氷峠であった。

古代のうち、とくに律令以前の碓氷峠は、現在の入山峠であったが、その後中世までの間に現在の碓氷峠に移ったとされている。鎌倉時代のところで述べた『宴曲抄』にみえる道筋も、現在の碓氷峠を越えたと考えられる。そして、現碓氷峠を越えた人々は、御代田町も通過したのであろう。

御代田を通過した人々　建武二（一三三五）年、足利尊氏が鎌倉で後醍醐天皇に反旗をひるがえしたとき、尊氏討伐のため大智院宮らの皇族・公家軍は東山道から鎌倉を目指し、大井荘で合戦した

ことは前に述べたとおりである。

観応の擾乱の主役の一人である足利直義が殺害された直後には、宗良親王が信濃の武士を率いて鎌倉をめざした。

皇族が鎧を着た姿は御代田の人々にどのように映ったのだろうか。

応永七（一四〇〇）年七月、信濃守護として京から信濃に入った小笠原長秀は、まず一族の佐久郡の大井光矩の館に入ったというから、やはり碓氷峠を越えているのかもしれない。

また、鎌倉府と室町幕府の対立の間、佐久の地が争点の一つとなっており、多くの武士が御代田を通過したのであろう。

しかし、御代田を通過したのは、戦いのための武士だけではない。史料上にはほとんど現れないが、色々な目的をもって、御代田を通過した人々がいたことは明らかである。

また、仕事のため御代田に滞在した人物もいた。上野国の世良田（群馬県新田郡尾島町）在住の仏師鏡鑁である。

鏡鑁は応永二（一三九五）年の春から秋にかけて御代田に滞在し、真楽寺の仁王像を造立した。

真楽寺の創建と移転　真楽寺は大沼にある真言宗の寺で、御代田町の寺の中では、もっとも古い歴史をもっていると考えられる。伝承では、用明天皇の代（六世紀）に浅間山の噴火を鎮めるために創建されたというが、事実とは考えにくい。しかし、浅間山の修験に関係する寺院として、平安時代から中世の初めには創建されていたと考えられる。

真楽寺は、活火山である浅間山麓に創建されたため、噴火および山津波の被害をうけ、二度移転したという。現在上寺場とよばれている地が創建の地で、最初の移転の地が、下寺場であるという。そして、現在地に移ったのは、江戸時代の延宝から元禄（十七世紀末）のころと考えられる。

写10　真楽寺の仁王像（吽形）

仁王像の造立　さて、真楽寺の確実な歴史を語る最古の史料が、さきに述べた仁王像である。仁王像は阿形と吽形の二体作られたが、この像の後頭部の中に墨で造立の趣旨や造立者の名前、造立年などが記されていた。

その内容は、阿形の「奉造立二王金剛力士、本願別当金剛仏子禅済」の書き出しで始まり、吽形の「応永二年乙亥四月五日、始作之、同七

写11　仁王像後頭部の墨書

月廿五日殿入」で終わる。

この墨書から一番簡単にわかることは、仁王像が応永二（一三九五）年の初夏の四月五日に作り始められ、初秋の七月二十五日に堂（仁王堂か）に安置されたということである。

それ以外の内容は筆者の手に負えない部分が多いが、誤りをおそれずに解釈すると、当時の真楽寺のようすや真楽寺の信仰の範囲など、興味深い内容がみえてくる。

まず、像の造立の施主は、真楽寺の別当の禅済であった。そして真楽寺には、禅済の下に長圓、良禅、日圓、静阿、什尊、長済、筑後覚知の七人の僧（大衆）がおり、禅済の仁王像造立の仕事を補佐したらしい。

仏師は上州世良田の刑部公鏡鑁であった。世良田には新田氏の一族である世良田氏の氏寺である長楽寺があった。長楽寺は承久三（一二二一）年に、臨済宗の創始者栄西の高弟栄朝の開山により創建された寺で、臨済禅と密教兼修の道場であったという。世良田氏は南北朝時代に衰え、その後は同じ新田一族の岩松氏が長楽寺の庇護者となったが、鏡鑁はこの長楽寺にかかわる仏師だったのではなかろうか。なお、根拠はまったくないが、長楽寺と真楽寺がその寺名から密接な関係にあったとするのは、うがちすぎであろうか。

つぎに、この仁王像を造った趣旨は、

「諸衆の現世は安穏、後生は善所、殊には当寺の安穏、仏法の興隆、乃至は法界の平等利益の故」

であると記している。

造立の趣旨の特徴として、寺の安穏が記されており、真楽寺が浅間山の噴火などで被害をこうむっていた故の願いであったのかもしれない。

造立費用を負担した人々　さて、墨書は仁王像を造立するための費用を負担した人々（檀那）の名前を記している。墨が消えてみえない者を含めれば、一〇〇人近い檀那がいたと考えられる。

この檀那は「時檀那」「講檀那」「勧進檀那」「目珠檀那」に区分されている。

「時檀那」は、仁王像造立のときの真楽寺の庇護者、つまり真楽寺を氏寺とする人物をさすと考えられる。「時檀那」は三人以上いたが、墨書がみえるのは「源氏女」「如阿」「源光□」の三人である。この三人は御代田の地域を領していた武士の一族なのであろう。

「講檀那」は、真楽寺が直接の氏寺ではないが、何らかの信仰をもって真楽寺にかかわった佐久地域の講中の人々をさすのであろう。

「講」とは何らかの信仰行事を行なう集団組織をいう。墨書には「一結講」「追分講」「軽井沢講」の三つが記され、講の檀那として六〇人以上の人々の名がみえる。

このうち「追分講」「軽井沢講」は、名前のみの人物が一人ずつみえるだけで、残りはすべて「一結講」の檀那である。「一結講」は地名ではなく、おそらくは、仁王像を造立するために、佐久の地域の人々が一つに結んで作った講という意味なのであろう。

一結講に名が記されている人々の内訳は、名字をもっている人物が「源朝行」「同□□」「□朝広」「臼田十郎」「野沢七郎」など五人以上、「満阿弥」など「～阿弥」を称する人々が一〇人余、「浄眼」など法名の者が一〇人弱みえる。そのほかの大部分は、三郎四郎など名前だけの者である。

仁王像造立にあたっては、「時檀那」「講檀那」以外の人々からの寄付（勧進）も募ったようである。それは、勧進をすすめる役割を担った僧（勧進僧又は勧進聖）が、人々の間―おそらくは佐久以外の地域―をめぐったのであろう。このとき勧進僧に勧進を行なった人が「勧進檀那」なのであろう。

「勧進檀那」として記されているのは、約二五人である。そのうち法名の人物は約一五人、女性が約五人（法名との重複一人）である。「勧進檀那」に記載された人々のうち二人には興味深い記述がある。一つは「外記殿妻増金」である。これは外記殿の妻が、増額して勧進してくれたという意味なのであろうか。この推測が正しければ、勧進は額を定めて行なわれたということになろう。また、「松井女大施主」との記述があるが、これは「外記殿妻」以上の勧進をしたという意味になるのであろうか。

「目珠檀那」は一人のみ、「覚智白子」と記される。仁王像の目に入れる水晶を負担した檀那なのであろうか。よくわからない。

真楽寺と大井氏　さて、以上述べてきた真楽寺仁王像造立にかかわる檀那のうち、「時檀那」の「源氏女」「如阿」「源光□」、「講檀那」の「源朝行」「同□□」「□朝広」はいずれも源氏を称する

佐久の武士であろう。そして、源氏を称する佐久の武士の中で、御代田にもっともかかわりの深い武士は大井氏である。

ちょうど真楽寺の仁王像が作られたころに編纂された『尊卑分脈』という系図によれば、大井氏を名乗った最初の人物とされる朝光の曾孫に朝行の名がみえる。この朝行と仁王像の墨書にみえる「源朝行」は同一人物かも知れない。ただ、『吾妻鏡』の記事では、大井朝光の子の光長が承久三（一二二一）年から建長二（一二五〇）年の間みえている。『尊卑分脈』では、朝行は光長の孫にあたるので、時代的には合わない。

しかし、系図により大井一族の名前をみると、「光」は通字と考えられるし、「朝」の字は通字にはならないが、大井の祖朝光の一字として重要なものであったように思われる。

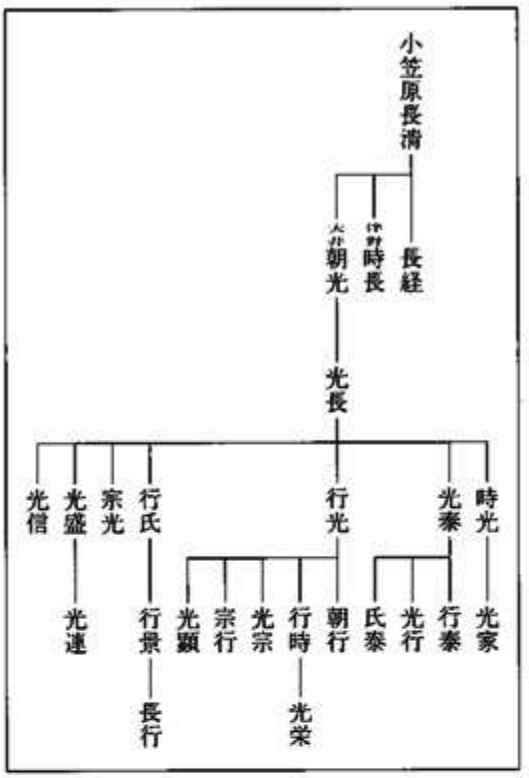


図8　大井氏略系図（『尊卑分脈』による）

それを前提として仁王像の墨書に残る源氏には、「源光□」「源朝行」「□朝広」と、「光」と「朝」が名前にみえる。かれらが大井氏一族と考えてよいのではなかろうか。

そして名前の下の一字がみえない「源光□」は、真楽寺を氏寺とする大井氏であったのではなかろうか。

幹線道路沿いのムラ　中世佐久地方には、京都に端を発して、遠く奥羽にまで通じる幹線道路が通過していた。現在の茅野市から白樺湖（大門峠）を通過して佐久地方に入ると、駒寄（浅科村）→下県→落合→根之井→一本柳→八日町→石橋→天神の辻→馬場の内→荒町→赤座垣外→小田井など大井荘の諸地域を経由して碓氷峠、そして関東へと至った。このうちの小田井から碓氷峠の間は、現在の御代田町が含まれることから、中世当時、諸国の人々がさまざまな目的で、町内を往来していたことがうかがえるのである。

つぎに紹介する町内で発掘された室町時代を中心とする集落遺跡は、この幹線道路に近い場所にあり、そこからは瀬戸や常滑など東海地方からの焼き物が出土した。これは、佐久地方の一般的な民衆の集落でさえも、広域な交易圏の中にあり、他地域の製品を使うことが日常化していたことを示している。このほかにも、現代に残らなかったさまざまな文物が、佐久地方の中世集落にもたらされていたことが想像されるのである。

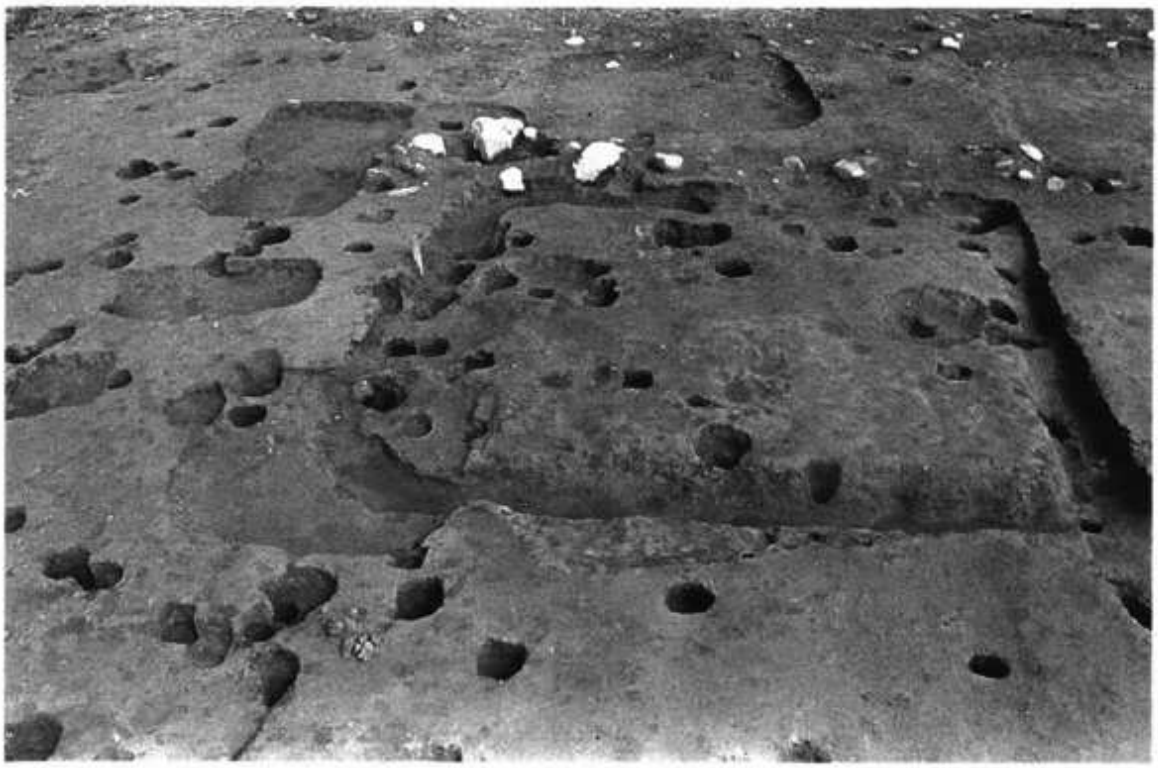
写12　大型の竪穴建物から出土した硯
現代品とあまり変わらない。

野火付遺跡のムラ　律令東山道とのかかわり、古代埋葬馬の出土等で有名な小田井鋳師屋遺跡群の一角の野火付遺跡には鎌倉～室町時代ころにふたたびムラが営まれていたことが昭和五十九年の発掘調査で明らかになった。

野火付の中世のムラの開始は鎌倉時代・十三世紀のことである。十四世紀までの少量の出土品がムラの跡から見つかることから室町時代の初めまでムラが継続して営まれていたことが推定される。当時、野火付の隣接地である佃は、八条院（鳥羽上皇の皇女暲子内親王のこと）の荘園大井荘の直営田であり、このムラがこの荘園とかかわっていた可能性もある。

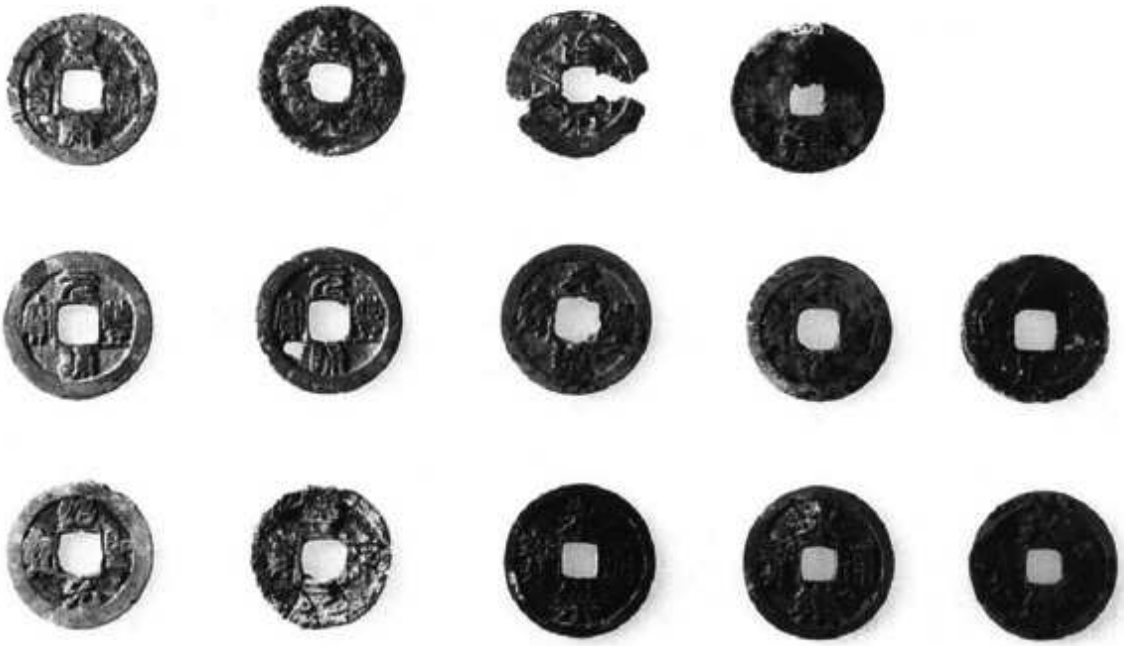
野火付のムラがもっとも活発に営まれたのは十五世紀以降であった。このムラの中では一辺四、五～六㍍の大きな竪穴建物が住居とみられる。その周囲を取り囲む中小規模の竪穴建物はそれに付属する施設、倉庫的な建物であろうか。また、大小の竪穴建物に混じってたくさんの柱穴もある。掘立柱建物が建っていたこともあったようだ。

いずれにしてもこのムラは大きな竪穴建物と複数の中小の竪穴建物、掘立柱建物が一つのまとまりとなり、溝で仕切られていたように見受



写13　野火付遺跡の大型の竪穴建物と周囲に分布する小型の竪穴建物

図9　野火付遺跡の中世のムラの跡　黒塗りの大型竪穴建物を中心にムラが構成されているようにみえる。線状の黒塗りは溝の跡（1：750）



写14　野火付遺跡から出土した輸入銭

けられる。そのまとまりの複合体がムラとなっていたのである。

出土品には内耳の土鍋や石臼・砥石などの生活用品、当時の流通貨幣の北宋銭、これらに混じり文房具の硯もあった。硯の存在はこのムラに文字を書く人がいたことを意味する。

ムラが営まれた細かな時期は絞りこまれていないが、十五世紀の前半であれば大井氏の全盛期であり、その傘下にあった集落である可能性がもっとも強い。だが、後半以降であれば国人―村落領主たちが台頭する時期なので、誰の掌中にあったムラかを特定することは難しい。

前藤部遺跡のムラ　野火付遺跡の南方約一・四㌔の御代田町・佐久市の境に前藤部遺跡がある。この地は京都―長野大門峠―岩村田―奥羽へ通じる中世の幹線道沿いにあたる。平成九年に各市町で都合約七㌶の発掘調査が行なわれ、そのほぼ全面にわたって中世のムラが広がっていたことが明らかになった。

ムラの開始は十三世紀であるが、このころにはまだ小さなムラだった。このムラがもっとも栄えるのは十五世紀で七㌶以上の範囲に及ぶ大きなムラとなった。

ムラを構成する建物の特徴は野火付と同じで、竪穴建物と掘立柱建物が共存する。また、住居とみられる竪穴の周囲に付属する竪穴が配置される状態も、野火付のムラと共通することである。このような状況からみると前藤部・野火付のムラは、同時か近い時期に営まれていた可能性が高い。

発掘された住居と考えられる竪穴建物は一辺六㍍に達するような大型建物で、床面から壁にかけてゆるい傾斜で立ち上がり、堅い土の床が貼られていた(写16)。いっぽう、住居に付属すると考えられる竪穴建物は住居にくらべるとだいたいが小振りで、床面から壁にかけては垂直に立ち上がる(写17)。床面は柔らかく、踏み締められた形跡はない。この状態からこの竪穴は頻繁な出入りのない倉庫と考えた。これらに混じって、柱穴跡も見つかるため、掘立柱建物もあったと考えられるが量は少なく、ムラのおもだった建物は竪穴構造の建築物であった。

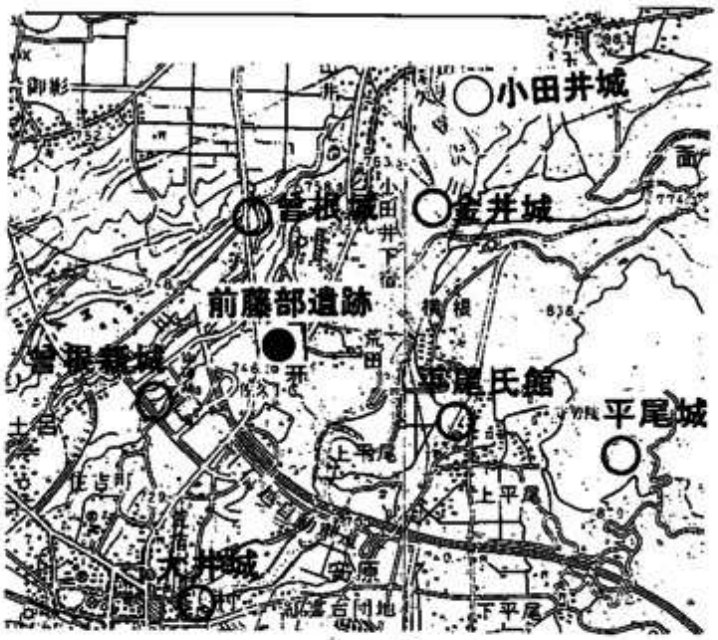
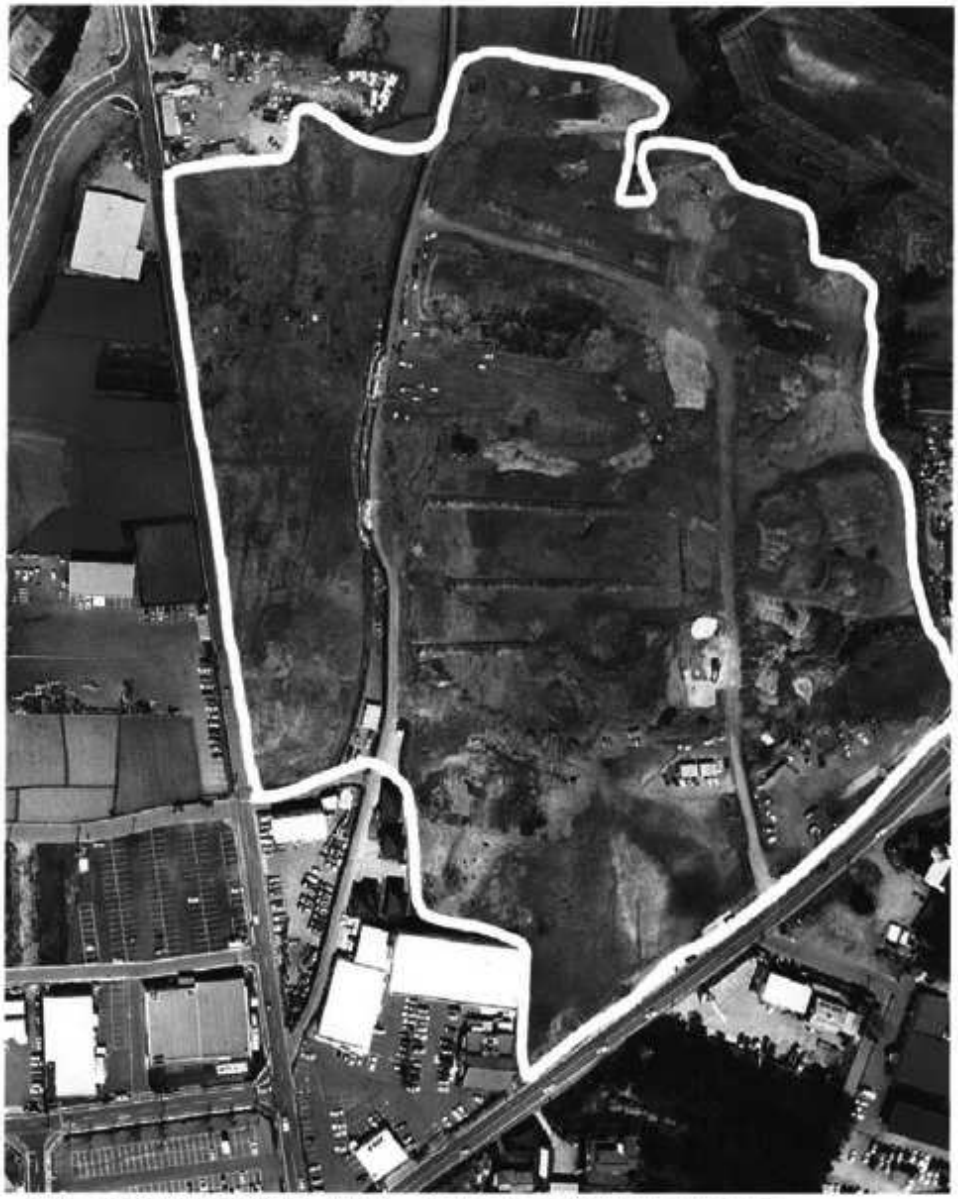


図10　前藤部遺跡と周りの城

発掘区の建物の分布状態は北側に一つ、南側に一つのまとまりがある。北側のまとまりは大型の竪穴建物が集まり、前藤部のムラのなかで唯一鍛冶炉が見つかるなど、際立って優位にたつまとまりであったことがうかがえた。これに対し、南側のまとまりは建物の規模が小さく、両者の間に階層差があったことも考えられた。また、北側のまとまりの一角には、四角い溝で囲われる場所があった。区画内の建物や出土品は区画外と同じで特別な場所であったとは思えない。出土品は全体に少なかった。少ないおもな理由はムラを移動する際、



写15　前藤部遺跡の発掘区（枠内）　中世のムラの範囲はさらに広がる

写17　密集する竪穴倉庫

写16　前藤部中世ムラの竪穴住居址

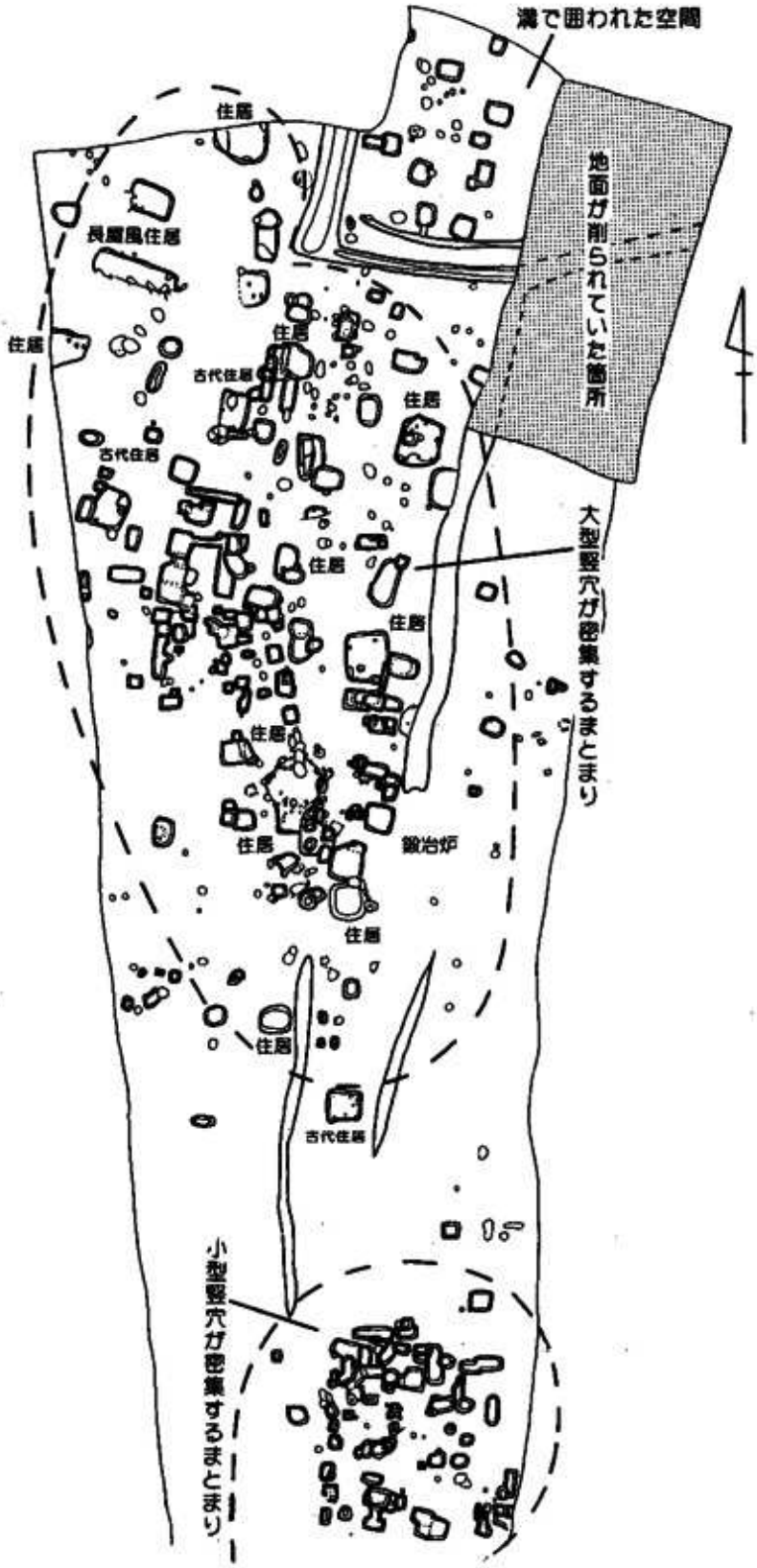


図11　前藤部遺跡　中世のムラの一角（1：1000）

日常品などをともに持ち去ったからである。出土品の種類は煮炊きに使った地元産の内耳の土鍋・擂り鉢、盛りつけに使った瀬戸産の平碗、水甕に使った常滑産の甕、米・そばや雑穀を挽く石臼など日常品。そのほかに「かわらけ」といわれる小皿、抹茶を挽く茶臼、粘板岩で作った硯、鍛冶炉で作られたと考えられる小刀や編み物用の毛針などもあった。「かわらけ」は現代の発泡スチロールの器と同じように、宴会用の使い捨ての器である。奥州藤原三代で知られる岩手県平泉町の柳之御所跡で三〇〇〇枚も発見されたように、高級武士の館跡などから大量に発見されることが多い。

前藤部のムラは質素な土間住まいの竪穴建物が主流で、出土品の内容も取り立てて高級品やぜいたく品がないことなどからみて、領主・国人層の館ではない。おそらく、地侍、百姓によって作られたムラで

あったと考えられる。

では前藤部のムラは誰の配下にあったのであろうか。文明十一（一四七九）年までの北佐久地方は大井宗家の全盛期であったので、前藤部のムラもこれに属していたと考えられる。ところが、同十六（一四八四）年に村上氏に敗北して大井宗家が滅亡すると、北佐久は盟主不在となり国人たちが台頭した。こういった情勢で小田井まで勢力を伸ばしたのは平尾（ひらお）氏で、前藤部のムラは平尾氏の傘下にあったと考えられる。

写18　鍛冶炉の跡（矢印）

写19　中世の鍛冶屋（喜多院蔵『朝日百科　日本の歴史12』より）

第四節　群雄割拠の中の御代田

一　戦国時代前夜の御代田

御代田周辺の武士たち　中世の信濃の武士は、諏訪大明神を信仰していた。その信仰は鎌倉時代の中ごろからとくに盛んになってゆく。かれらは諏訪社の重要な祭事の費用などを交替で負担した。『諏訪御符礼之古書』は、諏訪上社の祭事の負担の記録類でもっともくわしいものである。そして、それは結城合戦から六年後の文安三（一四四六）年から延徳元（一四八九）年までの四四年間にわたる記録で、戦国時代に入る直前の信濃国内の武士のようすがよくわかる。

そのうち、御代田周辺の武士のようすはつぎのようになっていた。

岩村田　大井持光（文安三＝一四四六）
大井政光（享徳三＝一四五四、寛正二＝一四六一、文明四＝一四七二）
大井代官依田新左衛門忠長（寛正七＝一四六六）
大井代官依田主計入道笠窓・藤左衛門尉久長（文明四＝一四七二）
大井政朝〈代初〉（文明十＝一四七八）
大井安房丸〈代初〉（文明十五＝一四八三）

長倉　阿江木越後守（享徳三＝一四五四）
阿江木入道沙弥常栄（寛正三＝一四六二）
阿江木光康〈文明八＝一四七六〉
阿江木朝康〈代初〉（文明十四＝一四八二）
阿江木遠経（文明十八＝一四八六）

安原　氏名不明（康正三＝一四五七）
源光久（寛正四＝一四六三）
安原光氏（応仁二＝一四六八）
（代官）桑良対馬守入道
安原光民（文明六＝一四七四）
安原光安〈代初〉（文明十二＝一四八〇）

内山　小田河外記（康正三＝一四五七）
須江入道沙弥善孝・依田光俊（文明八＝一四七六）
依田光俊（文明十八＝一四八六）

小諸　源徳増丸（依田初て当）（長禄三＝一四五九）
大井光頼（寛正七＝一四六六）
（大井）紀伊守、代官穂坂景盛（文明八＝一四七六）
（大井）紀伊守光次（文明十四＝一四八二）

これら、御代田周辺を領していた武士たちは、岩村田の大井氏を中

心とし、その一族と被官で構成されていた。

大井氏の盛衰　岩村田の大井氏は、政光の代である享徳年間から文明の前半ころまでの二〇年間、持光の代に引き続き佐久武士の盟主として勢力をもっていた。そして、持光時代の永享の乱に関係した軍事行動に引き続いて、郡外への軍事行動もおこしていた。

宝徳元（一四四九）年、さきに永享の乱で自害した足利持氏の四男永寿王丸は、鎌倉に下り鎌倉公方となり、元服し成氏と名乗った。そして幕府の指示により上杉憲忠が関東管領となった。しかし成氏と憲忠は、両方の父親が永享の乱で対立したと同様、成氏と憲忠も対立することになる。この対立は、享徳三（一四五四）年、足利成氏の上杉憲忠殺害により、関東が大きく乱れる原因となった。そして、争乱は断続的に文明十四（一四八二）年まで続くことになる。

大井政光は、享徳三年に関東に出陣しているが、足利成氏と上杉憲忠の対立にかかわり、成氏方として出陣したのであろう。関東の争乱は、永享の乱の時と同様に、信濃武士の動向にも大きな影響を及ぼした。

この後、大井政光の代の軍事行動は、甲斐に向かう。

○　寛正五（一四六四）年四月以前

「佐久大井殿」が諏訪信光親子と申し合わせ、甲州へ出陣する。

○　文明元（一四六九）年四月、九月

信州勢甲州に出陣

○　文明四（一四七二）年四月

佐久の大井氏が甲斐に乱入し、九二日間にわたり武田一族と対立する。

○　文明九（一四七七）年四月

甲斐武田の兵が佐久郡に攻め入り、相木中衆に討たれる。

この時期に、大井氏（政光）が甲斐と対立したのは、甲斐守護職をめぐる武田一族の対立があったという説もあるが、よくわからない。いずれにせよ、この時期の大井氏が甲斐へ繰り返し出陣できる力をもっていたことがうかがえる。

しかし、政光から政朝へ代替わりした文明十年ごろから、岩村田大井氏も衰えをみせはじめる。

文明十一年八月二十四日、大井氏は、鎌倉時代以降大井氏とともに佐久地方の二大勢力のいっぽうの旗頭であった伴野氏と合戦する。そして大井政朝は伴野氏に生け捕られてしまった。さらには長倉に所領を持つ大井氏の有力な被官であった阿江木氏（阿江木入道）が討ち死にしてしまう。後に政朝は岩村田へ帰されたが、大井氏の没落の始まりを象徴する出来事と考えられる。

さらに文明十五（一四八四）年六月、政朝が死去してしまい、その跡は大井安房丸が継いだ。跡を継いだ安房丸はまだ元服前であろうから、政朝も若死にと考えられ、大井氏の凋落は甚だしかったと思われる。

そして、文明十六年、坂城にあった村上氏が岩村田の大井城を攻撃し、二月二十七日に落城する。大井氏は小諸に逃れたが、大井宗家の没落は明らかであった。

この時期大井氏が繰り返し戦ったのは、なにも大井氏にかぎったことではなく、信濃各地で同じような戦いが繰り広げられていた。そしてそれは、応仁・文明の乱という全国的な戦乱の一環としてとらえられるもので、まさに戦国時代前夜の戦いであった。

二　武田氏と佐久武士の攻防

武田信虎の佐久侵入　岩村田の大井宗家が没落した後、岩村田は長窪大井氏により継承されたという。ある説によれば、信濃の大井氏には小笠原系と武田系があり、長窪大井氏は武田系の大井氏であるという。佐久郡を掌握した大井宗家は没落したが、大井一族は佐久郡のそれぞれの地にあった。また大井一族以外の佐久武士もそれぞれの地にあったらしい。かれらは、佐久武士としての連合体を形成していたらしい。

佐久がこのような事情にあったころ、武田信虎は甲斐国内をほぼ掌握し、信濃進出をめざしていた。

享禄元（一五二八）年、信虎は諏訪へ侵入し諏訪氏と戦った。この戦いは天文四（一五三五）年の講和まで続く。諏訪氏との講和の結果、武田信虎の信濃侵入の矛先は佐久に向かう。

天文九（一五四〇）年五月（または四月）、信虎は佐久郡に攻め入り、臼田・入沢（いりさわ）城など数十（または三六）の城を攻め落とし、前山の城を築いて在陣した。おそらく信虎は佐久郡の南半部を制したのであろう。そして信虎の佐久侵入に呼応して、さきに武田氏と講和を結ん

写20　大井城跡（佐久市岩村田『大井城跡』より）

でいた諏訪氏（頼重）は、小県の長窪城（長門町）を落とした。翌天文十年五月、信虎は諏訪氏、坂城の村上氏とともに小県の海野氏を破った。

このとき、御代田がある佐久の北半部の武士たちがどのような行動をとったのかはよくわからない。

信虎の信濃を掌握するための軍事行動は、着々と成果をあげていった。信虎は、海野氏を破り甲斐に戻った直後の六月、駿河の今川氏を訪問した。この留守中に、信虎は嫡男の晴信（信玄）に政権を奪い取られてしまう。

武田晴信の佐久侵攻　天文十一（一五四二）年七月、甲斐の武田晴信（信玄）は諏訪に侵入し、信濃侵攻を開始した。晴信の侵攻は、佐久から小県地方、諏訪から伊那谷、そして府中（松本市）の三方面へ進む。

このうち、佐久攻めは天文十二年から開始された。佐久の南半部は信虎の代に武田氏の勢力下に入っており、この年からの佐久攻めは、佐久の北半部の武士に向けられたものであった。

晴信はまず岩村田を領していた大井貞隆を攻める。前に述べたように貞隆は長窪大井氏であり、このとき小県郡長窪城に拠っていたらしい。貞隆はこの年九月、長窪城落城の翌々日生け捕られ甲府に送られた。いっぽうその子の貞清は内山城によって抵抗するが、天文十五（一五四六）年五月に降伏する。

「高白斎記」はこのときの状況を「内山ノ城主左衛門尉、城ヲ明テ野沢へ下ル」と記す。

しかし、佐久北部の武士の抵抗はさらに続く。抵抗したのは、志賀城にあった志賀氏である。佐久制圧後の標的にされるという危機感をもっていた西上野の武士や、当時上野の平井（藤岡市）にいた関東管領の上杉氏が志賀氏を支援したのである。

志賀城の攻防と小田井原合戦　天文十六年の閏七月十三日、武田晴信は志賀城攻めのため、甲斐を出発し、二十日に桜井山城（前山城のことか）に着いた。そして二十四日に志賀城の攻撃を開始し、二十五日には水の手を切った。しかし、志賀城の抵抗は激しかった。

この籠城している志賀氏支援のため、上野の武士たちが動きだし浅間山麓の小田井原まで動いた。これに対し武田方は、八月六日の卯の刻（午前六時）、板垣信方、甘利虎泰などが小田井原に向かった。志賀城攻撃軍を割いたのであろうか。

戦いは申の刻（午後四時）に始まり一気に決着がついた。上野武士方は大将一四、五人、兵三〇〇〇人ほどが討ち取られるという大敗北を喫した。

この合戦を小田井原合戦というが、主戦場は小田井城付近であったのであろう。

別の項でくわしく述べられているが、小田井城は県内有数の規模をもち、御代田町でも最大の中世城郭である。しかし表面観察の限りでは、その規模に比較して堀が少ないことなどから、未完成の城郭という印象をうける城である。もし、この印象があたっているならば、現

在われわれが見る小田井城は小田井原合戦に際して、緊急に整備された可能性はないだろうか。また、武田方が八月六日の早朝に志賀城から小田井原に向かったとすれば、小田井城はこれを迎え撃った上野武士の連合軍が整備したということになるかもしれない。

さて、鎌倉時代の終わりころから江戸時代の初めにかけては、合戦に参加した武士たちにその戦功を賞して感状を与えるということが行なわれていた。武田晴信も、小田井原合戦で活躍した武士に感状を与えたが、そのうち五通ほどが今に知られている。「小田井」の地名がみえるものとして、御代田町にとっては貴重な史料である。

そのうちの一通をあげてみる。

（原文）

今六日、申刻於信州佐久郡小田井原合戦、頸一、小嶋次郎四郎討捕之条、神妙之至候、弥可抽忠信者也、仍如件、

天文十六年丁未　　八月六日　　晴信　（角朱印）

内田清三とのへ

（訓読）

今六日の申の刻、信州佐久郡小田井原の合戦において、首一つ小嶋次郎四郎を討ち取るの条、神妙の至りに候。いよいよ忠信を抽きんずべきものなり。よって件の如し。

討ち取られた小嶋次郎四郎は武蔵国出身で関東管領上杉氏の家臣と考えられる。内田清三は甲斐の巨摩郡出身の武士である。

また、依田右京進宛ての感状も残っており、この合戦に武田方とし

写21　小田井原合戦図　小田井合戦を描いた江戸時代の錦絵。実際、この時代に天守閣などなかった

て佐久武士が参加したことが知れる。

さて、志賀城には志賀氏および上野の武士で志賀氏の親戚である高田氏が籠城して頑強に抵抗していた。晴信は籠城軍に対する見せしめのため、志賀城の周りに小田井合戦で討ち取った人々の首を掲げた。晴信のこの処置に籠城軍も気力が失せ、志賀城は小田井原合戦から五日後の八月十一日に落ちてしまう。この時の討ち死には三〇〇人であった。生け捕られた者の人数は不明であるが、志賀氏の妻は晴信の武将小山田信有に与えられ、そのほかの人も甲斐に連行された。連行された人々のうち、親類のあるものは、親類が身の代金を支払って請け戻された。

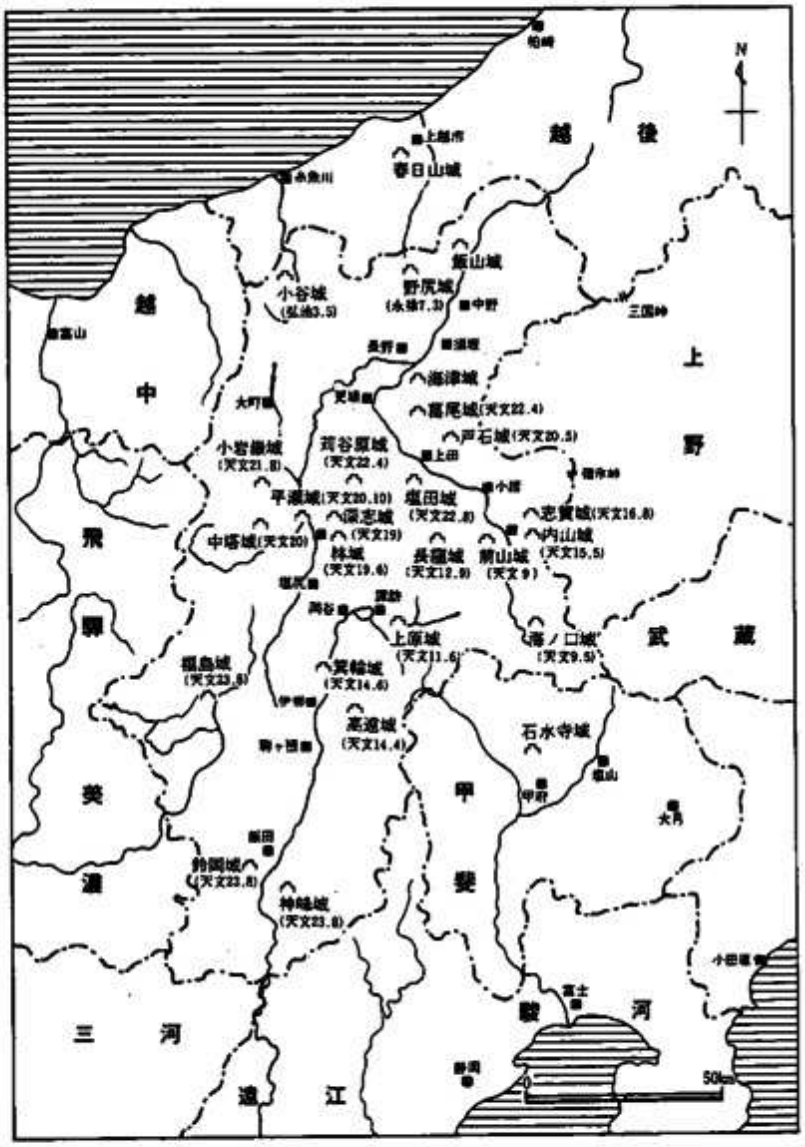


図12　武田信玄信濃侵攻図（数字は落城の年月）（『県史通史編』三より）

佐久を支配下においた晴信は、小県に進出する。そして東北信の豪族のうち、もっとも戦国大名に近い勢力をもっていた村上義清と上田原（上田市）で衝突した。この合戦は、板垣信方、甘利虎泰などの有力武将が討ち死にするなど、武田方の敗北に終わり、晴信はいったん甲府に帰陣する。

上田原合戦と佐久の動向　天文十一年の諏訪侵入以来、抵抗する信濃武士を力で圧倒して、順調に進めてきた武田晴信の信濃の経略は、上田原合戦の敗北により一時停滞することになる。晴信が村上義清の居城である坂城の葛尾城を落城させるのは、上田原の合戦から五年後の天文二十二（一五五三）年のことである。そしてこの年、武田晴信は初めて川中島で長尾景虎（上杉謙信）と戦う。以後永禄八（一五六五）年まで、この両雄は川中島で

繰り返し戦うことになる。

話は戻るが、天文十七年二月に上田原合戦で勝利した村上氏は、四月になってさきに武田氏が支配下においた佐久に入り、内山城に放火し、ついで佐久衆が武田軍から前山城を奪い返した。

九月にはいると、武田氏は佐久の奪回を開始する。天文十八（一五四九）年九月一日、武田晴信は佐久郡鷺林（佐久市）に陣を置き、ついで四日に「平原ノ宿城」に放火した。平原城主は平原全真であったが、武田氏に下ったという。この平原城攻めを最後として、佐久はふたたび晴信の勢力下に入ることになる。

三　武田氏の佐久支配と御代田

平原城と御代田　平原城があるのは小諸市平原であるが、戦国時代にあっては小諸・御代田という行政区画はない。そしておそらくは、御代田の地域の一部は平原城の影響下にあったであろう。

現在御代田町内およびその周囲に残る戦国時代に使われたと考えられる城郭のうち、規模の大きなものには、小田井城、大井城そして平原城が挙げられる。

これら三つの城のうち、小田井城は一時的に使用された未完成の城の可能性が高い。おそらく武田氏の佐久を足がかりにした上野への進出路のうち、碓氷峠越えの進出拠点となったのは、近世の道筋でいうと中山道筋では大井城、北国街道筋は平原城ということになろう。とくに平原城は三つの城の中でも戦国時代の城郭としての完成度がもっとも高く、また規模も最大である。ただし、現在われわれが見るような形になったのは、本能寺の変後、一時北条氏が佐久に勢力をもった時期のものであろう。

さて、武田氏の上野進出は、北信の川中島合戦同様、越後の長尾景虎との対立となる。

武田晴信が上野へ最初に兵を進めたのは、永禄四（一五六一）年で、以後出兵が繰り返される。

永禄七（一五六四）年三月、武田信玄（晴信を改める）は、沼田に進出した長尾景虎の軍勢にたいして、真田幸隆ら信濃勢を動かした。ついで信玄自身も出陣し、上野国内各地で麦を刈り取り苗代をなぎ払い、さらに武蔵本庄などに放火した。

そして、海野氏、祢津氏、真田氏などの信濃の武士に上野国内の占領地の守備を命じ、信玄自身は五月十九日に平原に帰陣した。平原城が武田氏の上野進出、および上野からの信濃防衛のための城となっていたことがうかがえる。

しかしこの後、信玄および信玄の跡を継いだ勝頼の上野進出の拠点は岩村田に移ったと思われる。

武田氏の佐久支配と御代田　佐久は、天文十八（一五四九）年から武田氏が滅亡する天正十（一五八二）年までの三〇年以上の間、武田氏が領国として支配していた。

この三〇年の間、武田氏が御代田をどのように支配したのかは、まったくわからない。ただ、佐久全体でいえばつぎのようなことがいえ

る。

支配するということが警察権と徴税権を握ったということであると考えるとしよう。

まず警察権については、これまで佐久に根を張っていた大井氏や伴野氏などの有力武士を、佐久から切り離した。そして、新たに甲斐の信玄直属の武将である小山田氏を配置し、佐久の地侍級の武士を統率させた。

また、信玄は、永禄六年に軽井沢および国境（おそらくは上野との）を領している家臣たちにたいして、「謀反、殺害、刃傷、盗賊、山賊、火盗、夜討ち、博打等」を行なう犯罪人を捜索し、岩村田の役所（「徴所」）に報告することを命じた。ただし、この内容を記した文書は、永禄六年当時のものかどうか疑わしいところがあるらしい。

つぎに徴税権という観点からは、直轄料である御料所が設定され、検地が行なわれた。武田氏の信濃における検地に関連する記録の初見は弘治三（一五五七）年である。そして、永禄期（一五五八～）以降増加するという。しかし、実際の検地帳として残るのは佐久関係と諏訪関係のものが知られている。そのうち佐久関係のものは上原筑前守に与えられた志賀、瀬戸、樋村（いずれも佐久市）にかかるものであって、御代田のようすはわからない。

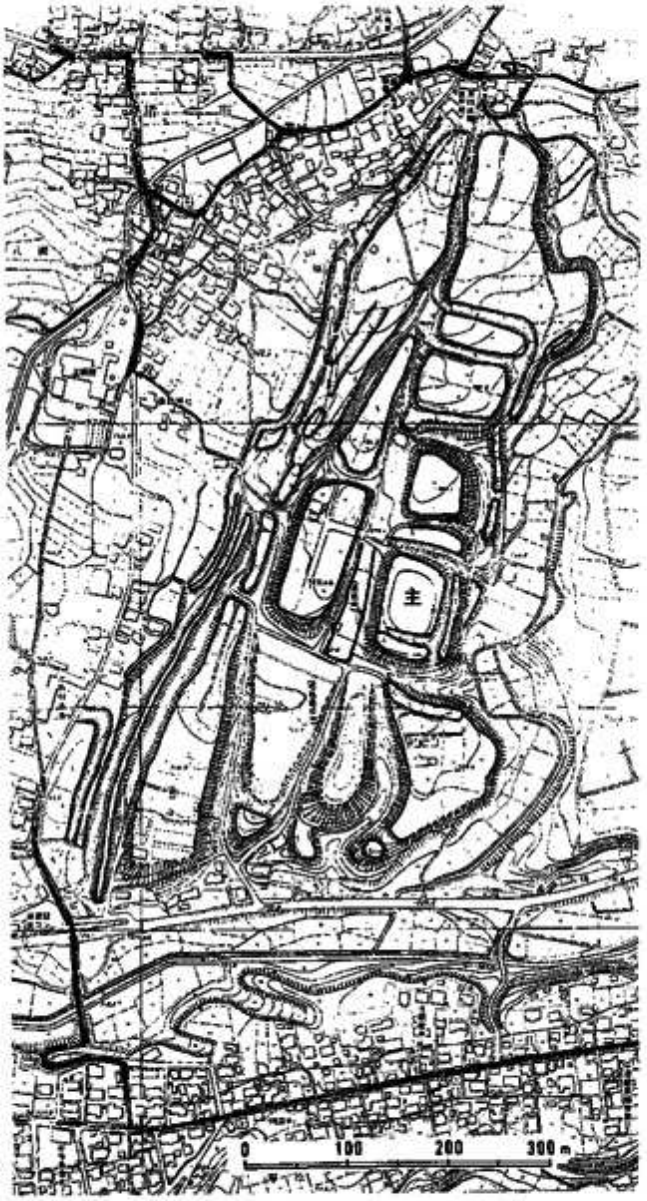


図13　平原城縄張り図（鵜道哲章作図）
小さな郭がいくつにもわかれているようすがわかる。武田氏は群馬県侵略の足がかりとして平原城を利用したと考えられる。

四　北条・徳川氏のはざまで

武田氏の滅亡と佐久　天正十（一五八二）年三月、武田氏（勝頼）が織田信長により滅ぼされ、三〇年余に及ぶ武田氏の佐久支配が終わった。そして、佐久は、小県および西上野とともに織田信長の武将である滝川一益が支配することになった。

滝川一益は上野の厩橋城（前橋市）に入り、佐久・小県の支配として、小諸城に甥の道家正栄をおいた。しかし、六月二日に本能寺の変がおこり織田信長が明智光秀により倒される。本能寺の変の情報が流れると、滝川一益は北条氏に攻められることになり、神流川の戦いで敗れた。そして、滝川氏は小諸城を経由して、本領の伊勢長島に撤退した。

本能寺の変後、信濃には南から徳川家康、東から北条氏直、北からは上杉景勝が入ってきて、三つ巴の争いとなる。

このうち、佐久は徳川・北条氏の抗争の場となった。

徳川家康は甲斐を制圧したのち信濃をうかがい、依田信蕃に佐久平定の先鋒を命じた。

北条氏直は、滝川一益の撤退のあと、一気に信濃に入り、小諸城を拠点とした。そして小県の真田氏を帰属させ、ついで諏訪から甲斐の若神子（須玉町）まで進んだ。

この時点では、佐久武士の多くは北条氏に従っており、徳川方の依田信蕃は望月の春日の三沢小屋に立てこもってゲリラ戦を展開したという。

八月の下旬になり、北条氏方であった真田氏が徳川氏に帰属した。このころから、佐久における北条氏と徳川氏の立場が逆転しはじめた。そして十月二十九日には佐久郡など信濃は徳川氏（川中島四郡は上杉氏支配）、上野は北条氏の支配ということで一応の講和がなった。

しかし、この講和は徳川・北条の主力軍の全面衝突をさけるための講和の色彩がつよく、北条方の武将である大導寺政繁が講和後も小諸城にとどまっていたり、在地武士にも北条方がいるなど、佐久郡内の徳川方、北条氏方の対立はもう少し続く。

依田信蕃は家康の意をうけ、この佐久郡内の統一を始める。信蕃は佐久郡内の反徳川方勢力を次々と駆逐していった。

御代田に関していえば、北条氏は小田井城に二俣丹波守という人物

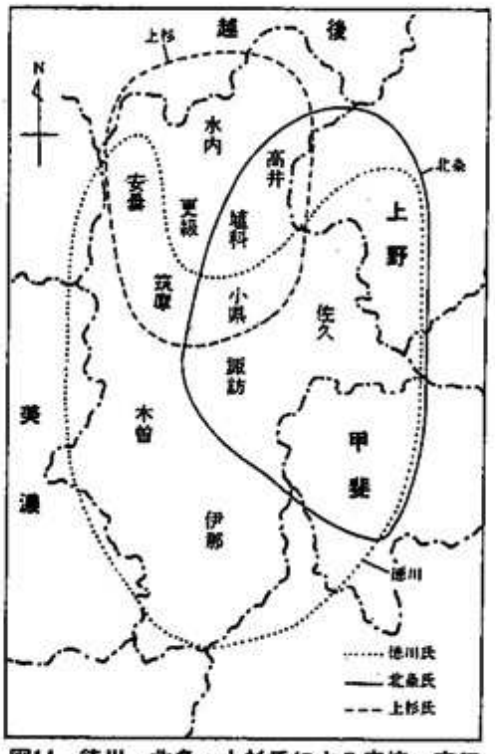


図14　徳川・北条・上杉氏による安堵・宛行地範囲概念図（『県史通史編』三より）

をこもらせておいたらしい。小田井城は、前に述べたように、表面観察の限りでは未完成の城の可能性が高い。小田井原合戦の後利用されなかったものを急きょ利用したのであろうか。結局、小田井城は信蕃の一族の依田信守により落とされたというから、防御はさほど強くなかったのかもしれない。

天正十一年二月、依田信蕃の佐久統一も最終段階にきて、残るは小諸城と岩尾城だけとなった。二月二十二日、信蕃は岩尾城攻撃を開始したが、鉄砲により狙撃され戦死してしまう。

しかし、佐久における徳川方勢力の優位は動かなかった。家康は信蕃の長男康国に松平姓を与え、佐久郡の六万石のほか合計一〇万石の武将として処遇した。康国は、大導寺氏が明け渡した小諸城に入り、佐久郡を支配することになる。

平原城と北条氏　平原城については、武田氏の上野進出にかかわってすでに述べたところであるが、現在のわれわれが見る平原城の築城の形は、県内を見回しても類例がない特殊な要素が見られる。とくに城郭の西を区切る長大な重層の堀は、県内の城郭には類例がない。類例がないということは、信濃国内に侵入したものの、比較的短期間に撤退した戦国大名が築いた可能性を示すと思われる。

このことに注目すれば、この城の最終的な形態は北条氏の手になったと考えられないであろうか。この考えが正しければ、佐久郡のうちでも御代田は最後まで北条氏の勢力下にあった地かもしれない。

徳川家康の関東移封　本能寺の変後、羽柴（豊臣）秀吉が織田信長の後継者となって全国統一に動き出す。

天正十三（一五八五）年、秀吉は関白に就任し、ついで四国の長宗我部氏を降伏させた。天正十四年には、徳川家康が和議を結び秀吉に臣従した。また秀吉は豊臣の姓をうけた。

天正十五年、秀吉は九州を平定し、天正十八年七月、小田原の北条氏を滅ぼし、ほぼ全国統一を成し遂げた。

この間、佐久は松平康国の支配下にあったが、秀吉の小田原攻めに際しては、阿江木、伴野氏など一部の佐久武士が秀吉軍の後方撹乱のため兵を挙げた。しかし、松平康国によって鎮圧されてしまう。

佐久を鎮圧したのち、康国は前田、上杉、真田氏らとともに上野に入り上野国内の北条方の城を攻略していったが、石倉城の受け取りに際して守将の小林氏のだまし討ちに遭ってしまう。そして、康国の跡は弟の康真が継いだ。

しかし、松平依田氏の佐久支配も、北条氏の滅亡とともに終わる。北条氏が滅びると、秀吉は家康に関東移住を命ずる。これにともない、三河・遠江・駿河・甲斐・信濃に配置されていた家康配下の武将も関東に移住することになった。松平康真も三万石を与えられ、上野の藤岡に移った。

城館建設の盛況　文明十六（一四八四）年佐久平の北半に勢力をふるった岩村田に本拠をおく大井荘の地頭大井宗家は北信の雄村上氏の急襲を受け、滅亡した。この際、居城の大井城やその町屋

図15　御代田の中世城館と集落遺跡

も焼失したと伝えられる。その後、佐久平は村上氏と甲斐武田氏の抗争の場となり、その煽りをただちにこうむる地元の国人たちは盟主不在の中で生き残りに必死だった。こういった情勢下では時代を先取りした防御体制を敷く必要があったため、佐久平全域で国人の城館の建設が相次いだ。その結果、佐久郡内には一〇〇を超える城館跡が残され、この内、御代田町域には一四の城館跡がある。ここでは、鎌倉時代の城館で登場した西城・梶原城を除いた一二城を紹介する。

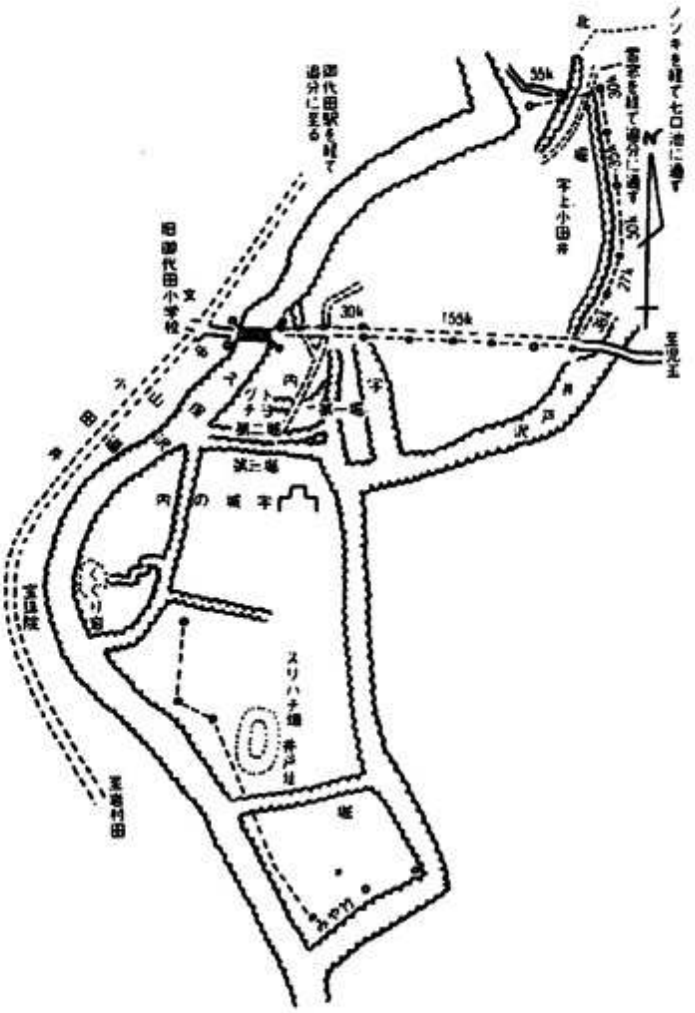


図16　小田井城跡実測図（昭和31年6月25日）（『御代田物語』より）

また、ここに登場する城館跡とは、中世武将（守護・守護代・国人）あるいは軍団の居住（館）または戦闘（城）にかかわる構造物をいう。中世の城館は、空堀の掘削と土塁の構築によって縄張り（土地の範囲を決めること）され、その内部には、瓦などを使わない掘立柱建物の屋敷などや倉庫、井戸などの諸施設が設けられ、外観は非常に質素な造りであった。水を張りめぐらした堀、石垣を高く築いた土台、天高く聳える勇壮な鯱ほこや何層にも及ぶ屋根瓦などに象徴される天守閣の城は、中世には築かれなかった。天守閣の城は、基本的には織田信長が天正七（一五七九）年に完成させた滋賀県の安土城以降に造られるようになった。これを「近世の城」という。

本城の小田井城と砦の長倉城・戸谷城・金井城　江戸時代のにしき絵「信州小田井合戦図」などに戦闘の模様が描かれた小田井城は大永年間（一五二一～二八）に国人小田井吉六郎副親が築いたものといわれている。現在の城跡は総面積二〇㌶を超える全国屈指の巨大な姿（図16）であるが、これが築城当時のままの姿であったとは思えない。城が膨張していった背景には天文十（一五四一）年ころから佐久地方へ侵略を開始した武田信玄

への脅威が強く関与したと思われる。

構えを厳重にし、武田氏の攻撃に備えた結果、三方を自然の要害に囲まれた舌状台地全体が要塞化した。最前列の虎口（城の出入り口）付近には渡りづらく工夫された断面W字形の特殊な堀、そこから奥にも二重の堀が設けられ、堅固な守りの城が完成したのである。籠城に備えてか、生活の水源を確保するための通称「マイマイ井戸（かたつむりの殻のようにらせん状に下りて行く井戸であった）」といわれる巨大な井戸（上部の直径は九〇㍍ほど）を掘削したり、脱出口といわれる岩をくりぬいた「クグリ岩」が設けられたのもこのころではなかったか。備えが万全にみえる反面で、この城は守るに易いが攻めるに難いという構造上の弱点ももっていた。落城の年代は天文十三（一五四四）年十二月。時の城主小田井又六郎は信玄に憚れ込まれ、臣下になることを進められたが拒否した。十二月十五日には敵将板垣信方率いる大軍に攻撃をかけられ、応戦したが奮闘むなしく、又六郎以下全将兵が討ち死にしたと伝えられている。

小田井城の廃城は武田氏滅亡、織田信長暗殺後の天正十（一五八二）年、北条氏に支配・使用されていたが、徳川方の依田信蕃に攻略され、以後廃城となった。

小田井城は、周辺に三つの砦をもっていた。長倉・金井・戸谷の三城である。小田井城の虎口の近くにある長倉城は監視、防衛の最前線の役割を担っていたと考えられ、小田井又六郎と与した豊昇の宮平城城主長倉猿助がこもった城とも伝えられる。戸谷城は小田井宿の西側、金井城は小田井宿の南端にあり、当時の交通の要所を監視した砦であ

写22　小田井城跡の空中写真

図17　小田井城跡と戸谷城跡の縄張り図
（1：5,000）

ったと考えられる。巨大な城を造った上に、周辺に砦までもっていた。当時の小田井氏は国人としては破格の勢力をもっていたことがうかがえる。天正十四（一五八六）年の史料「佐久郡郷村貫高帳」『水問武平氏所蔵文書』によれば、小田井は三百三拾貫の貫高があり、全体的に冷涼な御代田町域にあっては、高い生産のあったことがわかる。

小田井城は過去に発掘されたことがなく、城内にどんな建物があったかわかっていない。今後、国人としては、絶大な勢力を誇っていた城の姿を再現する資料を得たいものである。

なお、金井城は小田井城落城後、武田氏の上州・北信濃侵攻にあたっての中継の場、駐屯地として再利用され、城域二〇㌶を超える巨大な姿に変わっていった。

谷地城

武田軍との攻防で憤死した小田井又六郎の長男弾正（だんじょう）は遠江（とおとうみ）の渥美郡市村の里に逃亡、そこで市村の姓を名乗った。後、市村弾正は帰郷し、現在の栄町に館を築いたとする伝承もある。それが谷地城である。武田滅亡、織田暗殺、北条の台頭と、佐久地方へ戦国大名が目まぐるしく出入りした天正十（一五八二）年に、弾正は北条氏側に付くが、結果的にはそれが命取りとなった。結局、佐久の支配は徳川に移り、十二月、弾正は徳川方の依田信蕃らに敗れ、戦死した。この後、谷地城も廃城となった。城館の内容については遺構が消失しているため、明らかでないが、この土地には、北条氏が弾正の武勇を惜しんで築いたとされる弾正塚が近年まで残っていた。

広戸城

広戸（ひろと）城は東南西の三方を急峻な断崖に囲まれ、北側は滝沢川で仕切られた要害の地にある。湯川との標高差は約七〇㍍である。断崖上の平場は東西二〇〇㍍、南北一五〇㍍の範囲の三角形であるが、中央を南北に縦貫する幅二〇㍍の谷が走っており、その西側にあたる細長い平場に城館跡の主郭があったと考えられる。この主郭は、細長い平場の南側を東西方向の堀で仕切り、南北八五㍍、東西四五㍍の長方形の郭を作っている。字名は内堀である。また、城館跡の北側には現集落があり、屋敷という字名が残っている。中世当時から、家臣団の屋敷地になっていた可能性が高い。

別名武者（むしゃ）城・民者（みんじゃ）城ともいわれる。天文年代（一五三一～五五）の

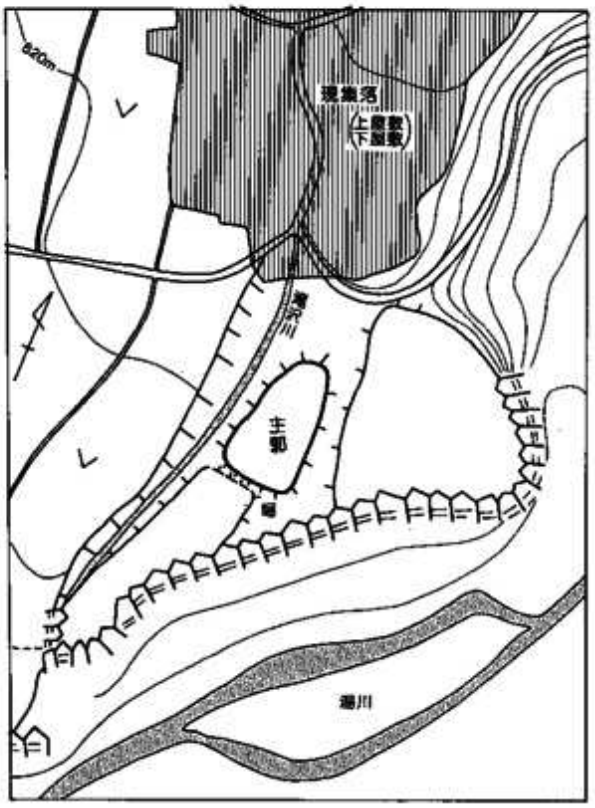


図18　広戸城縄張り図

写23　広戸城の立地する断崖

写24　広戸城の主郭部分

写25　頭穂城の立地する断崖（矢印）

十二月末に餅つきをしている際に武田軍の不意打ちに遭い、戦うことなく落城した。時の城主武舎加賀守は討ち死に、奥方は崖から傘を広げて飛び降り、下の沼深く沈んだという伝説が残る。おそらく、落城の年は、小田井城とさほど離れていなかったと考えられる。

築城年代ははっきりしないが、大井荘長倉郷に属していたので、大井氏全盛の十五世紀前半にはここに居住していたと考えられる。

昭和五十三（一九七八）年には茶臼なども出土しており、城内で風流な茶の湯を楽しんでいたことも想像される。

頭穂城　面替にある城館跡で、字名は南畑、通称大星平とよばれている。北側は急崖に面し、西～南側は沢地形、東側は山に囲まれた丘陵末端の平坦部に位置し、東西一五三㍍、南北八一㍍の広い面積を確保している。東側の山との境と北側崖縁には幅一〇㍍の堀と土塁を設け、南東隅には虎口が設けられている。また、北東鬼門にあたる位置に天神を祀っている。この城にまつわる伝承は残されていないが、一段低い段丘上にある現在の面替集落は、北屋敷、南屋敷という字名であり、この城館から移動して名づけられたらしい。築城・廃城年代ともに不明確であるが、面替地城の中世国人の城館と考えられる。

梨子沢城　築城は『大井文書』によれば、「大井之庄司大井朝光、**向城**　岩田城（大井城）居城、嫡男大井光長本城相続、弐男長倉二郎大井朝信と号し、仁治元（一二四〇）年長倉牧奉行として梨

子沢居城」とある。また、周辺の地名には……古城、城村、城ノ内、土井上、土井下……など城館と深くかかわった地名が多く、古くから地域の盟主的な人物とその一族が、居住していた場所であったことが推察される。また、『御代田物語』は応仁元（一四六七）年、村上氏により攻め落とされたと伝えている。

城館の構え方は地形を利用しただけの不整形で造作は少なく、囲繞する堀・土塁も認められない。虎口は東にある。このような形態は古い城館の形態を保持しており、村上や武田の佐久侵攻以前の段階の城館と考えられる。

以上を整理すると、梨子沢城は館として古い歴史をもつことが有力で、今後これを裏づける考古学的調査がなされることを期待したい。

対岸の向城は梨子沢城の付城といわれ、古城という字名が残っている。村上氏の攻撃により大井氏が滅亡した後、文明三（一四七一）年に依田氏がこもった城館といわれ、別名「依田城」ともよばれていた。

城館の構えは切り立った断崖に面し、ほかの三方は「コ」字状に囲う堀を掘削し、四〇m四方の平坦な単郭を造成している。築城方法は梨子沢城よりも進歩していると考えられ、この面からも新しい時期の城館と考えられる。なお、城館の周囲には、江戸時代まで集落があったという。今後、この城館の性格と内部構造を究明する調査が行なわれることを期待したい。

宮平城

縄文時代集落で著名な豊昇宮平遺跡の立地する崖上の平場の先端部に縄張りされた城である。城郭下の湯川

写26　梨子沢城と宮平城

写27　向城の立地する断崖

写28　向城・単郭の立派な城館

写29　湯川から宮平城をのぞむ（矢印）

写30　宮平城の土塁

沿いの久能集落から望むと、比高差約六〇㍍の急峻な断崖上にあり、堂々とした威圧感のある山城の景観を呈している。

城の構えは、北西南三方は急峻な崖の要害に囲まれ、東は幅の広い空堀で仕切った単郭（東西一一五㍍、南北七〇㍍）の城で、内部は平坦に造成されている。空堀内外には土塁を築いており、とくに内側の土塁は高く堅固である。また、南側斜面には竪堀らしき痕跡が三本ある。虎口は西側の台地突端部にあり、そこから久能集落へつづら折りの小道が下りている。したがって、久能集落に平時のすまいにあたる館があった可能性もある。

築造年代・廃城年代ともに定かでないが、土塁・空堀に土木技術が梨子沢城よりも進歩した跡がうかがえ、より戦闘を意識した造りになっている。したがって、武田氏の侵攻が始まった軍事的緊張段階に築かれた城であることが推測され、平時に利用されていた館的な城ではないように思われる。また、竪堀は武田の佐久侵攻以降顕著になるといわれるので、十六世紀中ごろに改修が加えられた可能性も残る。いずれにしても、豊昇地区にあっては一番新しい時期に築かれた中世の城である。この城も今後、学術調査が行なわれることを期待したい。

なお、明治十一（一八七八）年発行の『長野県町村誌』には、長倉猿助の居城するところとある。天文年間に小田井又六郎に与して武田氏に敗れ、以後廃城になったとあり、この伝承からも梨子沢城、向城よりも後に築かれた城であることがわかる。

塩野城

塩野集落の東端に位置する城館跡で、字名は荒屋（あらや）という。通称小荒城（こあらき）といわれる。東側を大規模な、北、南を小規模な田切り谷で囲い、西側は人工の堀で仕切って、南北七〇㍍、東西一〇〇㍍の城館域が造られた。城館内は中央を幅五㍍程度の堀が南北に縦走し、二つに仕切られ、もっとも平坦に造成される東側の三角形（一辺五〇㍍程度）部分が主郭であったと考えられる。西側の郭は、傾斜面になっており居住に適した郭とは思えない。

塩野城に関する文献・伝承等は残されていないが、現塩野集落に接していることから、中世当時の塩野地域の国人がこもった城館と考えられる。

築城・廃城年代については不明確である。

馬瀬口城（まぜぐち）

県道馬瀬口・小諸線と塩野集落へ北上する町道とが合流する三差路が、東側にみえる田切り台地の断崖上に立地する城である。字名は北原。城域は南北に台地を切る弧状の堀で囲われた先端部と考えられる。

平成三年には台地縁辺の崩落が著しいため、安全対策として断崖を崩す工事が計画された。この際、遺構の確認調査を行なったが、建物等は発見されず、その後、城跡は土取りにより消滅した。また、ここ数年来、城周辺の緊急調査を行なってきたが、やはり遺構は皆無で確認できなかった。したがって、生活の痕跡が薄い城館であった可能性が高い。小諸市の平原城が眺望できる場所にあるため、烽火台（のろし）等を備えた監視のための砦、あるいは陣城的な性格の城であったと考えられ

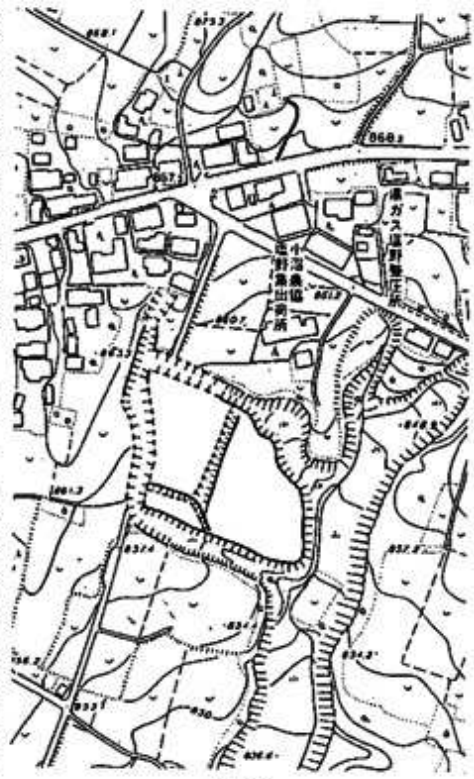
写31　塩　野　城

写32　馬瀬口城

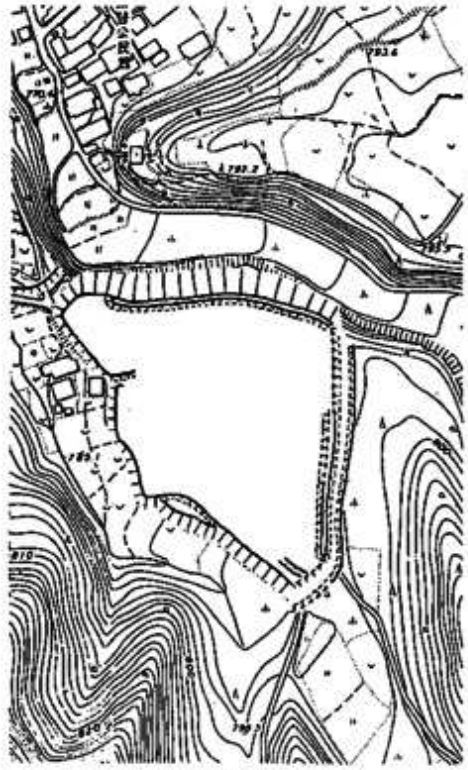
る。

馬瀬口城は伝承もない無名の城であるが、以前に周辺から五輪塔が出土したとの証言もある。

宮平城



塩野城



頭槌城

梨子沢城

図19　城の縄張り図（1：4,000）（宮瀧夏穂1987「長野県北佐久郡の中世城郭」『国学院雑誌88－9』より）

第五節　中世の文化と信仰

一　鎌倉文化と信仰

鎌倉文化の特色　鎌倉文化は初期には平安時代の貴族文化の伝統が強く残っていた。しかし、承久の乱以降は武士の気風を反映した武家文化が徐々に中心になっていった。鎌倉文化の特色の一つは貴族文化と武家文化の二元性である。

貴族文化は後鳥羽上皇が藤原定家らに命じて編ませた『新古今和歌集』が代表例でほかに鴨長明の『方丈記』、慈円の『愚管抄』などがある。いっぽう、初期の武家文化は伝統的貴族文化を吸収しながら、独自の武家文化を創造していった。源実朝の『金槐和歌集』、物語文学に代わる軍記物の出現、武士の気風を強く反映した天竺様の建物や慶派の彫刻作品などが好例である。やがて鎌倉時代も後半になると北条実時が金沢文庫をつくり、北条時頼・時宗らが宋僧蘭渓道隆・無学道元を招いて建長寺・円覚寺を開き、武具・刀剣の優品が作られるなど、武家文化が貴族文化を圧倒していった。

鎌倉文化のもう一つの特色は仏教文化と密接につながっていたことである。鎌倉時代は新仏教が武士から庶民の間へも浸透し、人々の精神生活の基盤となった。『方丈記』『平家物語』『愚管抄』の諸作品を貫く仏教思想や、多くの仏教美術などはその表れである。信濃の人も業績の知られるほどの人は武士と僧侶に限られている。

ここではまず、鎌倉文化の指導的地位を占めた仏教についてみてみる。

鎌倉仏教　鎌倉時代に入ると禅宗以外は独創性豊かな日本的仏教が誕生した。旧仏教は国家仏教・貴族仏教であったのに対し、鎌倉仏教は庶民の生活に浸透し、庶民の救済を主眼とする庶民的仏教であった。この時代の一般民衆・下級武士は相次ぐ戦乱・天災などに苦しみ、ひどい世の中が永続するという末法思想におびえていた。こういった時代背景もあり、鎌倉仏教は長野県にも急速に浸透していった。この際、布教にあたったのは「聖」とよばれる半僧半俗の宗教者であった。

浄土宗、浄土真宗、時宗などは浄土系（念仏系）宗派といわれ、①選択　旧仏教も含めた多くの教義の中からただ一つの教えだけにしぼって選び出したこと　②専修　極楽往生するためには一途にただ一つの方法によるべきこと　③易行　その方法はだれでも容易にできるものとしていることなどの共通の特色をもつ。

浄土宗は法然、浄土真宗は親鸞、時宗は一遍が開祖である。ここで

写33　佐久郡小田切の踊り念仏（『一遍上人絵伝』より）

は佐久にゆかりの深い時宗の一遍を取り上げる。一遍は平安時代の空也にならい全国を遊行し、遊行上人とよばれた。踊念仏などで庶民の間に多くの信者を得たことで有名である。上人の没後間もなく作られた「一遍上人絵伝」にはこう記されている。

「弘安二（一二七九）年の冬、佐久へ布教に来た一遍らは小田切の里にある武士の家で念仏を唱え、手拍子を打って踊り始めた。これが踊り念仏の始めであった。同じころ、佐久郡の武士大井太郎は一遍に会い、熱心な信者となっていた。ところが、太郎の姉は仏法に関心がなく、不信心であった。この姉はある夜、一遍の夢を見た。早速、占ってみたところ吉とでた。そこで一遍を家に招き、三日三晩踊念仏の供養を行なった。多くの人が集まり、激しく踊った結果、

写34　一遍上人絵伝　佐久郡でのことを記したくだり。清書は公卿四人で行なわれた（『一遍上人絵伝』20より）

家の床を踏み抜いてしまった。が、これは一遍の形見だとして修理もしないで大切に保存したという。」当時の佐久の武士をはじめ多くの民衆が熱狂的に一遍の教えに巻き込まれていったことがわかるくだりである。

鎌倉時代には宋に渡った僧侶によって禅宗も持ち込まれた。幕府の上級武士や一部の貴族に支持された栄西による臨済宗、臨済宗に学んだ後、渡宋、権威・名声を嫌って永平寺にこもった道元による曹洞宗などがある。

また、法華至上主義にもとづいて鎌倉に出て激しく他宗派を攻撃し、辻説法を展開した日蓮による日蓮（法華）宗もこの時代に開かれた。

新興仏教が相次いで開かれる最中、東国とくに長野県では宗派を越えた善光寺信仰が盛んで、一遍をはじめ各宗派の僧が善光寺を背景に活躍していた。佐久地方では佐久市落合の寛元二（一二四四）年大井光長により創建の新善光寺を中心に浄土信仰が広まった。ただし、他宗派を攻撃した日蓮宗だけは善光寺信仰とは相容れなかった。

善光寺は治承三（一一七九）年に焼失したが、建久二（一一九一）年、源頼朝の熱心な勧めもあって再建された。頼朝は熱心な仏教信者であったが、東国の民衆に深く信仰されている善光寺を庇護することによって、民心を掌握しようとも考えたのである。

御代田町では名刹真楽寺やその周辺に頼朝伝説が残されている。真楽寺の創始年代は先の川原田遺跡の調査で「大平寺・大内寺」の墨書土器が発見されたことにより、平安時代十世紀にはお堂のような小規

模な寺の存在が確実視されている。場所移動を二回、焼失三度で水害も受けた寺であるので、鎌倉時代の位置は明らかにできないが、その存在は間違いない。寺の縁起には「本厄の頼朝が毎朝祈った観世音……総丸柱・総檜造りの真楽寺本堂を造立……　真楽寺寺宝に献納の鉄鞍・鉄鐙あり……」などと伝えられる。信仰の厚い頼朝故に残された伝承である。

諏訪信仰　諏訪社の信仰は古代以来信濃に普及していたが、鎌倉時代になると将軍家やその後を受けた執権北条氏が諏訪神社を深く信仰した。その影響もあってさらに諸国の地頭や御家人の間にも急速に広まった。お膝下の長野県でも当然、隆盛をきわめた。佐久地方では多数を占める滋野系の武士が諏訪氏を中心とする神党と称する武士団に編入され、また、伴野・大井など源氏系の武士も姻戚などの関係で諏訪信仰を抱くようになった。現在の諏訪神社は神道界屈指の分祀をもち、昭和五十九年の調査では五五九〇社、摂、末社も加えると優に一万社を超えるといわれる。佐久地方でも諏訪社と名のつく神社は圧倒的に多く一五五社、全体の四割以上が諏訪社または関係のある神社である。その下地は鎌倉時代に作られたのである。

修験道の山と山岳信仰　御代田町豊昇では、鎌倉時代から江戸時代にかけて、神仏習合思想のもとに修験道が盛んであった。ここでは町の一角で行なわれた修験道に纏わる歴史を記しておく。

稲作を生業とする者にとって、水源となる山は水を与えてくれる山

写35　真　楽　寺

写38　真楽寺の仁王像　室町時代、上州の仏師により製作された

の神のいる霊地とされた。未開発時代の人たちにとっては、人力の及びもつかない大きな力・自然現象に対しては、まず、恐れ、つぎに期待を寄せた。季節の雲や雨により植物は生気を取り戻す、その反面、旱魃と水害は収穫間近の苦労を押し潰し、災害となる。自然の恵みを感謝し、自然の暴威を恐れるところに、大いなる力に対する崇拝が生まれ、安全を感謝し、その保全の続くところを願った。また、災厄から逃れるため、対象物に祈りと感謝を捧げ、それぞれ地域の山に山の神・水の神を迎える社を建て、土地の有力者あるいは一族がこれを守った。これは仏教導入以前の弥生時代以来の信仰でもあったと考えられる。

中世に長倉郷といわれた梨沢村（現御代田町豊昇）から長倉（現軽井沢町）にかけては、どちらを向いても四方が山で、山と無縁の人生は有り得なかった。農民たちは田の神が春に山から里へ降りて里人を守り、秋収のあとにまた山に戻り、山の神になると信じてきた。山は民衆の日々の生業と関係して重く仰がれてきたのである。

山に対する信仰心は山間部に住む人たちだけのものではなかった。その理由は、山は人の死後、その亡霊が住む冥界と一般的に仰がれていたからで、しばしば葬地や墓地としても利用されていた。このように山に対する信仰は古来から、誰が導くということもなく、人々の心情のうちに抱かれてきた。

吉野と熊野の修験道は七世紀まではそれぞれに独立していたが十世紀に入って二つの修験道を結ぶ大峰行路（行者の道）が開かれたことにより、日本中の有名な山にはほとんど修験道が成立していった。信濃では戸隠山・御嶽山が霊山として、平安時代末期から全国的に著名であった。また、浅間山は中世において白根山・四阿山とともに山の霊力を身に受ける修験の霊場で古来から人々の信仰が厚かった。地域に住む人々は朝夕に周りに見える霊山に対して敬虔な祈りを捧げていた。山岳信仰の発祥地が吉野の大峰山系の金峰山であるように、原始修験道は各地域の山に対する神奈備信仰（神が鎮座する円錐形の山）から出発したのである。

平安時代初期の政教分離政策のさなかに開かれた天台宗の最澄は山間修行を尊重し、真言宗の空海は俗界の里塵をさけて山間に寺院を設けた。両派の僧はそれぞれの密教の真言を誦し、山間に長期間暮らし、難行苦行につとめた。そして、修練の効を修得した密教験者としての力を表そうとする風潮が強くなった。

平安時代末期になると日本古来の山岳信仰と仏教・外来のシャーマニズム・道教などが習合し、修験道としてまとまった宗教形態になった。修験道は山岳などの霊地で修行して超自然的な験力を獲得し、それをもとに祈禱など宗教的活動を行なうものである。それは山伏や修験者によって行なわれた。また、その修行は霊地とされる山中での修行が中心となった。日本固有の信仰の中で山岳信仰の占める位置は大きく、なかでも山岳信仰と習合しつつ、山岳宗教として独自な実践修行を育てた天台宗・真言宗の修験道は完成されたものになった。

中世の長倉郷には奈良・京都から神仏が多く勧請されていた。天台宗の泉珠院は、仁治三（一二四二）年に熊野修験者の泉光坊長存法印

が梨沢の地に安養山駒形寺を建立し、修験を立てたことに始まる。平安時代には院や貴族、鎌倉から南北朝時代は荘園の地方武士、室町時代以降は諸国の熊野先達（峰入りの時に指導にあたる修験者）といわれる者たちが、その土地の檀那（布施をする信者）の指示で精進潔斎のうえ、熊野に向かったのである。

写37　大峰山に登拝中の本山派修験山伏　吉野山の七十五の靡 巡拝山間修行

写38　吉野大峰山頂の金剛蔵王権現前庭の大護摩供修行

写39　熊野本宮大社　崇神天皇五十六年創建といわれ、権現信仰の神仏習合色が強かったが明治の分離令により神道化した

写40　吉野山金峰山寺蔵王堂の山門　仁安2年の記録があるが戦乱により焼失、現在の門は天正11年のもの

天神山の女人結界

梨沢村天神山山頂には、修験道の守護神、吉野大峰山の金剛蔵王権現が勧請されたため、中世以来女人禁制の結界があり、女人の入山が許されなかった。

修験道のメッカ吉野の地は縄文時代の昔から人が生活してきた場所であるが、弥生時代・水田耕作の開始にともない、水を供給する源の山への信仰が盛んになった。また、山に祖霊がこもるという信仰心もあったため、吉野川とその流域の山地などはもともと

写41　天神山全景　この山頂には吉野山の金剛蔵王権現と京都北野の天神が分祀されている

写42　天神山山頂に祀られる吉野金剛蔵王権現と京都の北野天神　そのほか吉野山・熊野の諸神仏が分祀されている

図20　宝暦年間の大峰山全山図　女人結界、安禅の森

宗教的素地のある地域であった。

古墳・奈良時代になると吉野の地は飛鳥・平城などの先進地・都と接していたため、原始からの宗教地としてさらに注目を集めた。この修行の適地に都から多くの宗教思想が入り、古代宗教者が集まった。

吉野の山の中でもとくに修行地として優れていたのは金峰山であった。金峰山は吉野山の最高峰青峰山である。その分水嶺には水を司る水分神社が鎮座し、その中には古代人から厚い崇敬を受けた地主神・金峰神が祀られている。とりわけ、朝廷からは厚遇されたという。

白鳳年間には、葛城山で修行した役行者が金峰山に来臨し、衆生済度のために祈禱を行なうなどの一千日のこもり修行という苦行を重ね、ついに山上ケ岳で蔵王権現を感得湧出させたと寺伝に伝えられている。この時、あらわれた金剛蔵王菩薩が金剛蔵王大権現といわれ、金峰山修験の本尊となった。

修験の山・霊山には神聖な地域と俗界とに分かつ境があり、とくに上宮、奥の院にある場所がもっとも神聖な場所であった。

高野山では初めは中宮（天野）までが俗界であり、高野聖が妻子をおいていった場所と伝えられる。後に結界は、押切岩という位置にまで上がった。そこには姥石と似た言い伝え（母が子を待ち続けた場所、あるいは待ち続けた結果、石になってしまったという伝承）が残っている。また、吉野では、頼朝に追われ、逃れた義経が愛妾の静をおいて別れた場所が結界であった。

修験のメッカ、高野山・吉野山の例をみるように、神聖にして侵すことのできない場所、大峰山の地主神のように女神がこもる場所（女性が神域に入ると山の女神が嫉妬すると考えられている）に女人結界が敷かれていた。ここでは役行者が母すら拒否して修行し、女性が修道院や尼寺で男性を遮断して修行するのと同様、男性が色欲を断って修行した。大峰山は現今では、国定公園として誰でも登山できるはずなのに、この結界の指定場所から女性は下山を余儀なくされる。

写43　愛宕神社と役行者尊の祠　長倉一円鎮守と権現供修行者

写44　久能の天神像　女人禁制により結界のある山のため山頂に祀られる天神様に対し麓に祀った天神様「女の天神様」といわれている

初めに述べたように中世梨沢村天神山の女人結界には、大峰山の金剛蔵王権現が勧請された。同年代には京都の北野天神が梨沢村の裏鬼門として祀られた。このため、そこより低位に位置する久能村（御代田町豊昇）の人々の内、女性は天神参りができなかった。そこで天神を信奉する有志が、城ノ腰という所に石像の天神を造立・安置して誰でも参拝できるようになった。信奉者はこれを女の天神様と称した。

当時、天神山は全体が吉野山に比定され、下に流れる川を宮川として結界をつくり、修行の神聖な地とされていた。山頂付近には吉野山一山の神々、勝手神社・水分神社・妙見宮・鷲森神社、山懐に十二大明神・熊野湯の峰東光寺などが勧請されていた。この神聖な地は近世まで結界であった。

狐山大権現

馬取りの狐山大峰大権現は、軽井沢町馬取集落の東方にあり、急峻な山形の山頂に奈良吉野山大峰山の金剛蔵王権現と、この権現を祈願勧出させた役行者（神変大菩薩）・不動明王・稲荷大明神の四体を祀る。梨沢村の修験泉珠院の元和文書（江戸時代）によると、一時は修験行者により年々春

写45　馬取りの大峰山神社　狐山にまつわる由来、麓の鳥居

写46　泉珠院の元和元年（1615）の縁起書　軽井沢町馬取りの狐山大峰神社、山頂に蔵王権現・役行者・稲荷・不動明王が分祀されている

写47　泉珠院の文書　狐山の大峰大権現の開眼供養をした馬取りの二人の長者の由来を記したもの

秋両度祭礼を怠らなかったところであった。ここにも辺地に残る開発と長者伝説が伝えられているが、この地の長者は辺地の開発領主であったと思われる。平安中期以降、この辺にも熊野信仰が伝えられ、この長者たちも熊野権現を信仰していたようだ。

元和文書には長倉牧の始めころに、野嘉子長者・朝日長者という有徳の両人の念願によって開基したとある。その後、梨沢村修験泉珠院の祖、熊野修験山伏、泉光坊長存法印（鎌倉時代）が開眼供養して以来、泉珠院の山伏が別当をつとめた。さらに室町時代には「……年々春秋祭礼怠らず朝廷御安穏・将軍家御武運長久・万民安全の大護摩供修行つかまつり……」とあるように、同院中興の本山派修験、泉珠院源春法印は同地に堂塔を建立し、大菩薩も新たに造立した。この地に権現などを祀ったいきさつについて元和文書には「……白狐の導きか、また、助力かはわからないが、何れにせよ神秘的な事柄によるものである。ここはお宮を建てる前から神聖な場所として位置付けられ、白狐山と言われていたのではないか……」と書かれている。しかし、実際には、ここが信仰の場所となってから狐山と名づけられた可能性もある。

また、縁起の中には「……一泊した其処の老夫婦の家では、馬を飼って子馬をとることを稼業とし、子馬を上州へ引率売却しムギ・アワと交換して生計を立て……」ともある。こういった話が狐山大権現造立の逸話に含まれているのは、この地が馬産地、長倉牧のなかにあったためである。

春日本地仏と宮平春日神社　奈良の春日神社は、春日四殿と若宮によって構成されているが、本地垂迹思想（日本の神は仏が日本の人々を救うためにかりに姿を変えたものとする神仏習合思想）により平安時代後期から鎌倉期以降急速に発展して、春日本地仏が春日浄土曼荼羅として本地仏をあてるとされた。その本地仏を祀る本地堂が、幕末まで豊昇の神ノ屋敷にあった。春日神の第一殿は建雷命（釈迦如来または不空羂索）、第二殿は斎主命（薬師如来）、第三殿は天児屋根命（地蔵菩薩）、第四殿は比売神（十一面観音）、若宮、天押雲根命（文殊菩薩）、これらを総称して春日権現大菩薩といわれる。

鎌倉時代に豊昇の梨沢村修験の宮ノ坊英芳法印は、豊昇宮平の春日神社で祭祀を行なったと寺の縁起に記されている。宮平の地に春日神が勧請されるのは、鎌倉時代と推定されるが、春日信仰の歴史はさらに古い。奈良時代には藤原氏が氏神として祀り、平城京には鎮護神として春日神社が祀られた。また、平安時代には春日山信仰が始まった。春日信仰は、藤原氏が皇室の外戚にあった関係上優雅性があり、王朝時代に全盛期を迎えた。

中世になると西は九州島津荘、東は陸奥小手保荘にいたる、荘園の鎮守として全国数千社にのぼる春日社が各地に祀られた。宮平の春日神社も、鳥羽上皇の皇女暲子内親王の八条院領内にあったために、より手厚く祀られたのであろう。

また、このころには、神仏習合思想の発達で春日第四殿の比売神が伊勢の大神、第三神の天児屋根命が天照大神に対する補佐と比定されるなど、伊勢信仰と連結されることにより、春日信仰は一層広がっ

図21　春日神社と神ノ屋敷の春日本地堂付近に「アカ水」の出る湧出井戸がある

写48　宮平縄文遺跡の住居敷石集積上に立つ春日神社石碑　遺跡発掘前には小高い塚の上に春日社の祠があった

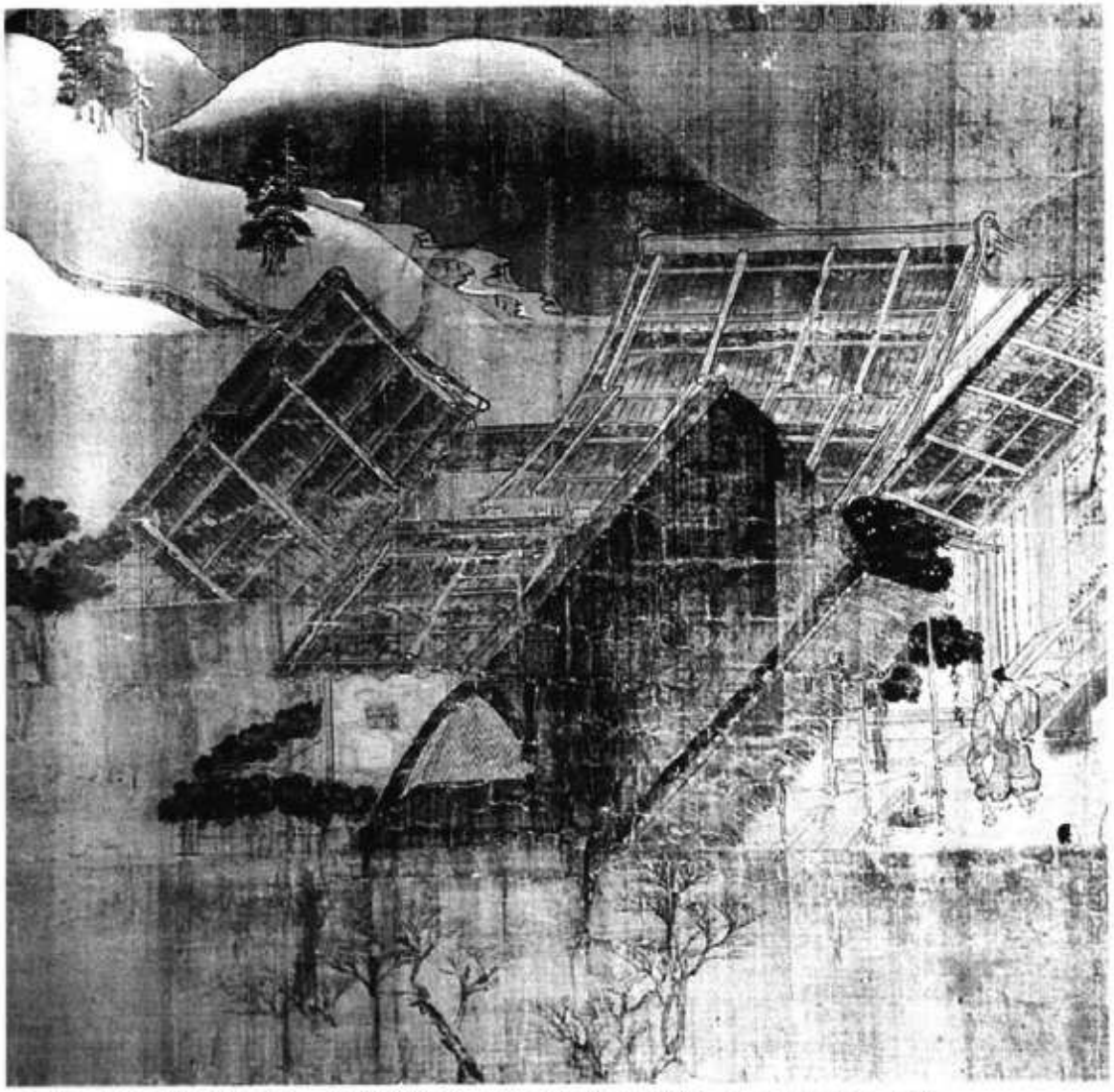
ていった。

宮平の春日神社から南南東約一〇〇mの神ノ屋敷に、前記のように春日の神々の本地仏を祀ったとみられる春日神社・本地堂があったとされる。神ノ屋敷付近には「大棒木、小棒木」などの地名があり、景行天皇紀にみえる「豊城命」の「ホーキ」との関連が考えられる。豊城命の孫、彦狭島王が全国を回った後、大和春日の地で薨去し、穴葉神社で春日神社の末社として祀られたと伝えられる。宮平の春日社は春日神社四殿・若宮・春日の末社をも合祀したものとされるので、後代には「奉王塚坐王宮主殿大神　祝詞」とする豊城命に捧げる祝詞がみられ、四方の里人が春日社の神霊に群れ集い参詣したと記されている。

鎌倉建築と美術・工芸　源頼朝は仏教の信心厚く、源平争乱で焼失した東大寺の再建・復興を援助した。寺院の復興にともない、仏師が活躍する機会も多くなった。奈良の運慶、その弟子快慶などの慶派仏師が有名で、その彫刻の作風は天平彫刻を手本にしたため、写実的で動的であり、また、剛健で人間味豊かである。

寺院にくらべ、武士の居宅は武家造りという神殿造りを基本として生まれた実用的で質素な建築様式が採用された。住居だけでなく食物・衣服も貴族に比べて質素であった。

平安時代末期に出現した絵巻物は一層発達し、「詞書（説明）」の内容を忠実に絵画にするようになり、画法もより写実的であることが重



写49　信濃国佐久郡の武士、大井太郎の館　屋根は草葺きと板葺き（「一遍上人絵伝」より）

視された。前に述べた「一遍上人絵伝」もこの流れに沿うもので、絵は法眼円伊の作である。

武家社会を背景に甲冑・刀剣の製作技術が進歩し、京都の粟田口吉光、備前の長船長光、鎌倉の岡崎正宗など高名な刀匠が輩出した。

焼き物作りも革新された。尾張の加藤影正は宋へ渡り新しい製作法を習得して帰り、瀬戸焼を始めた。御代田町野火付遺跡の中世のムラには、十四世紀に早くも瀬戸焼がもたらされており、この焼き物が早くから商品流通の市場に出回っていたことがわかる。

民間芸能では平安時代の院政期に流行した素朴な滑稽劇で、ものまねの動作が中心の猿楽が引き続き盛んに行なわれたほか、田植えの際の農耕神事から発達し、舞踊・歌舞を主要素とした田楽も鎌倉末期から南北朝期にかけて最盛期を迎えた。

二　室町文化の広がりと仏教

文化の地方波及　北山・東山文化を頂点とする室町時代に文化は、公家・武家・禅僧たちの手によって、京都を中心に展開した。さらに、京都に住んだ守護大名や家臣たちによって、京都の文化はしだいに地方へも広がっていった。また、和歌の衰退に代わって宗祇に代表される連歌が流行した。連歌師は各階層の人々と交わり、全国を遊歴して歩いたので、民衆の間に基礎が築かれていった。太平記読みが各地で「太平記」を民衆に読んで聞かせたことも文化伝播の上に大きな役割をはたした。南北朝時代から猿楽・田楽の能楽師は諸国を巡業したため、この芸能も日本各地に広まった。そして十四世紀末大和猿楽の結崎座に観阿弥・世阿弥父子が現れて猿楽能は大成される。田楽は足利尊氏が保護したので将軍から庶民の間にまで愛好された。

京都を焼け野原と化した応仁の乱（一四六七）は、文化人の地方拡散を促進した。文化人は各地の戦国大名に保護を求めたのである。こうして地方文化は戦国大名の城下町を中心として栄えていった。

禅宗の繁栄　鎌倉時代に盛んだった臨済宗は室町時代にも幕府や地方豪族の保護を得て栄えたが、幕府の衰亡と運命をともにすることになった。時代を鋭く風刺した一休宗純は有名である。また、曹洞宗は地方武士・農民の指示を得て、室町時代中期から大いに発展し、長野県東北信では臨済宗の寺の大部分が曹洞宗に転じるなど隆盛をきわめた。浄土系の諸宗のうち、浄土宗は比較的上層社会と結び教勢を張ったのに対し、真宗は下層社会に浸透した。そして加賀では一向一揆の末、長享二（一四八八）年守護富樫政親を自殺させ、約一〇〇年に亘り加賀一国を支配する大勢力となった。現在でも曹洞宗、浄土真宗が多くの信者を持つのは、発展の基礎が、堅実な農村にあったからである。佐久地方で鎌倉時代に盛んであった時宗の寺院は、室町時代県内に二三寺あった。ところが、檀家制度の取り入れが遅れ、農村への食い込みに欠けていたことが原因となって、浄土宗、真宗に地盤を奪われ、しだいに姿を消していった。また、他宗を激しく排撃

写50　田楽（東京大学史料編纂所蔵『朝日百科・日本の歴史7』より）

した日蓮宗はその教えが平易であったため、徐々に信徒を増やしていたが、浄土教の勢力が強い信濃ではあまり普及しなかった。

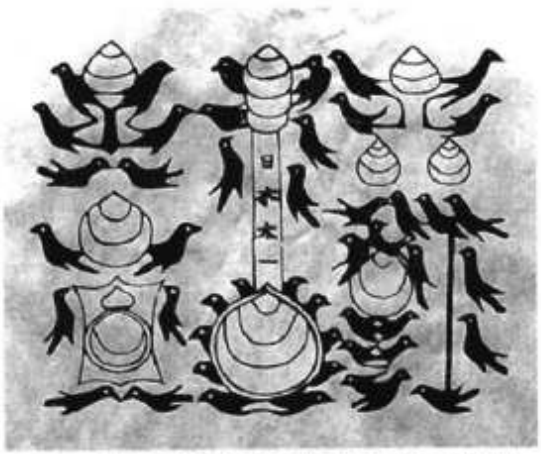
修験の発展　真言宗・天台宗なども多くの信仰を集めていた。観音の霊場をめぐり歩く札所めぐりは、平安時代末期に始まり、西国三十三番札所が最初にできた。鎌倉時代には関東で坂東三十三番札所、室町時代中期には長享二（一四八八）年までに秩父三十三番札所ができた。佐久地方では江戸時代に入ってから佐久三十三番札所が成立した。

真言宗・天台宗などの密教系の信仰は山岳信仰と結びつき、修験道としても発展した。鎌倉時代末ごろから修験道の主流は、しだいに天台宗の聖護院系と真言宗の醍醐寺三宝院系に系列化された。室町時代には聖護院系の山伏は本山派とよばれ紀伊熊野に、三宝院系の山伏は当山派とよばれ大和金峰山に中心道場を置いた。県内の東北信の山伏は大抵本山派に属した。

浅間山信仰は諏訪信仰と結びつき、南北朝時代にできた『神道集』には、諏訪大明神と浅間大明神が登場する「諏訪縁起」が収められている。別名「甲賀三郎物語」といわれ、御代田町でも親しまれている。浅間山の別当（寺で事務をしめくくった職）寺、真楽寺境内下には甲賀三郎（諏訪大明神）が出現したといわれる大沼池がある。真楽寺は近世には末寺三六といわれる寺に成長した。境内には鎌倉・室町時代と見られる五輪塔がたくさんある。仁王門は応永年間に造立、その中に安置されている口を開いた阿形（金剛像）、閉じた吽形（力士像）の二対の金剛力士像は、仏師「上州世良田刑部公鎮鑁」の作で、応永二（一三九五）年四月に造り始め、七月二十五日に完成した。これに要した多額の費用は講を結んだ佐久地方の武家・豪・農民らの寄進によって賄われた。

熊野牛王宝印　熊野本宮が八五羽・那智宮が七二羽・新宮が四八羽の鳥が描かれる熊野牛王宝印は、足利末期、戦国時代の武門武将は有名、無名にかかわらず熊野信仰に心をよせぬものはなかった。これは那智大社に捧げられた数多い願文として残っている。なお、牛宝印とは鎌倉時代の後半ころから寺院、神社が発行し信者に配布した護符の一種であった。

また、熊野信仰を語る際に無視できないものに熊野牛王宝印がある、古来起請や誓紙として用いられていたことから一般に知られており、熊野牛王を「オカラスサン」ともいった。全国津々浦々の武門武将・庶民が拝戴するところとなって、広く御布祀奉斎となった。参詣を主とした熊野信



写51　熊野牛王宝印四十八羽の鳥　戦国期の誓紙によく使われた

仰は日常生活の不可分な関係になっていき、今でも厄よけの護符として用いられている。

板碑　板碑は、五輪塔・宝篋印塔などと同じく供養のために建立した塔婆の一種である。板石塔婆あるいは青石塔婆ともいい、石造卒塔婆の一種で、埼玉県を中心に分布している武蔵型板碑は、緑泥片岩とよばれる偏平な石材を用いているが、地域によっては厚みのある自然石を用いているところもある。首部・額・塔身部・柄からなり、首部は三角形で二条の切り込みがある。頭身部は種子・偈頌・紀年銘・造立趣旨などが刻み込まれている。柄部は地中に埋めて立てるためのものである。板碑は北は青森から南は鹿児島まで、ほぼ日本各地に分布しているが、この種の板碑は当町では、城跡や中世の高い文化の流入もあるが発見されていない。近くでは佐久市千曲川流域および千曲川に近い支流の沿岸に多く発見されている。もっとも多い大沢地区の長命寺跡から一八基が出土、ついで瀬戸中城平で六基ほど、これらは中世からの開創寺院であり、隣接地に中世の城館跡があることから歴史的に恵まれた条件で造立されているようである。板碑は武士階級にも手軽なことから好まれて、鎌倉・室町時代を通じて盛んに造立された。

守護や地頭などになって武蔵の武士が全国に赴任していったので、それにともなって板碑も全国各地に拡散していった。修験道においても、修験板碑と称される一群の資料もある。この地方にも平安中期以降鎌倉時代にはすでに熊野信仰が伝わり各地に熊野権現が勧請されているが、この種の板碑の数は少ない。しかし中世修験者の活動の一端をみることができる。これら板碑は、戦国時代には衰微し、江戸時代以降は造立されなくなるので、中世を代表する信仰遺物といわれる。この中世を知る板碑類は今後、何かの機会に当町でも発見されることを期待したい。

写52　埼玉県慈光寺の板碑　寛正5年、寺歴代の板碑で時代の優美なもの

写53　日本でも珍しい修験板碑　埼玉県倶利加不動堂の山伏姿と種字の刻まれたもの

書院造の流行　寺院の建築は、禅宗の発達につれて唐様建築が隆盛をきわめた。

住宅建築としては、室町時代には書院造が流行した。書院造とは玄関、奥に書院といわれる上段の間を設け、各部屋を壁・障子・襖で区切り、壁・襖には絵を描く。部屋には畳を敷き、天井を張る。書院には書院窓・違い棚・床の間を設けるのが基本である。当初将軍の邸宅に用いられ、しだいに上級武士、公家の住宅として用いられ、近代以後はおおいに流行して今日の住宅の源流となった。

南北朝時代に禅宗寺院に営まれた庭園は、室町時代には将軍や大名、さらに公家などの邸宅に書院造とともに採用された。長野県では国人領主の館と考えられる中野市高梨氏館跡から建物跡とともに庭園跡が発見されている。

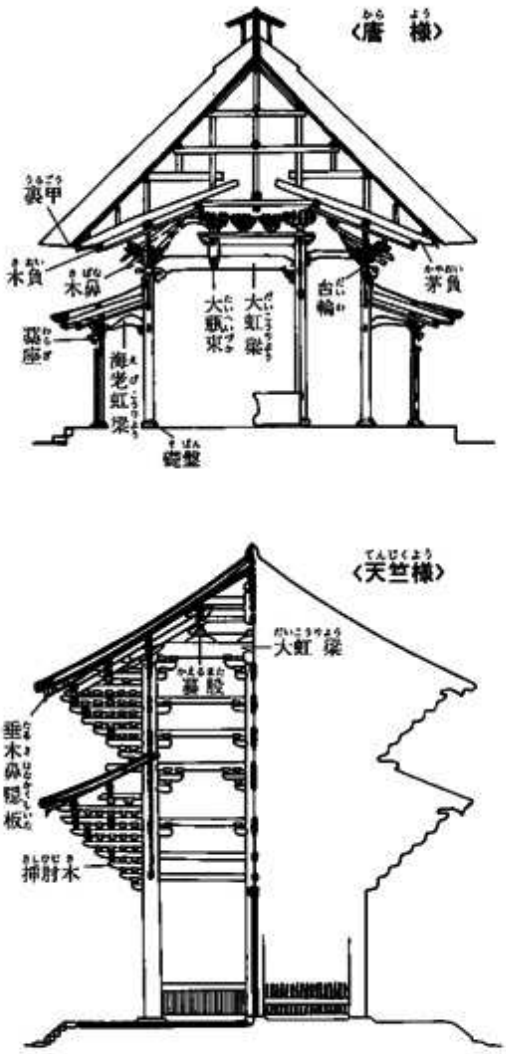


図22　天竺様は鎌倉、唐様は室町時代に流行した

こういった寺院や高級武士の邸宅と比べ、民衆の住まいはきわめて質素であった。さきに述べた御代田町前藤部遺跡は室町時代（十五世紀）の地侍・百姓クラスのムラと考えられ、その住居は竪穴式であった。つまり、床板のない土間暮らしをしていたのである。こういった、半地下構造の住居は中世の一般的住居でなく、地面を掘り込まない平地式の住居が普遍的であった。しかし、半地下式、平地式の別を問わず、一般庶民の住居には床板がなく、土間暮らしであったようだ。室町時代の御伽草子『物くさ太郎』には、豊前守の御殿に泊めてもらうことになった太郎が、慣れない油をひいた板敷きの床の上で滑って転んでしまったというくだりがある。この話からも、土間暮らしが当たり前の一般庶民は、板敷きの上での生活を経験していなかったことがうかがえるのである。

茶の湯　鎌倉時代に栄西の伝えた喫茶の風習は、南北朝時代に闘茶という遊戯となって流行した。八代将軍義政は禅の精神を取り入れた書院の茶を始めたが、村田珠光はこれを受けて四畳半の侘び茶を始めた。これは戦国時代に堺の富商武野紹鷗により一段と簡素なものに仕上げられ、社交のエチケットとして町衆はじめ公家・武家にも流行した。佐久平でも大井城・金井城・広戸城などいくつかの城館跡から茶臼や天目茶わんが出土しており、

佐久平の国人層までは確実に茶の湯が流行していたことがわかる。

三　華麗な桃山文化

黄金趣味　桃山文化とは秀吉の晩年の居城、伏見を後に桃山といったので、これにちなんで織豊政権下の文化に名づけられた。

この時代の文化のおもな担い手は、戦国時代を生き抜いた武士と貿易・戦争で富を蓄えた豪商であったため、文化内容も派手で黄金趣味であった。住宅建築も派手になり、書院造の邸宅は大きく華やかになった。秀吉の京都の邸宅聚楽第がその代表例である。城や邸宅の襖・屏風を飾る障壁画も盛んに描かれた。金地に描かれた狩野永徳の「洛中洛外図屏風」などは有名である。

各地の政治的・地理的中心地に大名の天守閣をもった城が築かれたことに連動して、民衆が集う城下町が作られたため、各地に町人文化が花開いたのもこの時代である。公家や僧侶が主役であった室町時代までの宗教的色彩の強い文化から脱して、人間中心の現実主義的文化がここに始まったのである。町人が自治的に行なう祇園祭りや盂蘭盆会の念仏踊りは、桃山時代に室町時代から発展的に受け継がれ、現代まで続いている。そして出雲の阿国が始めたといわれる歌舞伎踊りは、民衆の熱狂的支持を受けた。また、長期間の戦争のはてに訪れた平和を謳歌したかったのであろうか、享楽的傾向も強い。

そしてこの時代の文化はポルトガル人らの進出もあり、キリスト教・鉄砲・たばこ・メガネ・時計など南蛮文化の影響も受け、生活の中へ溶け込んでいった。

侘び茶の完成　絢爛豪華な桃山文化にあって、千利休によって侘び茶が完成された。利休は簡素で精神的な深みのある茶を理想とし、従来趣味的であった茶の湯を芸術の域にまで高めた。しかし、その精神がかえって秀吉の怒りをかうことになり、切腹を命ぜられた。

侘び茶の流行によって、茶室も多く建設された。京都の楽焼、岐阜県の志野焼、尾張・美濃の織部焼など各地で特色ある茶器が発達したのもこの時期である。また、有田焼、萩焼などは朝鮮出兵の際、大名が朝鮮の陶工を連れ帰って焼かせたものである。

〈引用・参考文献〉

長野県　一九三六　『長野県町村誌』東信編

宮廻夏穂　一九八七　「長野県北佐久郡の中世城郭」『國學院雑誌八八―9』

中央公論社　一九八七　『日本の絵巻12　平治物語絵詞』

中央公論社　一九八八　『日本の絵巻20　一遍上人絵伝』

長野県　一九八六・八七　『長野県史』通史編二・三

佐久市　一九九三　『佐久市志　歴史編（二）中世』

木内　寛ほか　一九九七　『佐久の城』　郷土出版社

付編

御代田町の遺跡

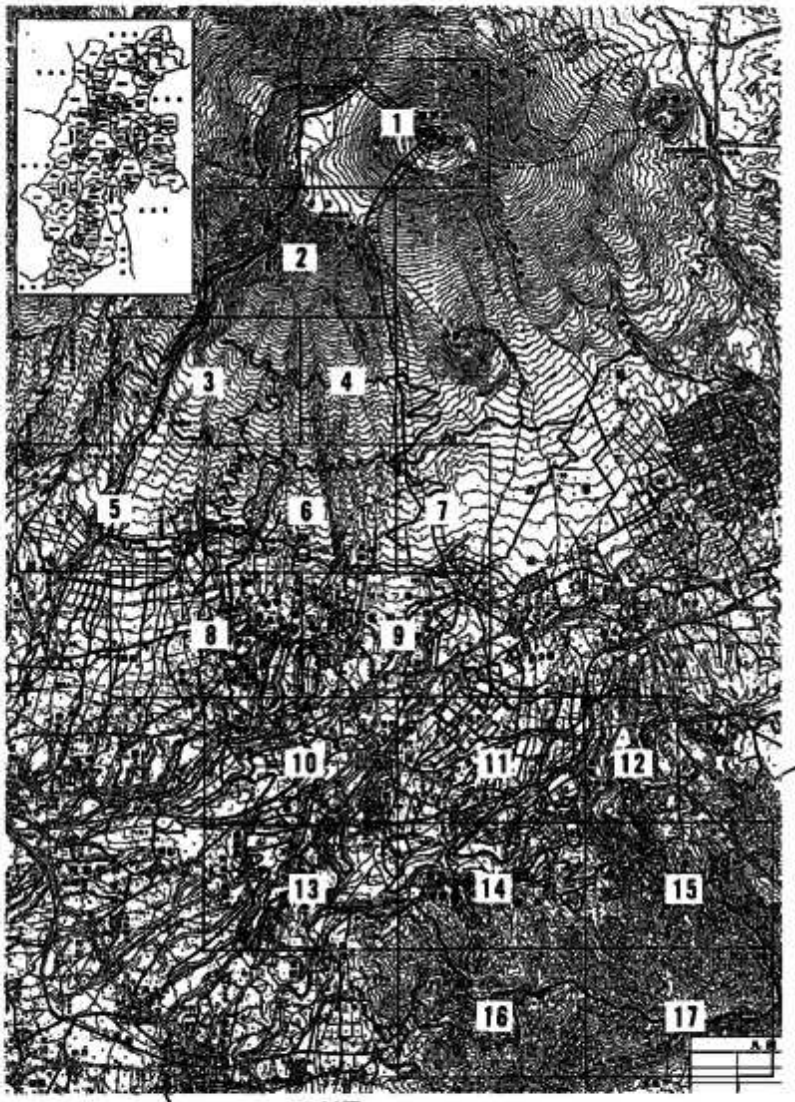
御代田町遺跡分布図（1：100,000）

※次頁以降に遺跡分布の分割拡大図（1：5,000）あり

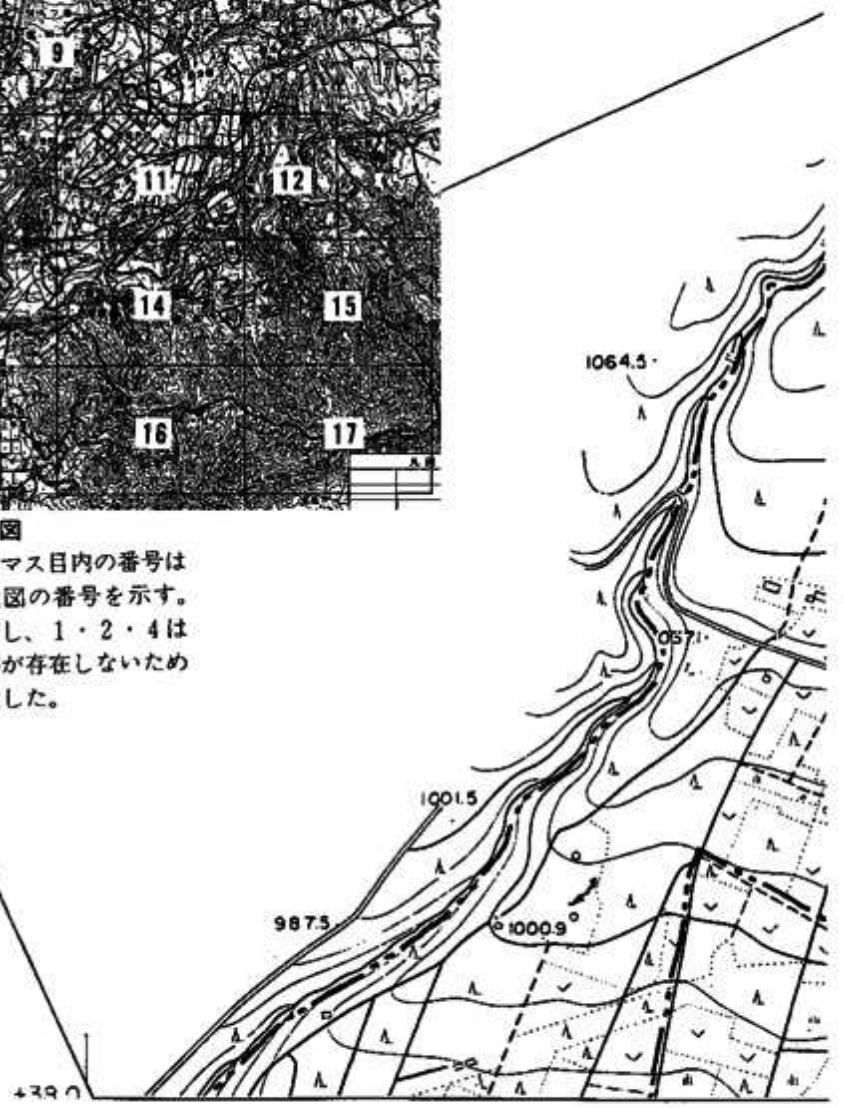
北佐久郡御代田町遺跡一覧表

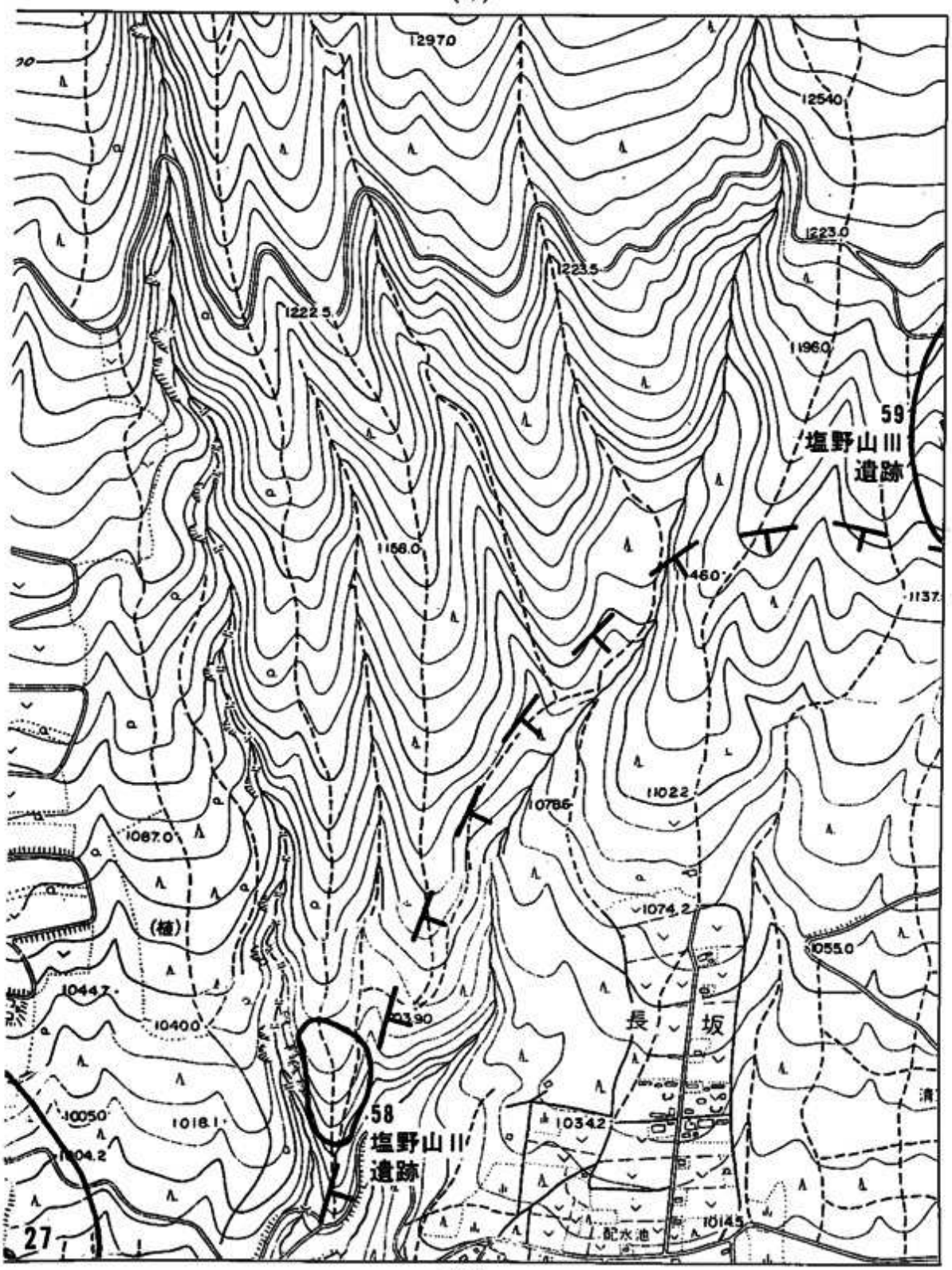
番号	種別	時代					遺跡名	所在地	発掘歴	消滅	
		縄文	弥生	古墳	奈平	中世				一	全
1	集落址	○			○		西荒神	御代田町塩野	○	○	
2	集落址	○			○	○	東荒神	御代田町塩野	○	○	
3	集落址	○					西城西	御代田町塩野			
4	集落址	○					西城東	御代田町塩野			
5	散布地	○					大沼	御代田町塩野	○	○	
6	集落址	○					滝沢	御代田町塩野	○	○	
7	集落址	○			○		城之腰	御代田町塩野	○	○	
8	集落址	○					細尾根	御代田町塩野	○	○	
9	集落址	○			○		広畑	御代田町塩野	○	○	
10	集落址	○					狸窪	御代田町塩野			
11	集落址	○					西駒込	御代田町塩野			
12	集落址	○					上藤塚	御代田町塩野	○	○	
13	散布地	○					東二ツ石	御代田町塩野			
14	集落址	○					勘玉	御代田町塩野	○	○	
15	墓址			○			細田塚古墳	御代田町塩野	○		○
16	墓址			○			塚田古墳	御代田町塩野	○		
17	散布地	○					馬場	御代田町塩野			
18	墓址			○			めがね塚古墳群	御代田町馬瀬口			
19	墓址			○			下原古墳群	御代田町馬瀬口	○		
20	城跡					○	小田井城跡	御代田町上宿			
21	散布地	○					下屋敷	御代田町面替			
22	散布地						北屋敷	御代田町面替			
23	散布地	○					面替	御代田町面替			
24	散布地	○					面替小谷ヶ沢	御代田町面替			
25	散布地	○					滑水平	御代田町豊昇			
26	集落址	○					宮平	御代田町豊昇	○	○	
27	集落址	○					塩野山	御代田町塩野			
28	集落址				○		児玉	御代田町児玉			
29	集落址	○					塩野西原	御代田町塩野			
30	集落址	○					上西田	御代田町塩野			
31	洞穴	○					山犬穴洞穴	御代田町塩野	○		
32	散布地		○				西畠	御代田町塩野			
33	散布地	○					弥堂	御代田町塩野			
34	散布地	○					草越南畑	御代田町草越			
35	散布地	○					追分道添	御代田町草越			
36	散布地	○					追分西畑	御代田町草越			
37	散布地	○					下藤塚	御代田町塩野			
38	集落址	○					御代田池尻	御代田町児玉	○	○	
39	城跡					○	広戸城	御代田町広戸			
40	集落址				○		野火付	御代田町小田井	○		○
41	集落址				○		前田	御代田町小田井	○	○	
42	集落址				○		十二	御代田町小田井	○	○	
43	集落址				○		根岸	御代田町小田井	○	○	
44	墓址			○			根岸古墳	御代田町小田井			
45	城跡					○	金井城	御代田町小田井			
46	散布地					○	中金井	御代田町小田井	○	○	
47	城跡					○	宮平城	御代田町豊昇			
48	散布地	○					滑水平	御代田町豊昇	○	○	
49	集落址	○					上ノ屋敷	御代田町豊昇	○	○	
50	城跡					○	権沢城	御代田町豊昇			
51	城跡					○	梨子沢城	御代田町梨沢			
52	城跡					○	依田城	御代田町梨沢			
53	城跡					○	曽根城	御代田町小田井			
54	散布地						跡坂	御代田町小田井			
55	集落址					○	前藤部	御代田町小田井	○		
56	集落址			○	○	○	聖原II	御代田町小田井			
57	集落址						西向原	御代田町馬瀬口			
58	集落址				○		塩野山II	御代田町塩野			
59	集落址				○		塩野山III	御代田町塩野			
60	城跡					○	塩野城	御代田町塩野			
61	集落址		○				細田	御代田町塩野			
62	集落址		○		○		下荒田	御代田町塩野	○		○
63	集落址	○		○			塚田	御代田町塩野	○	○	
64	城跡					○	頭槌城	御代田町面替			
65	城跡					○	谷地城	御代田町荒町			
66	城跡					○	馬瀬口城	御代田町馬瀬口			
67	集落址	○					下弥堂	御代田町塩野	○	○	○
68	集落址	○			○		中屋際	御代田町塩野	○		
69	集落址	○			○		関屋	御代田町塩野	○	○	
70	集落址	○			○		川原田	御代田町塩野	○	○	
71	集落址	○					下大宮	御代田町塩野			
72	散布地	○					下ノ平	御代田町塩野			
73	散布地	○					北原	御代田町塩野			
74	散布地	○					戻場	御代田町馬瀬口			
75	城跡					○	長倉城	御代田町小田井			
76	城跡					○	戸谷城	御代田町小田井			
77	城跡					○	桐原城	所在不明			

(3)
(6)
(8)
1154.3
1124.5
1118.5
1114.7
1100
1078.0
1073.7
1068.1
1050
1037.3
1000
1164.0
1103.2
1101.9
1070.4
1045.0
1040.1
994.3
南ケ原
森林水産省関東林木
長野支部



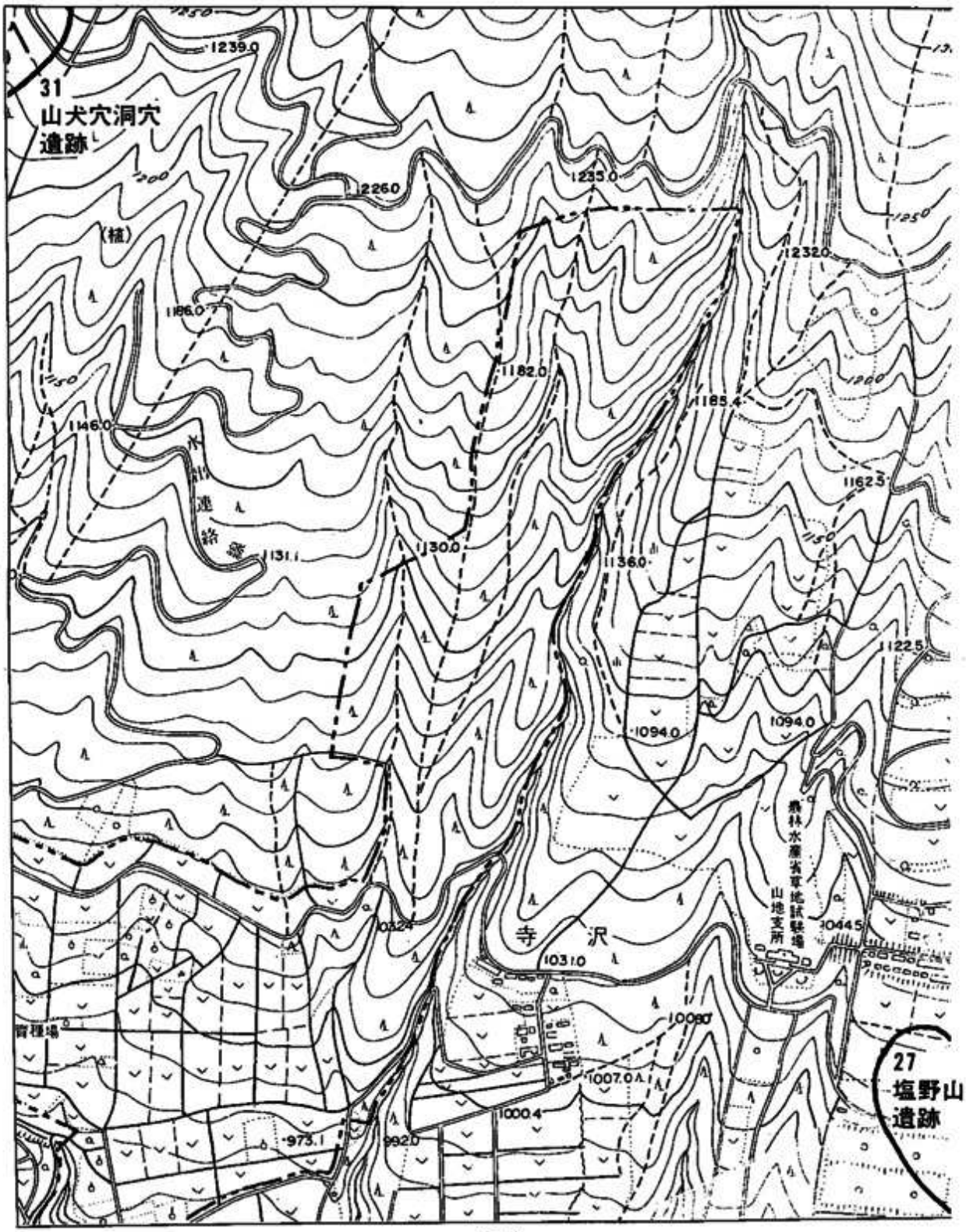
区割図
図中マス目内の番号は拡大図の番号を示す。ただし、1・2・4は遺跡が存在しないため割愛した。



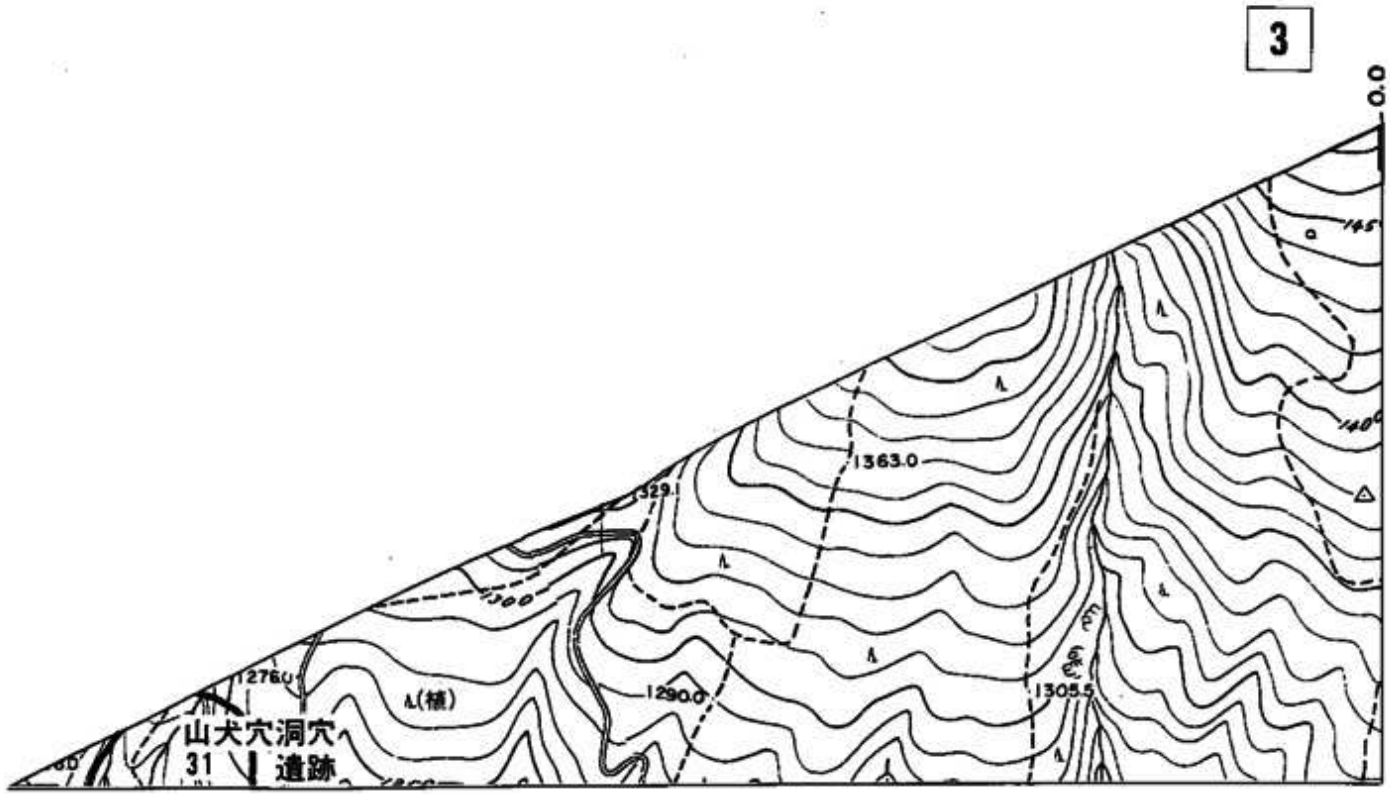

(4)
(7)
(9)
59
塩野山III
遺跡
58
塩野山II
遺跡
27
長坂
配水池
(植)
1297.0
1254.0
1223.0
1223.5
1222.5
1196.0
1158.0
1137.
1102.2
1078.6
1074.2
1055.0
1044.7
1040.0
1039.0
1034.2
1018.1
1014.5
1004.2
1005.0
1087.0

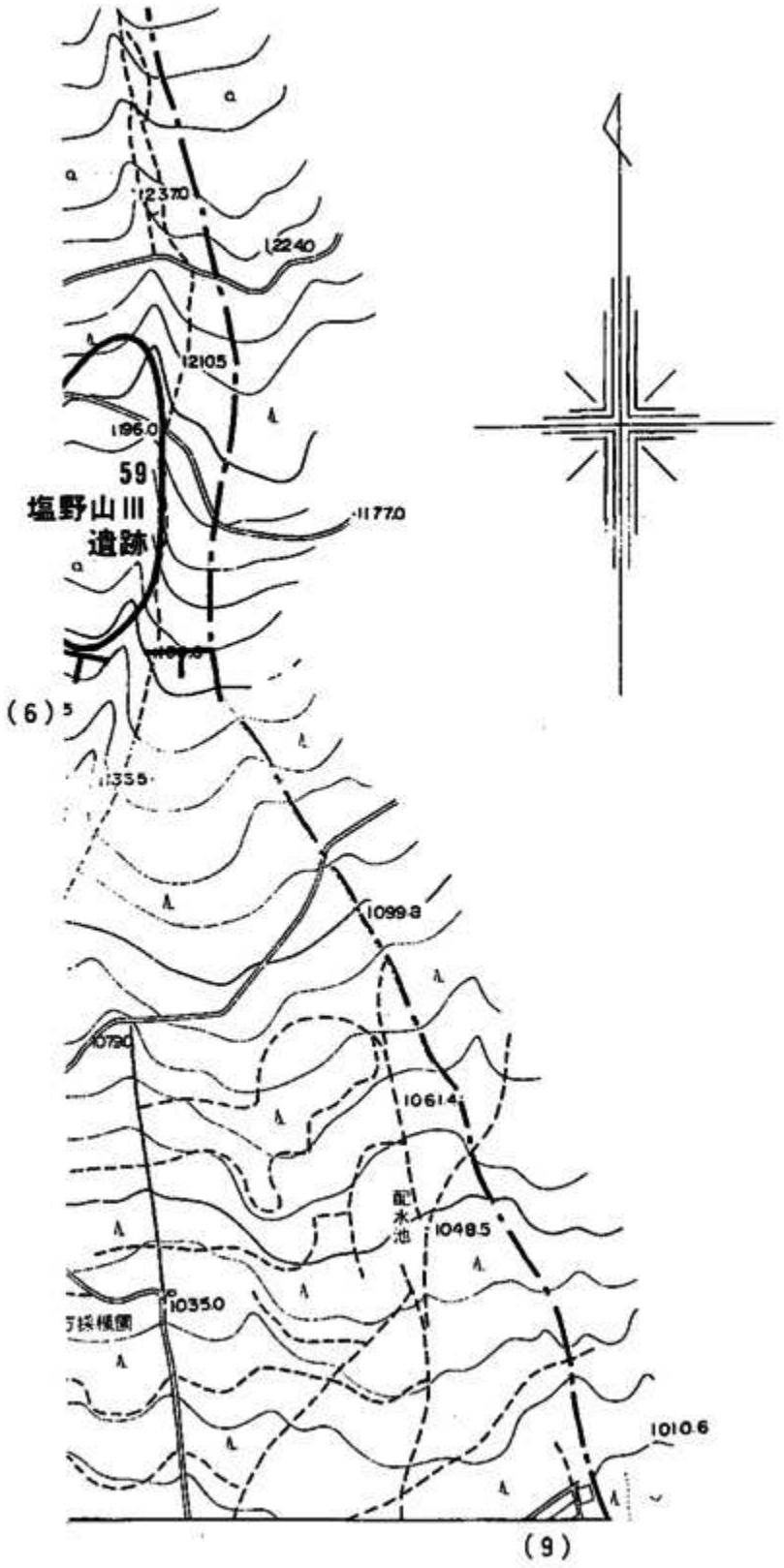
(3)

(5)

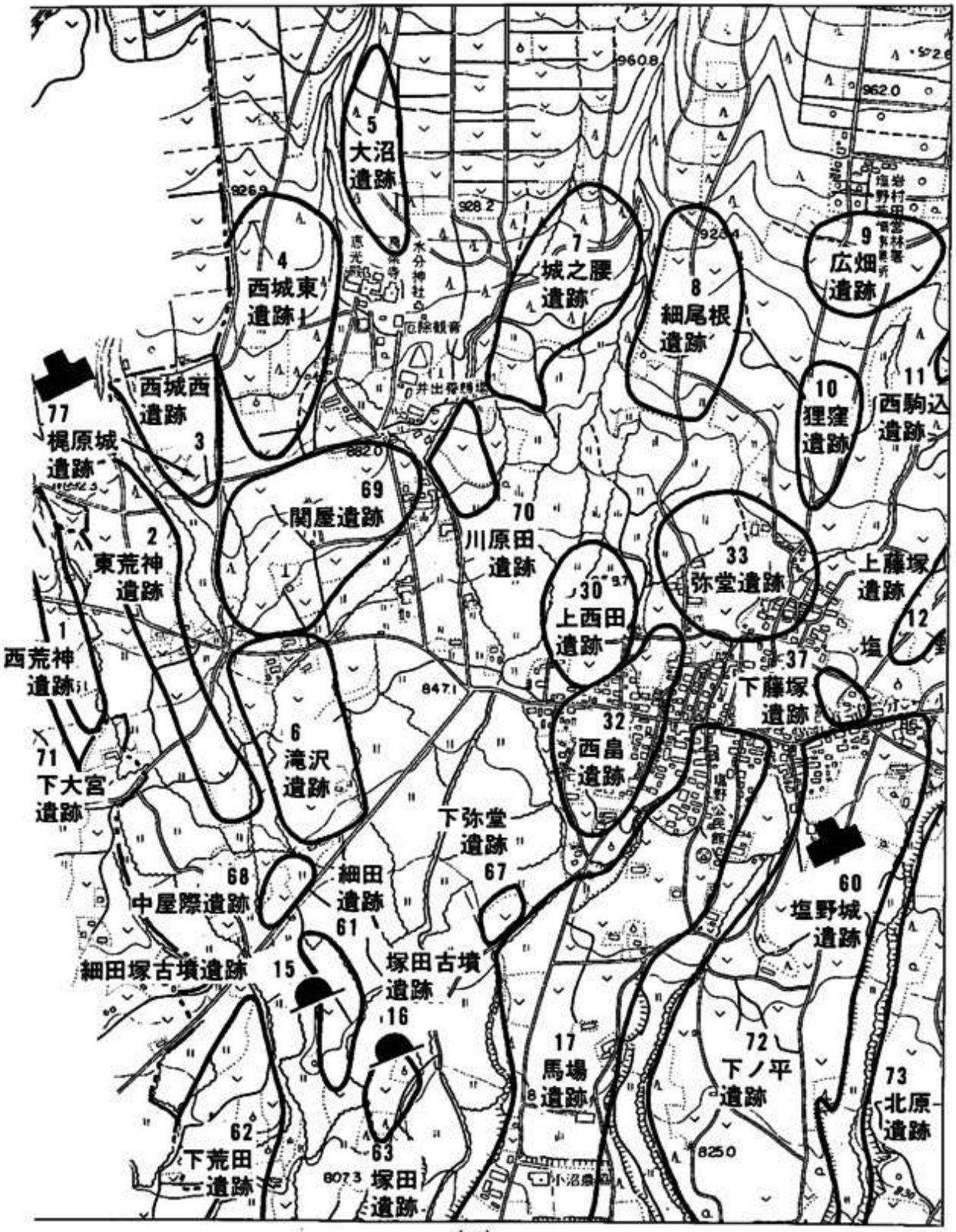

31
山犬穴洞穴
遺跡
1239.0
1226.0
1235.0
1232.0
1186.0
1182.0
1185.4
1146.0
1162.5
1131.1
1130.0
1136.0
1122.5
1094.0
1094.0
1032.4
寺 沢
1031.0
1044.5
1008.0
1007.0
1000.4
973.1
992.0
27
塩野山
遺跡

(8)


3
0.0
1363.0
1329
1300
1276.0
1290.0
1305.5
山犬穴洞穴
31
遺跡
(5)
(6)


59
塩野山III
遺跡
12370
12240
12105
1196.0
11770
1335
1099.8
1072.0
1061.4
配水池
1048.5
1035.0
1010.6
(6)
(9)

(6)


5
大沼
遺跡
4
西城東
遺跡
7
城之腰
遺跡
8
細尾根
遺跡
9
広畑
遺跡
10
狸窪
遺跡
11
西駒込
遺跡
西城西
遺跡
3
77
梶原城
遺跡
69
関屋遺跡
70
川原田
遺跡
2
東荒神
遺跡
1
西荒神
遺跡
30
上西田
遺跡
33
弥堂遺跡
上藤塚
遺跡
12
塩
37
下藤塚
遺跡
32
西畠
遺跡
6
滝沢
遺跡
71
下大宮
遺跡
下弥堂
遺跡
67
68
中屋際遺跡
細田
遺跡
61
60
塩野城
遺跡
細田塚古墳遺跡
15
塚田古墳
遺跡
16
17
馬場
遺跡
72
下ノ平
遺跡
73
北原
遺跡
62
下荒田
遺跡
63
塚田
遺跡
960.8
962.0
926.9
928.2
882.0
847.1
825.0
807.3
小沼農

(9)

(10)

(5)

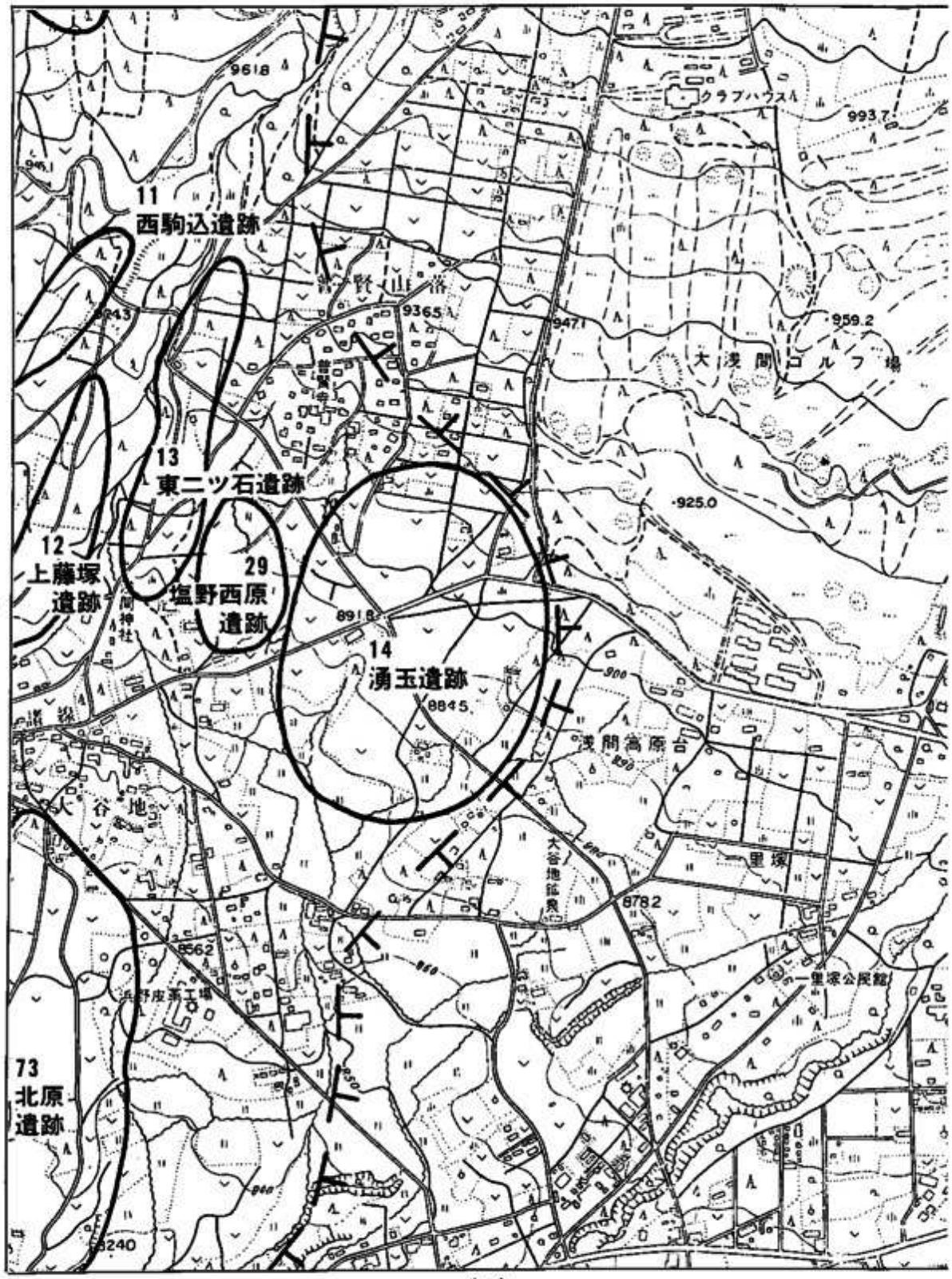
(7)

1007.0
清
万
秋葉浅間神社
954.6
ゴルフ練習場
943.8
清万公民館
944.4
937.5
別荘地
西軽井沢ペイビルル
902.8
軽井沢生コン
923.2
至高崎
926.2
897.3
ホテル浅間
872.6
906.38

(11)

(6)

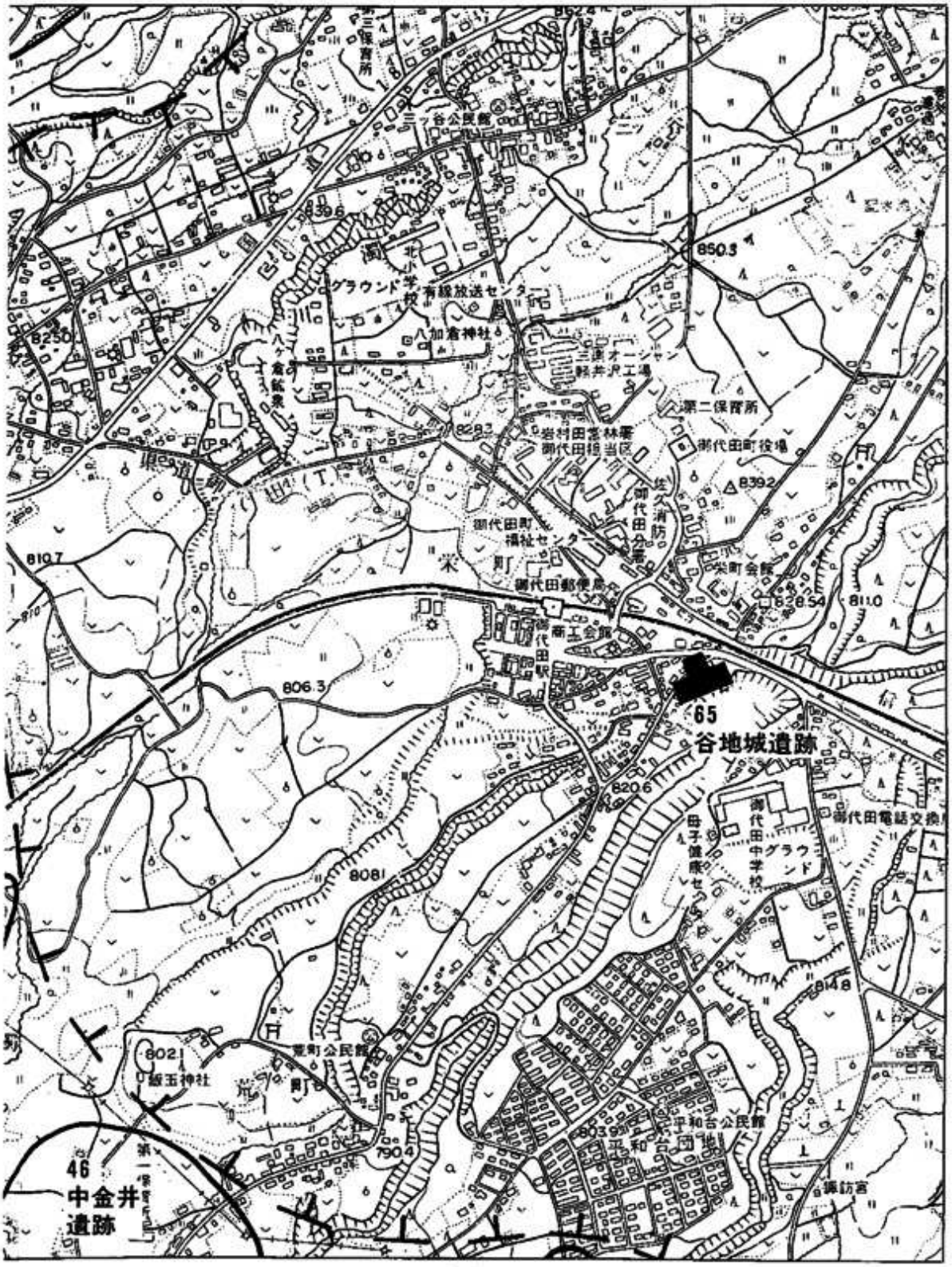
(8)



11
西駒込遺跡
13
東二ツ石遺跡
12
上藤塚
遺跡
29
塩野西原
遺跡
14
湧玉遺跡
73
北原
遺跡
クラブハウス
大浅間ゴルフ場
浅間高原台
大谷地
一里塚
一里塚公民館

(10)

(9)

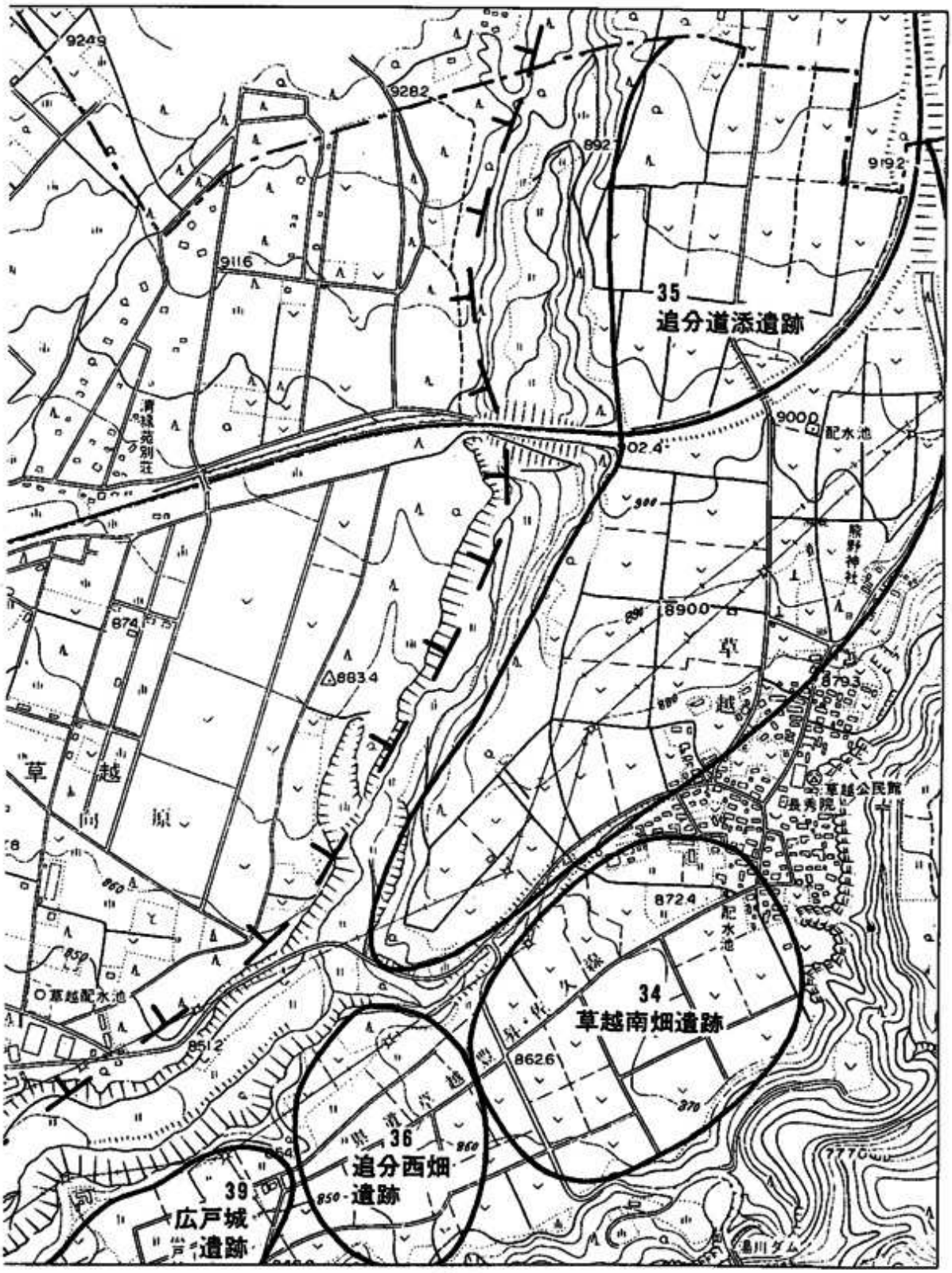


三ヶ谷公民館
北小学校
グラウンド
有線放送センター
八加倉神社
八ヶ倉鉱泉
三連オーシャン
軽井沢工場
第二保育所
岩村田営林署
御代田担当区
御代田町役場
御代田町
福祉センター
御代田分署
佐久消防
栄町会館
御代田郵便局
御代田駅
商工会館
65
谷地城遺跡
御代田中学校
グラウンド
母子健康センター
御代田電話交換
荒町公民館
飯玉神社
平和台公民館
平和台団地
諏訪宮
46
中金井
遺跡
850.3
839.6
828.3
839.2
828.54
811.0
810.7
806.3
820.6
808.1
814.8
802.1
790.4
803.9

(11)

(13)

62 下荒田遺跡
17 馬場遺跡
72 下ノ平遺跡
73 北原遺跡
74 戻場遺跡
66 馬瀬口城遺跡
瀬ノ口川
18 めがね塚古墳群遺跡
19 下原古墳群遺跡
57 西向原遺跡
43 根岸遺跡
44 根岸古墳遺跡
42 十二遺跡
馬瀬口公民館
長泉寺
馬瀬口神社


35
追分道添遺跡
34
草越南畑遺跡
36
追分西畑
遺跡
39
広戸城
遺跡
草越
草越公民館
長秀院
配水池
草越配水池
清祿苑別荘
熊野神社
9249
9282
9116
9192
8900
8793
8724
8626
8512
8834
874
902.4
900.0

(12)

(14)

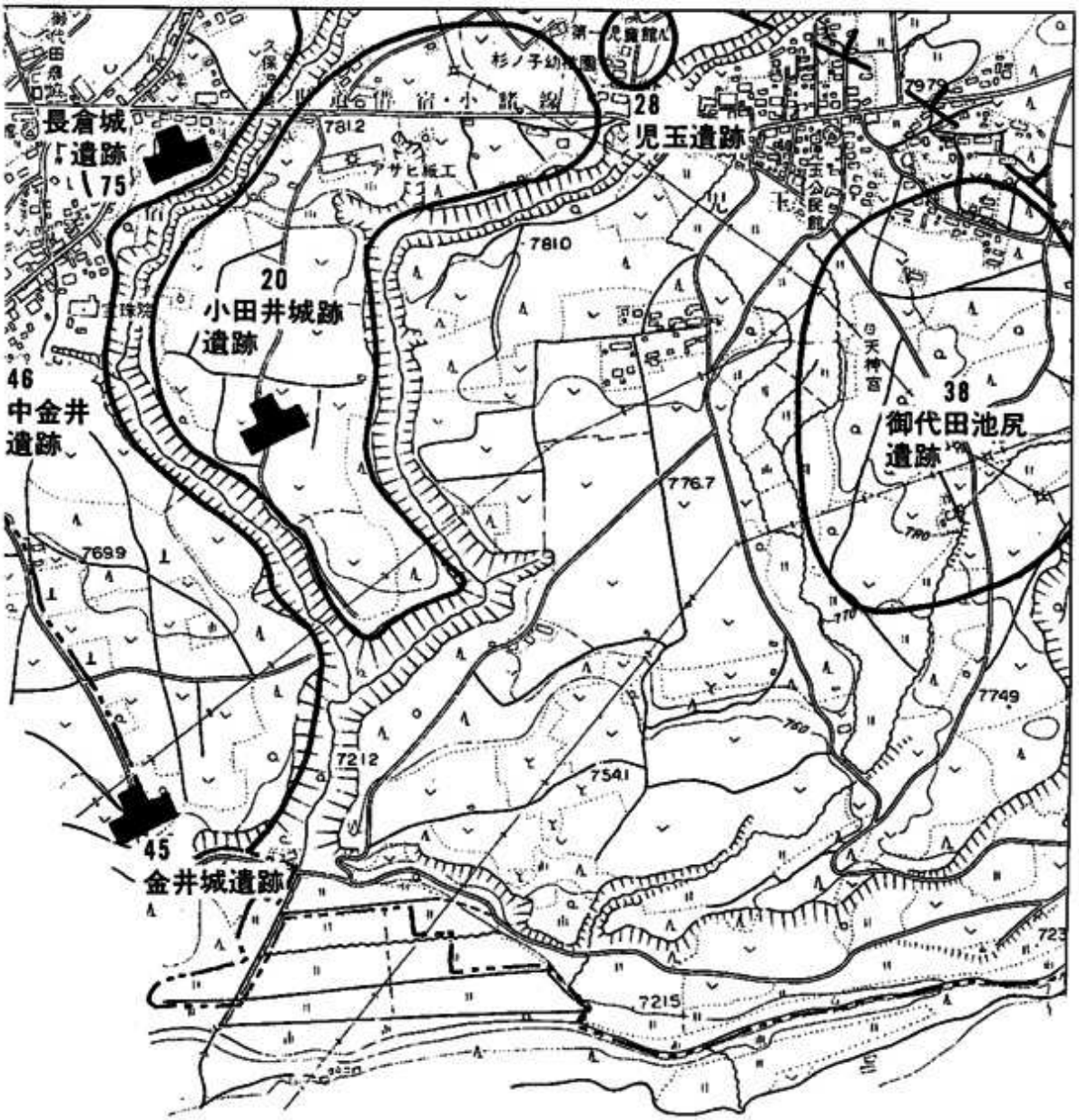
(9)

(10)

西軽井沢公民館
西軽井沢
西軽井沢団地
8730
8546
8721
8683
8390
8528
東雪窓
御代田町
レーマンチョコレート
8451
御代田精密
ソメオ精密
グラウンド
明代田海洋センター
中央診療所
南小学校
8249
町営グラウンド
グラウンド
西軽井沢レイクビレッジ
第四保育所
向原公民館
向原
8319
8412
8129

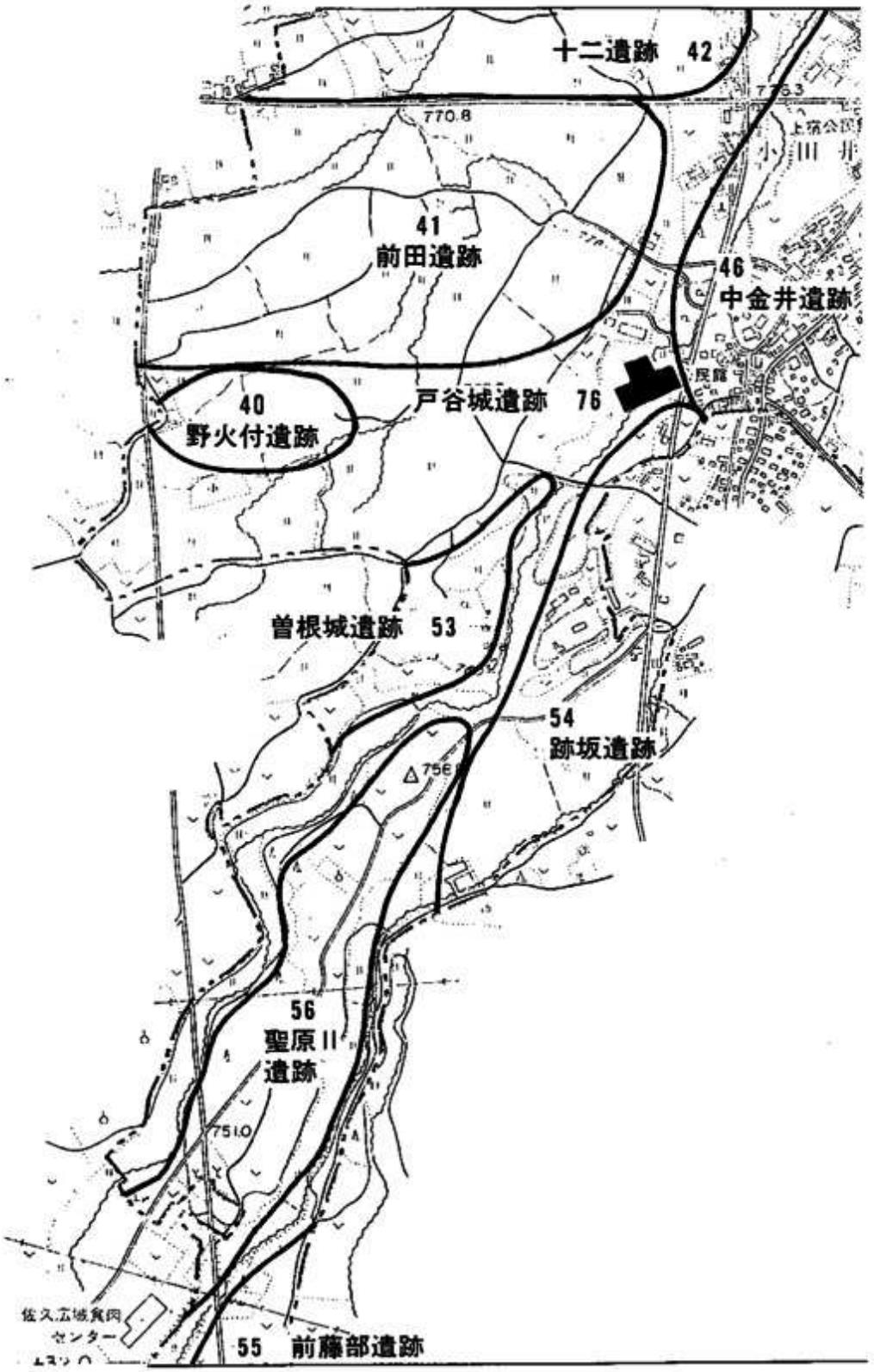
(14)

(10)

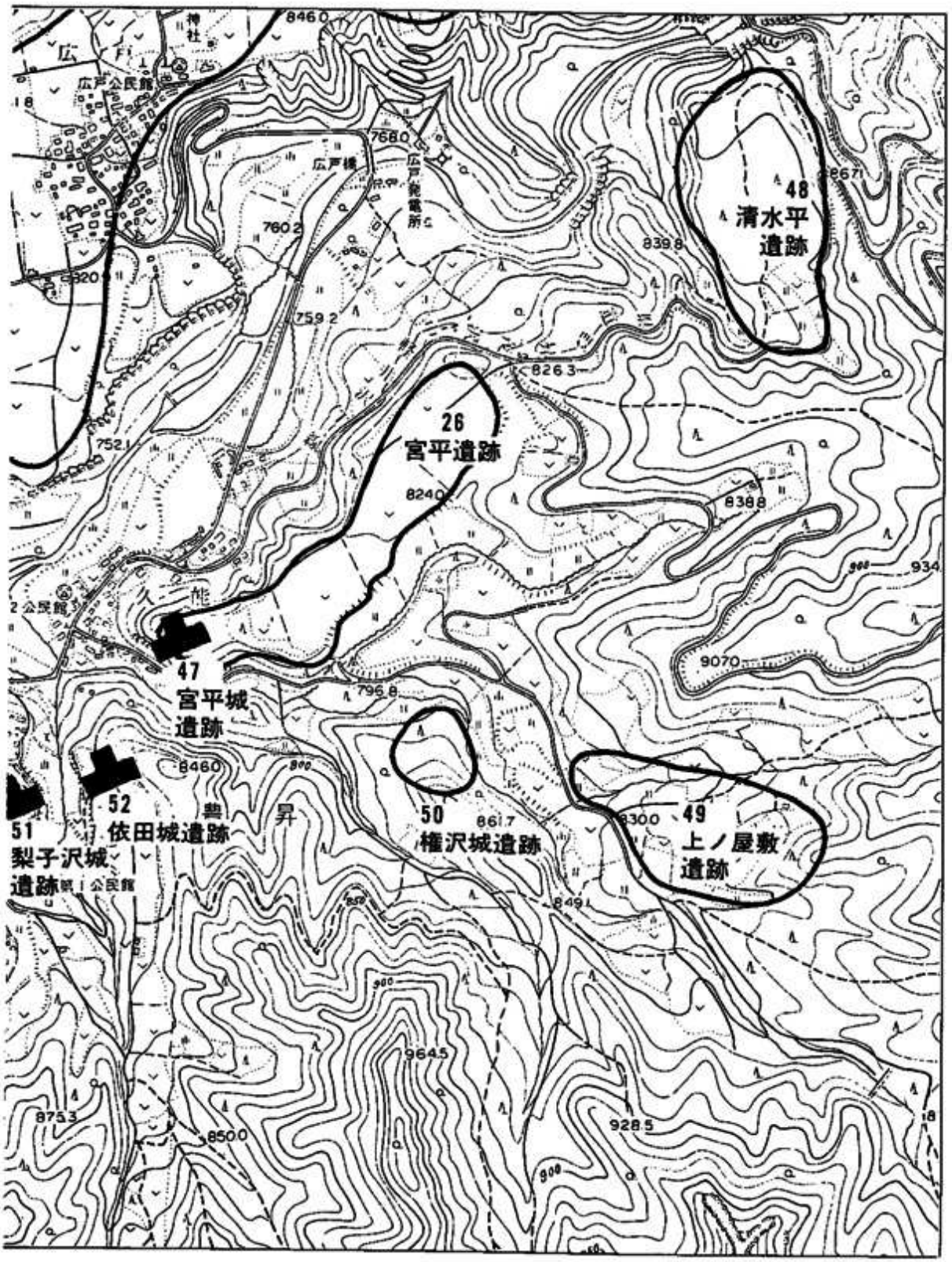

長倉城
遺跡
75
20
小田井城跡
遺跡
46
中金井
遺跡
45
金井城遺跡
28
児玉遺跡
38
御代田池尻
遺跡
7812
7810
7769
7212
7541
7749
7215
7979
776.7
天神宮
アサヒ紙工

(14)

(10)

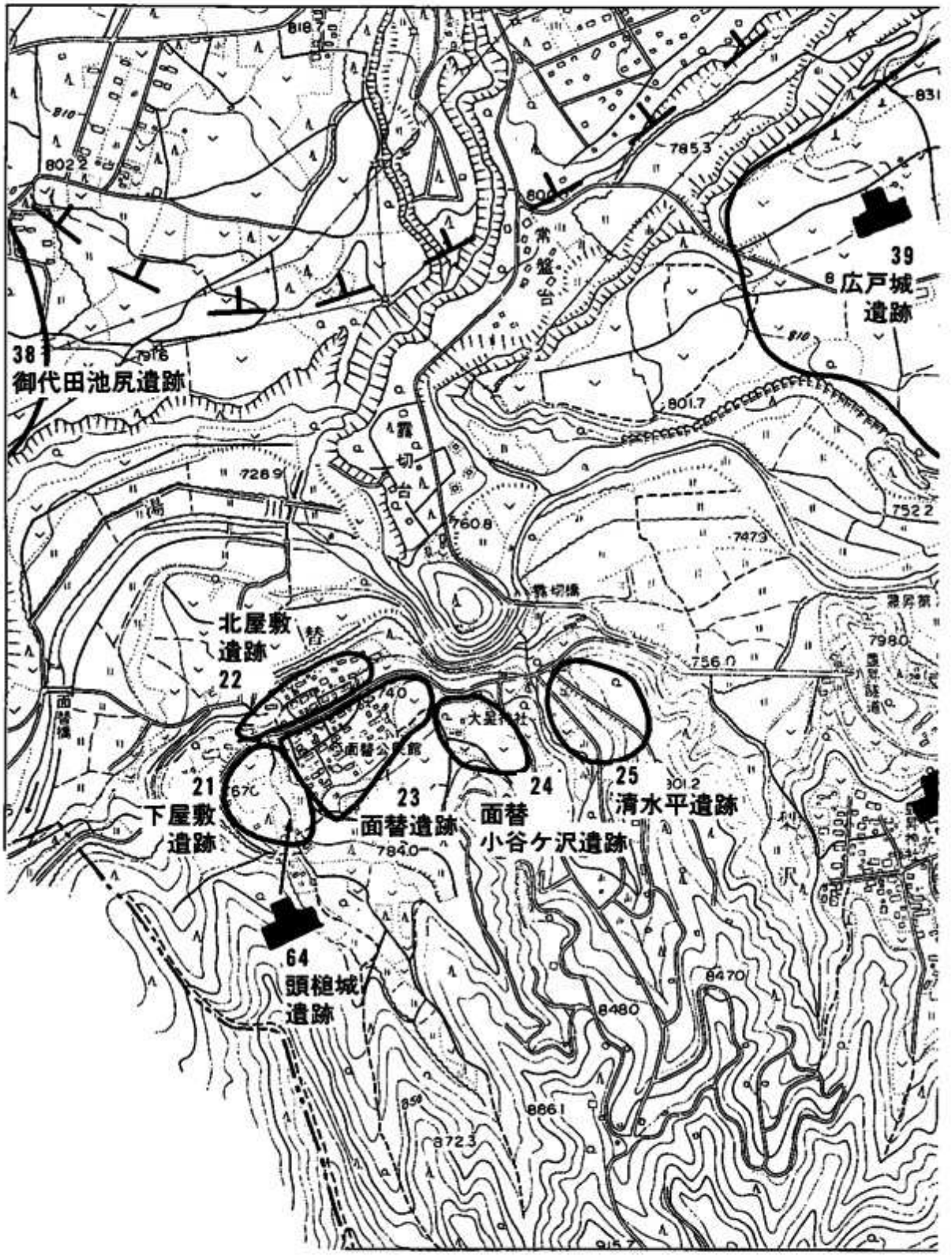

十二遺跡 42
770.8
41
前田遺跡
46
中金井遺跡
40
野火付遺跡
戸谷城遺跡 76
曽根城遺跡 53
54
跡坂遺跡
△756
56
聖原II
遺跡
751.0
佐久広域食肉
センター
55 前藤部遺跡

(11)


48
清水平
遺跡
26
宮平遺跡
47
宮平城
遺跡
52
依田城遺跡
51
梨子沢城
遺跡
50
権沢城遺跡
49
上ノ屋敷
遺跡
広戸公民館
広戸橋
広戸発電所
8460
7680
7602
7592
8267
8398
8263
8240
8388
9070
7968
8460
8617
8300
8491
9645
8753
8500
9285

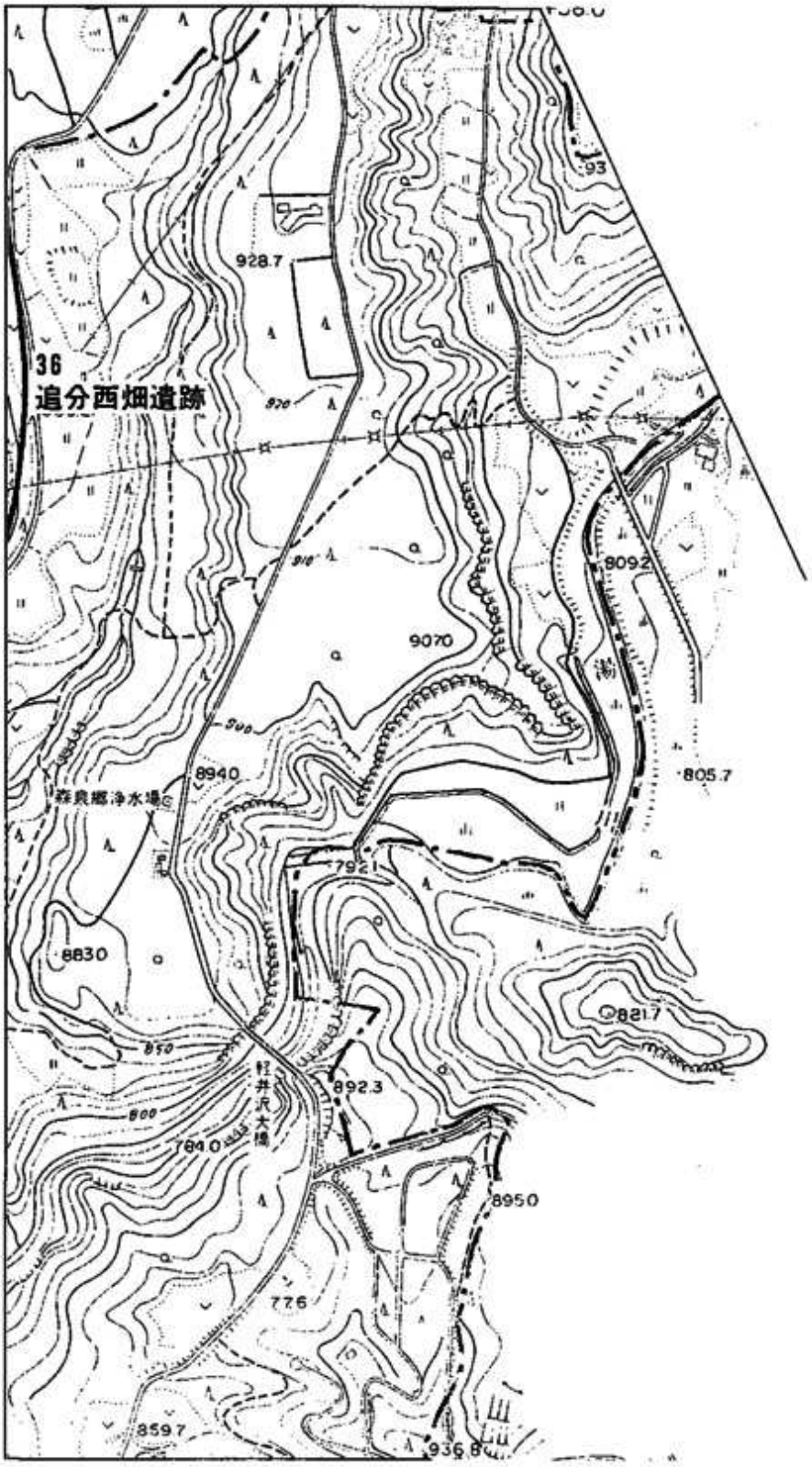
(11)

(13)



38
御代田池尻遺跡
39
広戸城
遺跡
北屋敷
遺跡
22
21
下屋敷
遺跡
23
面替遺跡
24
面替
小谷ケ沢遺跡
25
清水平遺跡
64
頭槌城
遺跡

(11)


36
追分西畑遺跡
928.7
920
910
900
850
800
9070
8092
805.7
8940
森泉郷浄水場
792.1
8830
821.7
892.3
軽井沢大橋
784.0
8950
776
859.7
936.8

ルイス・ビンフォード……235
流布本……361
レプリカ法……189
連歌……536
炉……117
炉跡のいろいろ……208
炉内埋設土器……209

わ

倭国……265
倭国大乱……274
倭人……265
和銅開宝……439
侘び茶……540
和名類聚抄……**361**・423
割竹形木棺……307

前田遺跡の初期須恵器……355
前藤部遺跡……446・**496**
磨製石剣……181
橋口……383
馬瀬口城……521
馬瀬ロルート……371
松節遺跡……268
間取り……213
眉庇付冑……312
丸子真智成……365
丸鞆……432
万年通宝……439
三河田大塚古墳……322
神子柴・長者久保石器群……37
神子柴・長者久保文化……35
水島の戦い……471
未醤（味噌）……425
三ツ寺Ⅰ遺跡……308
美理……363
三原荘……474
御牧……378
御牧ケ原窯址群……391
耳飾り……145
耳形土製品……153
耳取大塚古墳……322
宮崎遺跡……181
宮平遺跡……**128**・174・203
宮平城……512・**517**
宮ノ反遺跡……366
宮ノ前遺跡……188
妙楽寺……447
民者城……514
向城……517
武蔵甕……427
武舎加賀守……516
武者城……514
宗良親王……484
無文土器……33
村上満信……486
めがね塚古墳……327
女鳥羽川式……170
殖……309
牧監……379
木製のクシ……431
木炭窯……391
望月太郎……473
望月牧……386
以仁王……468
木棺……300
戻場遺跡……174
物くさ太郎……539
茂理……363
森将軍塚……307
諸磯式……66

や

八重原窯址群……391
矢柄……185
焼町土器……85～92
家地頭一号墳……322
谷地城……514
八ケ岳の崩壊……445
矢出川遺跡……25
山寺……449
大和政権……309
山上億良……394
山内清男……158
山寄せ古墳……322
八幡一郎……203・254・**325**
結城氏朝……487
結城合戦……488
有舌尖頭器……36
湧別技法……25
遊行上人……524
弓……186
弓振日向遺跡……22
養老令……369
横穴式石室……317
横田河原の戦い……470
吉ケ谷・赤井土式土器……279
吉田式土器……276
四隅突出墓……303
依田窯址群……391
依田城……517
嫁入り婚……241

ら

烙印……436
絡条体圧痕文土器……50
里制……360
里倉……406
律書残篇……361
隆起線文土器……**33**・37
降線文系土器……32
隆平永宝……439
領国……506
令制東山道……368
臨済宗……525・536

畑作……293
秦部乎麻呂……410
八条院……467
八稜鏡……432
八科口……436
抜歯……241
八風山遺跡群……22
離れ国分……409
離山式……170
馬寮田……380
晩期初頭の土器……166
晩期の気候……161
晩期の土器……164
晩期の暦年代……160
班田収授法……358・406
坂東山遺跡……155
ハンマーストーン……17・18
燧鉄……430
ピエスエスキーユ……68
東荒神遺跡……32・57・421
比企能員……475
樋沢式……48
髀……425
菱野……467
聖……523
聖原II遺跡……343・412
ヒスイ……234
人形祭祀……452
日向林B遺跡……22
火熨斗……436
樋村遺跡……338
百万町歩開墾計画……359
百万町歩の開墾計画……455
氷期……26
氷期の動物……26
兵範記……450
平底土器……57
平原城……507
微隆起線文土器……32
ビルビル・ヤポフ族……239
広戸城……514
広畑遺跡……383・415
貧窮問答歌……394
プエブロインディアン……239
深沢タイプ……80
福井洞穴遺跡……31
復元住居……120
複式炉……211
父系家族……410
父系合同家族……410
父系直系家族……242
高豪の髻……457
富寿神宝……439
藤原純友の乱……459
伏盧……394
布施駅跡……374
浮線文（浮線網状文）……170
蓋状土製品……143
吹付遺跡……227
太型蛤刃石斧……294
プリニー式噴火……442
古城……517
古屋敷遺跡第IV群土器……50
プレヒストリック・ジャパン……254
文化の歴史……15・16
墳丘墓……301
平均死亡年齢……242
平氏政権……461
平治の乱……468
偏光顕微鏡……243
便所……350
扁平片刃石斧……294
方形周溝墓……301
方形墳丘墓……301
保元の乱……460・467
北条氏の滅亡……509
紡錘車……430
彭頭山遺跡……258
補完石材……249
墨書土器……436・525
卜占骨……298
牧田……384
母系制……241
細久保式……48
細田遺跡……289
細田塚古墳……325
法華至上主義……525
掘立柱建物……401
北方系……37
北方系細石刃石器群……34
仏岩期……27
堀之内式土器……141

ま

マードック……40・60・236
埋葬馬……387・389
マイマイ井戸……512
前掛期……27
前田遺跡……340

炭素同位体の年代測定……36
檀那……492・529
単龍環頭大刀……318
短粒米……258
蕃銭叙位令……440
千曲川の合戦……458
地方政治のみだれ……456
茶の湯……539
中世の城館……509
中男作物……423
中右記……441・443・450
長秋記……441
長年大宝……439
長粒米……258
塚田遺跡……339
塚田古墳群……324
鉄器……260
鉄製短甲……311
鉄鏃……430
鉄斧……294
寺……449
伝応神陵……311
天竺様……539
天神山の女人結界……530
伝仁徳陵……311
天皇……317
伝馬……370
天明の浅間焼け……443
転用硯……432
堂……449
道元……525
唐三彩……432
東山道……368
当山派……537
刀子……430
銅鐸……298
陶枕……432
陶馬……452
徳川・北条氏の抗争……508
土坑……300・404
伴野荘……456
渡来系……268
登呂遺跡……257

な

ナイフ形石器……21・23
長倉郷……377・415
長倉猿助……512・520
長倉神社……446
長倉・諏訪神社……447
長倉寺……386・413・448
長倉駅……371・374・376・413
長倉牧……385・413
中沢目貝塚……186
中筋遺跡……350
中先代の乱……482
中道式土器……60
長峯古墳群……322
長屋王邸跡……423
中屋敷遺跡……57・420
梨子沢城……516
縄張り図……522
南蛇井増光寺遺跡……287
南方系……37
南北朝の内乱……483
濁り遺跡……407
二次加工……18
西荒神遺跡……420
西駒込遺跡……79
西城……481
日蓮……525
日蓮（法華）宗……525
日蓮宗……537
日本……317
日本書紀……367・378
女人結界……531
仁和の大洪水……445
布目瓦……448
ねかせ……238
根岸窯址群……391
根井大弥太……460
根井小弥太滋野行親……469
根井行親……467・469
粘土の採集……237
年輪年代学……265
野嘉子長者……533
野火付遺跡……387・389・494

は

配石遺構……152・203
羽釜……427
馬具……316
剝片……17
伯万私印……412・434
箱式石棺……300
箱清水式土器……276
土師器……425
橿原式土器……278

人類学雑誌……253
人類の家系図……16
水銀朱……234
水田跡……293
須恵器……313・425・427
須恵器窯……391
鋤鍬先……430
頭槌城……516
ズニ族……239
住まいの変化……205
磨石……68・431
磨石・石皿……104
擂鉢……431
諏訪信仰……526
諏訪神社……526
諏訪御符札之古書……500
世阿弥……536
生業活動……29
精製土器……136
青銅器……260
石核……17
石材の変化……246
石刃技法……23
石錘……68
石製模造品……319
石槍石器群……35
石鏃……36・67・103・185
石棒……198
関屋遺跡……57・420
関山式……64
摂関政治……359・454
石器の製作技法……18
石器文化……18
瀬戸内技法……23
瀬戸焼……535
繊維土器……59
前期旧石器時代……20
前九年の役……459
善光寺修行……478
善光寺信仰……525
泉珠院……528
禅宗……536
尖底土器……57
前方後円墳……307
前方後方墳……307
前葉・中葉・後葉……29
草鞋山遺跡……258
双系家族……410
双系制……241
倉庫群……406
宋書……312
早・前期の土器の胎土……243
草創期・早期・中期・後期・晩期……29
草創期土器……32
曹洞宗……525・536
双龍文環頭大刀……318
粗製土器……136
曽谷式土器……143
曽利古式II段階……96
曽利式土器……93・139

た

大化の改新……357
台形様石器……21
大工……436
醍醐三宝院系……537
胎土分析……242
太平山元Ⅰ遺跡……31
大宝律令……358
大文字一揆……485
平忠常の乱……459
平将門の乱……459
高根社……479
滝沢遺跡……77・131・227
瀧ノ峯一・二号墳……321
田切り地形……28
武田信虎……502
武田晴信（信玄）……503
竹花遺跡……439
田篠中原遺跡……151
多縄文系土器……33
打製石斧……68・102
敲石……68
他地域進化説……16
立野式……47
竪穴式石室……307
竪穴住居……296・348・395
竪穴建物……494・496
立科F遺跡……22
蓼科神……451
楯築墳丘墓……302
縦長剥片ナイフ形石器……21
竪堀……520
田戸上層式……48
田中良之……241
棚畑遺跡……108
樽式土器……279
垂れ飾り……145
短甲……312

さ

細石刃……25・34
再葬墓……300
在来系……37
左右馬寮……466
坂本駅……377
佐久郡……360・465
佐玖郡……360
佐久郡の行政区画……466
佐久郡の郷……361
佐久系土器……140
佐久の郡衙……365
佐久の武士……460
座光寺・中島式土器……278
殺牛馬祭祀……452
佐野Ⅰａ式……168
佐野Ⅰｂ式……168
佐野Ⅱ式……168
佐波理……434
猿楽能……536
三経義疏……313
三国志……274
三世一身法……359・455
三田原遺跡……147・229
讃・珍・済・興・武……312
三内丸山遺跡……126
塩野城……520
塩野西遺跡群……54・77
塩野牧……382・466
塩野山遺跡……383
塩野ルート……371
志賀城の攻防……503
敷石住居……149
式内社……446
瓷器の道……368・393
支脚石……399
滋野一族……469
時宗……524・536
支石墓……300
私鋳銭……441
科野国……360
信濃国……360
信濃国府……364
信濃の御牧……381
清水駅……371
清水駅跡……371
下荒田遺跡……289・419
下原古墳……325
下聖端遺跡……424
下弥堂遺跡……55・227
下茂内遺跡……35・225
遮光器土偶……176
斜行沈線文土器……83・84
煮沸用の土器……193
住居空間の利用……216
住居の拡張……223
集石土坑……227
集団……249
騶馬の党……377・457
修験道……528
出産数……242
狩猟具……195
巡方……432
承久の乱……476
書院造……539
饒益神宝……439
定額寺……447
貞観永宝……439
聖護院系……537
条痕文土器……264
正倉……366
浄土宗……536
浄土真宗……536
浄土系（念仏系）宗派……523
城之腰遺跡……56・77・416・479
承平・天慶の乱……459
称名寺式土器……140
縄文時代……29
縄文時代遺跡の消長……230
縄文時代草創期……31
縄文時代の気候……126
縄文時代のはじまり……37
縄文土器の用途……193
承和昌宝……439
初期荘園……455
諸国牧……379
女性の仕事……60
初頭・前葉・中葉・後葉・末葉……29
新羅……311
進化の歴史……15
神功開宝……439
人工品……16
新人……20
神体山……451
神名帳……446
人面付注口土器……176
真楽寺……420・449・451・525
真楽寺の仁王像……490・527

貫頭衣……297
神流川の戦い……507
神奈備信仰……528
観応の擾乱……484
間氷期……26
寛平大宝……439
技術と技法……24
魏志倭人伝……267
寄進地系荘園……455
木曽義仲……468
北佐久地域の考古学的調査……203
北西ノ久保遺跡……**286**・337
北西ノ久保古墳群……322
北原式土器……271
北村遺跡……**153**・200
狐山大権現……532
旧碓氷峠説……377
旧人……20
旧石器時代……15
廐牧令……389
居館跡……308
玉蔵岩遺跡……258
漁労具……195
近世の城……511
近都牧……379
クグリ岩……511
草茂荘……455
百済……311
沓掛説……376
国飼馬……379
口分田……**358**・406
久保田遺跡……219
熊野牛王宝印……537
熊野先達……529
黄馬……379
倉……**401**・436
倶利伽羅峠……471
栗毛坂遺跡群……407
栗林遺跡……156
栗林式土器……269
黒斑期……27
群集墳……318
クン・ブッシュマン……232
軽元素食性分析法……101
計帳……409
慶派仏師……534
玦状耳飾り……68
原人……18
元和文書……533
建武政権……482
小荒城……520
後期旧石器時代……20
後期末の土器……166
後期弥生土器……274
工具……195
高句麗……311
高山寺本……361
交渉圏……234
荒神沢遺跡……181
郷制……360
郷倉……406
高地性集落……267
郷里制……360
氷遺跡……178
氷Ⅰ式……171
氷Ⅱ式……173
後漢書……**267**・274
戸擬制説……410
国衙領……455
刻書土器……436
黒曜石……234
御家人……473
後三年の役……460
恠……**425**・427
古事記……367
古式群集墳……318
戸実態説……410
戸籍……409
古代の食品……423
古代の料理……425
骨角器……196
古東山道……367
詞書……534
後鳥羽上皇……476
古墳時代の土器……351
小棒木……534
駒飼の土堤……386
駒留の土堤……384
駒牽……382
小諸第一軽石流……28
小諸第二軽石流……28
小諸光兼……473・**474**
御料所……507
婚姻……241
今昔物語集……457
健児の制……454
墾田永世私財法……**359**・455

王位継承儀礼……308
大井……363
大井郷……413・415
大井郷長倉保……415
大井郷長倉里……415
大井宗家の没落……501
大井太郎朝光……475
大井荘……456・467
大井光矩……485
大内寺……417・448
大坂勝義麻呂……365
大坂真長……365
大塔合戦……486
大伴神社……446
大野荘……455
大平寺・大内寺……525
大平寺……417・448
大棒木……534
大洞C２式後半の土器……170
大峰山……530
大村……363
大室古墳群……318
小笠原長清……474
小笠原長秀……485
小笠原政康……487
屋外埋甕……211
刑部……363
刑部公鏡鍛……491
押型文土器……46
小田井城……503・511・512
小田井説……374
小田井原合戦……503
小田井又六郎……511・512
小田井ルート……371
小田切の踊り念仏……524
踊念仏……524
小沼（小治）……363
帯金具……432
苧引金具……430
お宮の森裏遺跡……42・225
男女倉遺跡群……24
遠賀川式土器……263

か

海獣葡萄鏡……434
海退現象……163
開発領主……455
灰釉陶器……393・427
核領域……232
勘解由使……454
鉸具……432
梶原城……481
鍛冶炉……404・499
春日信仰……533
春日本地仏……533
加曽利Ｅ１・曽利古式Ｉ段階……95
加曽利Ｅ式土器……137
加曽利Ｅ式・大木式土器……93
加曽利Ｅ２式古……96
加曽利Ｅ３式古……97
加曽利Ｅ２式新……96
加曽利Ｅ３式新……97
加曽利Ｂ式土器……142
家畜……297
合掌形石室……318
金井城……512
金刺舎人八麻呂……380
金の尾遺跡……279
鎌……430
雷神……450
雷神信仰……450
鎌倉仏教……523
鎌倉文化……523
カマド……314・347・398
カマド祭祀……450
上高森遺跡……18
上野遺跡……31
神ノ木式……64
亀ケ岡式土器……158
甕棺……300
唐草文系Ｉ段階……96
唐草文系II段階……96
唐花見泥炭地……162
唐沢岩陰遺跡……187
ガラス質安山岩……22
ガラス質黒色安山岩……234
唐様……539
仮廬の宿……409
カリンガ族……237
軽井沢群……492
軽石流期……27
かわらけ……498
川原田遺跡……77・200・227・417
観阿弥……536
乾元大宝……439
環濠集落……263・267
環状構成……107
『漢書』地理誌……265
完新世……39

索　引

●ゴシックは関係記述の多いページを示した。

あ

相木中衆……501
アイソトープ食性解析法……101
阿江木氏……501
青沼（青冶）……363
赤山陣屋跡遺跡……183
阿形……537
朝日長者……533
浅間山麓の巻狩……474
浅間B軽石……441・**443**
麻間峯……441
浅間山噴火……441
アスファルト……234
アフリカ起源説……16
雨境祭祀遺跡……367
余部……363
編物石……344
荒砥二之堰遺跡……219
新水B遺跡……**42**・225
飯玉神社……447
池尻遺跡……415
石神遺跡……175
石川条里遺跡……445
石行遺跡……189
石釧……309
石匙……68・**196**
石附窯址群……345
石附窯……391
石槍……**24**・35
和泉陶邑窯……392
遺跡の消長……229
伊勢宮遺跡……150
伊勢物語……371
板碑……538
市村弾正……514
一結構……492
一遍……524
一遍上人絵伝……**525**・535
井戸……403
稲倉……403
稲作の受容……188
鋳師屋遺跡群……387・394・**413**
入山峠……377
入山峠祭祀遺跡……367
岩下遺跡……129・**152**・229
院政……**359**・454
上杉憲政……487
上田原の合戦……505
上野原遺跡……24
鵜ヶ島台式……49
宇治川合戦……477
後平遺跡……225
後野遺跡……31
碓氷関……378
碓氷峠……377
碓氷の坂……378
馬の生産……316
駅……**370**・373
駅制……369
埋甕……155
埋甕炉……209
瓜生坂祭祀遺跡……367
漆紙文書……439
吽形……537
永享の乱……487・**488**
栄西……525
永舜王丸……**489**・501
柄鏡形敷石住居……148
柄鏡形敷石住居跡……147
駅子……373
駅長……373
駅田……373
駅馬……373
英多神社……446
NGマンロー……253
延喜格式……454
延喜式……359・360・379・**446**
延喜通宝……439
宴曲抄……478
円形周溝墓・円形墳丘墓……301
円孔文土器……32
円面硯……432
御井戸遺跡……181
追分火砕流……**372**・385・412・415・441・444
追分論……492
追分説……376

御代田町誌『歴史編上』関係者名簿（敬称略）

監修者　長野県考古学会会長　桐原　健

執筆者名簿

桐原　健	序　章	
角張　淳一	第一編―第一章	
〃	〃―第二章―第一・二・八節	
水沢　教子	第一編―第二章―第三・四・五・九節	
本橋恵美子	第一編―第二章―第六・八節	
中沢　道彦	第一編―第二章―第七節	
堤　隆	第一編―第二章―第八・十節	
	第二編―第三章	
小山　岳夫	第二編―第一章	
〃	〃―第二章	
	第三編―第一章―第二・三・四・五節	
	第三編―第一章―第一・二・三・四節	
郷道　哲章	第三編―第一章―第一・二・三・四節	
大井　源寿	第三編―第一章―第五節	
さかいひろこ	各編中扉イラスト・本文主要イラスト	

刊行会名簿

会　長	（御代田町長）	栁澤　薫
副会長	（議会議長）	重田　惇
〃	（教育委員長）	市川多喜男
委　員	（助　役）	市川　誠
〃	（議会副議長）	古越　儀一
〃	（議会総務常任委員長）	中山　美博
〃	（教育委員長職務代理）	栁澤　光雄
〃	（教育委員）	吉田　末広
〃	（〃）	古越ますい
〃	（教　育　長）	柳沢　忠良
〃	（文化財審議委員長）	内山　俊雄
〃	（文化財審議副委員長）	小林　太郎
〃	（文化財審議委員）	小林　五郎
〃	（〃）	内堀　徹
〃	（〃）	田村　泉
〃	（〃）	萩原　弘祐

委員（　〃　）　荻原　範仁
〃（　〃　）　大井　源寿
〃（　〃　）　桜井　為吉
〃（区　長　会　長）　小林　清助
〃（校　長　会　長）　下平　郁夫
〃（編　纂　委　員　長）　上原　邦一
〃（編　纂　委　員）　尾台　和雄

教示者

井出　正義　白田　武正　大林　博美　岸本　道昭
須藤　隆司　諏訪間　順　早田　勉　田中正治郎
土屋　長久　坪井　清足　寺内　隆夫　花岡　弘
原田　昌幸　樋口　昇一　藤沢　平治　星野　保彦
村田　健二　山下　大輔　吉井　雅勇　綿田　弘実

資料提供者・機関名簿

大井　源寿　重田　学　山本　宗補　若林　弘子
井出　演子　由井　茂也
喜多院　神護寺　大澤酒造民俗資料館
㈱細見美術財団　朝日新聞社　新潮社　中央公論社
東京大学史料編纂所　㈱長野県埋蔵文化財センター
天理大学附属天理図書館　長野市埋蔵文化財センター
埼玉県立埋蔵文化財センター
小諸市郷土博物館　松本市立考古博物館
長野市立博物館　菅平研究会　軽井沢町教育委員会
望月町教育委員会　戸倉町教育委員会
小諸市教育委員会　佐久市教育委員会
更埴市教育委員会　飯田市教育委員会　長野県教育委員会
巻町教育委員会　十日町市教育委員会　亜崎市教育委員会

あとがき

平成二年を初年度として始まった御代田町誌の刊行事業は、図説・自然・民俗の各編につづき今回、歴史編　上巻を上梓する運びとなりました。

編纂様式は年代順に組む編年体として、上巻の範囲を原始から古代・中世までとして、執筆者をお願いして平成二年六月の初顔合わせ、翌月には刊行年次を平成九年と決定、八月に町内外の史跡・景観の巡検から始めました。翌年二月には分担内容や項目だてに入り、五月の会議で執筆分担の確認や区分を調整、ダブリや取り落とし項目のないよう打ち合わせをいただきました。

その後は各執筆者ごとに、史料調査や発掘参加・遺物調べ、その他で執筆準備をいただき、草案や下書きも始めていただきました。平成八年ころからは草稿持ち寄りで、読み合わせや検討会をもち、文体・表記・記載のトーン調整をしました。刊行年次から逆算して、稿の提出は平成九年春を目処としてご無理を願い、編纂側の修正をお返しして完全稿としていただきました。編集には特に上巻範囲の内容に詳しい堤・小山両学芸員をわずらわし、土・日までも返上した寧日なしのご苦労をいただき感謝のほかありません。

今まで御代田町域の原始から中世に至る分野の調査や報告は乏しく、文献や発掘例も少なかったことが実情でありました。加えて浅間山麓の南斜面という場所は、太古以来の火山噴火による火砕流などの堆積が厚く、また集中豪雨・雪害・鉄砲水・台風災害などで、かつての人の歩みの証拠となる遺物や遺跡などについては、埋没・流失・原形を留めておらないという心配もされ、史資料不足や調査困難からの期間延長も考えられる場所でありました。

だが、御代田町域の遺跡発掘は、昭和四十九年の馬瀬口下原古墳群調査から始まり、平成に入って小田井鋳師屋遺跡群発掘調査などが続き平成九年のめがね塚の学術調査発掘まで約三〇回に及び、原始から中世をほぼ網羅した調査となりました。その結果、縄文土器工芸の極致とも言われる「焼町式土器」の発見ともなりました。さらに近年の考古関係の研究や調査は、科学的な分析や高度な史料調査に発展して、見えないものまでが見えるようになりました。

一例をあげますと、

・赤外線の透視や写真、土壌分析による植生復元、人骨分析による食生活再現や家族構成の理解、蛍光X線分析による土器産地の確定、顕微鏡写真による石器の使用方法の解明、C14による年代測定、土器圧痕のレプリカによる種子など形・大小・種類の明示、その他の科学調査や学際的分野の活用など。

これらの応用は本書のなかにも出てまいります。こうした考古学調査のハイテクニックや研究の技法や手立の応用が、かつて見えなかったものを見、辿れなかった原始人の歩みと文化の解き明かしにも力あるものとなり、本書の内容充実の一助ともなりました。

こうした本書の執筆にあたられた方々には、いずれも現職にありながら休日や余暇までも注ぎ込み、精力的な踏査・調査・文書検討や、執筆にあたってくださったことに対して、深甚なる謝意を表明いたします。

終わりに、多年にわたり史資料調査や発掘などに、ご協力ご支援など格別なご尽力をたまわりました関係者の皆々様、編集にあたり貴重な史資料や写真など掲載を許可していただきました出版社や所蔵者、閲覧や貸与の機会を与えてくださった各位に、心から感謝申し上げあとがきといたします。

平成十年三月

御代田町誌編纂委員長　上原　邦一

御代田町誌　歴史編上

— 原始・古代・中世 —

平成十年三月三十日　発行

編纂者　御代田町誌編纂委員会

発行者　御代田町誌刊行会

印刷　第一法規出版株式会社
信越支社　長野市岡田町一七六
電話〇二六-二二六-四九〇一

発行所　御代田町誌刊行会
〒三八九-〇二〇六　長野県北佐久郡御代田町
大字御代田二四六四-二
電話　〇二六七-三二-三一一一
FAX　〇二六七-三二-三九二九

■本書の掲載記事及び収録写真は許可なく転載複写をお断りします。